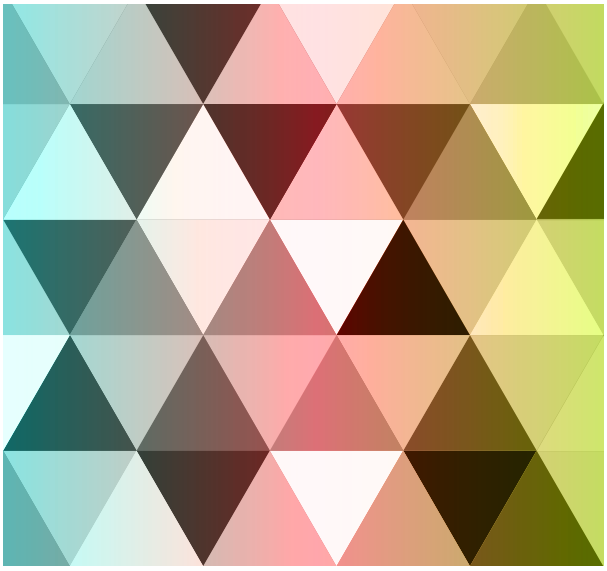
九州産業大学
建築都市工学部
Year Book

2023-2024



Architecture
Housing and Interior
Civil and Urban Design Engineering

目次

2023 年度イベント一覧 2

建築都市工学部の紹介 4

教員紹介／学科の特色 6

- 建築学科 6
- 住居・インテリア学科 8
- 都市デザイン工学科 10

研究室紹介 12

- 建築学科 12
- 住居・インテリア学科 17
- 都市デザイン工学科 22

施設紹介 27

OB・OG 寄稿 28

学生寄稿 34

- 建築学科 34
- 住居・インテリア学科 34
- 都市デザイン工学科 35

進路実績紹介 36

- 建築学科 36
- 住居・インテリア学科 38
- 都市デザイン工学科 40

資格実績紹介 42

博士前期課程
研究課題および指導教員 44

卒業研究 46

- 建築学科 46
  -2023 年度　優秀作品
- 住居・インテリア学科 62
  -2023 年度　優秀研究
- 都市デザイン工学科 78
  -2023 年度　優秀研究

建築都市工学部
全国高等学校プロジェクトコンテスト 81

- プロコンについて 81
- 総評および各賞コメント 83
- 入賞作品紹介 86

教員・学生受賞一覧 93

オープンキャンパス紹介 94

- 建築学科 94
- 住居・インテリア学科 95
- 都市デザイン工学科 96

課外活動紹介 97

- こどもけんちく道場 97
- ABC 建築道場 98
- 九産大野生動植物研究会 99

2023年度イベント一覧

4

入学式（4/1）

5

6

九産大建築レクチャーシリーズVol.49「時代を超える建築」(6/10)
小田切駿/主催ABC建築道場

7

九産大オープンキャンパス（7/16、23）
7/16、7/23の２回来場型で開催

8

9

学生が設計した障がい者グループホームの完成記念式典（9/8）
福岡市城南区
住居・インテリア学科　教授　香川治美

奥能登国際芸術祭２０２３（石川県珠洲市）
インテリア・アート「あかりのありか《のと》」作品採択・出展 (9/23～11/12)
住居・インテリア学科　准教授　諫見泰彦

九産大建築レクチャーシリーズVol.50「outline」(9/26)
山田紗子/主催ABC建築道場

映画『アアルト』公開記念トーク
「アアルトの建築・デザインとその思想」(9/30)
池袋コミュニティ・カレッジ20番教室
住居・インテリア学科　教授　小泉隆

10

「ふじの壮 202号室・203号室リノベーションデザイン住民発表会」(10/7)
女子学生２名の卒業研究取り組みによるDIY施工実施
住居・インテリア学科　准教授　信濃康博

ABC建築道場の展2023（10/16～10/27）
会場：九州産業大学8号館1階メモリアルホール
主催：ABC建築道場/矢作研究室

映画「アアルト」トークイベント付き上映（10/21）
KBCシネマ
住居・インテリア学科　教授　小泉隆

11

香椎祭（11/3～11/6）
九州産業大学第6回建築都市工学部
全国高等学校プロジェクトコンテスト

北九州からニューヨークへ「少しはみだしてみたい」
その勇気がデザイナー・起業家の道へ（11/29）
インテリアデザイナー吉田恵美氏特別講演
会場：九州産業大学1号館S201教室
主催：建築都市工学部

12

1

九州産業大学景観研究センター20周年記念シンポジウム
"美しい国"の商業・アート・景観CONCLUSION（1/10）

九州産業大学卒業設計講評会（1/21）
会場：九州産業大学８号館3階プレゼンテーションルーム
主催：建築学科
企画運営：ABC建築道場/矢作研究室

2

無人駅の芸術祭／大井川２０２４（静岡県島田市・川根本町）
インテリア・アート「あかりのありか《ＯＩ》」作品採択・出展（2/10～3/17）
住居・インテリア学科　准教授　諫見泰彦

九産大建築レクチャーシリーズVol.52「認識の中にある場所」（2/12）
畑友洋/主催ABC建築道場

「山王マンション301号室」塗装ワークショップ（2/17）
住居・インテリア学科　准教授　信濃康博

3

学位授与式　（3/15）

「ふじの荘　202号室・203号室DIYリノベーション完成内覧会」
女子学生２名の卒業研究取り組みによるDIY施工
住居・インテリア学科　准教授　信濃康博

Faculty of Architecture and Civil Engineering

建築都市工学部

建築学科｜住居・インテリア学科｜都市デザイン工学科

西日本初の建築、住居・インテリア、都市・土木を総合的に学べる学部。

これまで分野、資格、法律などが縦割りに分断されていた3領域を総合的に扱うことで、国土の強靭化、循環型まちづくり、グリーンインフラ、住環境ストックの有効活用などの現代的な課題に対し、住空間から都市まで横断的に活躍できる人材を育てます。

アドミッション・ポリシー （入学者の受け入れ方針）	建築都市工学部は、工学における基礎的知識をベースに、国土から住まいまで連続する空間のあり方を追求する広い視野を持ち、多様な社会ニーズに応えることのできる実践的能力を有した人材養成のため、次の人材から、基礎的な知識や適性を多面的・総合的に評価し、入学者選抜を行う。 1.建築都市工学に関する学修意欲が高い人 2.物事を多面的に考察し、自分の考えをまとめることができる人 3.建築都市工学分野において卓越した能力を持っている人

学びの特長Ⅰ

3学科全ての学生が受講できる学部共通科目

建築都市工学部では、工学における基礎的知識をベースに、住居からこの国の風景まで、連続する空間のあり方を追及する広い視野を持ち、多様なニーズに応えることのできる実践力を有した人材養成のために、3学科全ての学生が受講できる学部共通科目を設置しています。

【学部共通科目一覧】

- 建築都市入門
- 建築デザイン
- 建築製図Ⅰ
- 建築製図Ⅱ
- 保存修景計画
- グリーンインフラ論
- 基礎測量学
- プログラミング入門
- インターンシップ
- 職業指導
- 工業概論

学びの特長Ⅱ

学科連携による資格取得教育の充実

建築士資格は、3学科の学生全員が目標にできます。学科間で教員が協力し、充実した資格取得教育を実現します。そのほかの資格についても、各学科の専門性を生かして取得をサポートします。

学びの特長Ⅲ

地域貢献プロジェクト型教育の推進

まちづくり、空き家問題、災害に強い建築設計、新しいインテリア・家具の提案など、実社会の課題を積極的に学部・学科で取り組み、教員、学生がプロジェクトグループを結成し、実践的に学びます。

福岡市東区の団地リノベーションプロジェクト

Topics

充実した教授陣による実践教育で高い就職率を実現

建築家、空間デザイナー、各委員、研究者など、実社会で活躍する多様な教授陣が学外連携の教育を実践し、高い就職率を誇っています。

学生による活発な課外活動を積極支援

ABC建築道場、九産大野生動植物研究会など、様々なサークルが活動。実務家を迎えてのセミナーなども活発に企画・開催しています。

教員紹介 | 建築学科

研究分野

建築構造・材料

研究テーマ

教授
UCHIDA KAZUHIRO
内田　和弘

コンクリート系構造物の
応力伝達機構に関する研究

研究分野

建築構造・材料

研究テーマ

教授
SHIRAKAWA TOSHIO
白川　敏夫

鉄筋コンクリート構造物の耐久性とその評価方法に関する研究

研究分野

建築構造

研究テーマ

教授
HANAI NOBUAKI
花井　伸明

鉄筋コンクリート造建物の
安全性に関する研究

研究分野

建築計画
建築意匠

研究テーマ

教授
YAHAGI MASAO
矢作　昌生

建築空間に関する研究および設計活動

研究分野

建築構造・材料

研究テーマ

准教授
KANG WOOJA
姜　優子

建築の耐震構造に関する研究

研究分野

建築環境・設備

研究テーマ

教授
KITAYAMA HIROKI
北山　広樹

都市・建築における快適環境の形成とエネルギー有効利用に関する研究

研究分野

建築史・意匠

研究テーマ

教授
TOMITA HIDEO
冨田　英夫

ドイツ近代建築史

研究分野

都市計画

研究テーマ

教授
HITAKA KEIICHIRO
日髙　圭一郎

景観まちづくり
防災まちづくり

研究分野

建築計画、
建築社会システム

研究テーマ

准教授
OHBA　TOMOKO
大庭　知子

地域ストック活用

研究分野

建築環境・設備

研究テーマ

准教授
KUMA YUKO
隈　裕子

数値解析，建築環境解析，建築起源の CO_2 削減・省エネルギー

建築学科の取組みや特徴

■経験豊富な講師陣による充実した専門教育
■実践型の教育カリキュラム
■高い就職先の質と就職率

住宅をはじめ、文化施設、高層ビル、建築遺産、街、地域、都市環境など、領域が幅広いのが建築学です。そこで安全性や耐久性を学ぶ「構造・生産系」、空間の快適性や省エネを学ぶ「環境・設備系」、デザインや空間の機能性を学ぶ「計画・歴史系」の３つの専門的視点から、体系的にアプローチします。各分野の考え方や相互の関係を学修し、建築業界あらゆる分野で輝ける多様なエンジニアを育成します。

［各系の特徴］

■構造・生産系
- ●コンクリート系構造物の応力伝達機構に関する研究
- ●鉄筋コンクリート構造物の安全性に関する研究
- ●建築災害の低減・防止に関する研究
- ●建築物の耐震設計・耐震改修に関する研究

■環境・設備系
- ●生活空間の快適性に関する研究

■計画・歴史系
- ●まちづくりと都市政策
- ●居住計画に関する研究
- ●建築の歴史の研究
- ●確かな設計能力を身に付ける実践教育

［４年間の学びの流れ］

1年次 ▶ **学びの基礎づくり**

建築の原点である住宅を題材に「見て、触って、造る」体験学習で建築学を学ぶための基礎をつくります。

2年次 ▶ **専門的な学びの基礎づくり**

「計画・歴史系」、「環境・設備系」、「構造・生産系」のそれぞれの分野において、進路と興味に応じた専門分野を学修します。

3年次 ▶ **専門分野を選択・学修**

希望する専門分野の研究室に入り、専門知識や技術をより深く修得します。

4年次 ▶ **将来（就職・進学）に向けての活動**

卒業研究では、卒業論文または卒業設計を選択します。

計画・歴史系／環境・設備系／構造・生産系

建築設計製図I
設計演習の導入科目として、造形演習課題、図面模写、模型製作、CAD演習などを行い、建築設計の基礎的な力を養います。

住宅設計
「住宅」の設計プロセスを通して、環境を読み取り、生活を思い描き、発想し、形にし、図面化することを学びます。

建築デザイン製図
設計課題を通して、設計・計画、構造・材料・構法、環境・設備の各専門分野を総合的に設計作品にまとめる能力を養います。

卒業設計
自ら課題を発見し、リサーチし、基本構想、計画・設計、プレゼンを行い、「考え・つくり・伝える」建築力を養います。

教員紹介 ｜ 住居・インテリア学科

研究分野
建築環境・設備
環境工学
教育工学

研究テーマ

教授
KAGAWA HARUMI
香川　治美

快適で健康的な居住環境デザインのための教育・研究
ICT を活用した教材開発・研究

研究分野
建築計画
デザイン学

研究テーマ

教授
KOIZUMI TAKASHI
小泉　隆

インテリア・建築・都市を対象とした空間デザインおよび北欧デザインに関する研究

研究分野
建築計画・建築設計
都市デザイン

研究テーマ

教授
FUKUYAMA HIDECHIKA
福山　秀親

業務系施設デザインに関する研究

研究分野
建築計画
住生活学

研究テーマ

教授
MATSUNOO YOSHIMI
松野尾　仁美

居住地選好及び居住ライフスタイルに関する研究、福祉住環境に関する研究

研究分野
都市計画・建築計画
こども環境学

研究テーマ

准教授
ISAMI YASUHIKO
諫見　泰彦

アート・サイエンスコミュニケーションと地域貢献に関する踏査および実践研究

研究分野
都市計画・建築計画

研究テーマ

准教授
SHINANO YASUHIRO
信濃　康博

産学連携プロジェクトによる再生・活用・リノベーションの実践と研究

研究分野
建築計画　デザイン学

研究テーマ

講師
KONDO TAKESHI
近藤　岳志

家具空間デザインの研究と設計、耐震化に関わる家具・建具の開発研究

研究分野
建築計画（建築人間工学）
デザイン学

研究テーマ

講師
YOSHIMURA YUKI
吉村　祐樹
2024 年 3 月 31 日退任

建築空間・設備機器・家具の快適性や安全性に関する研究

研究分野
建築計画・意匠
住宅論

研究テーマ

特任教授
YANASE MASUMI
柳瀬　眞澄
2024 年 3 月 31 日退任

住宅における「心地よい」空間を実現する建築設計手法

■学科の学びの特色

住居・インテリア学科では、2022 年度から「空間設計のスペシャリストを育成する」独自のカリキュラムがスタートしました。その特徴は次の通りです。

1．空間設計のスペシャリストを育成

建築都市工学部における住居・インテリア領域の中でも、①人々を包み込む基本的な空間、②人々が住まう住居、③オフィスや商空間といった業務系施設のインテリア、④住居と業務系施設を複合した住居系複合施設のインテリアの４つに対象を絞り込んだ設計教育を設計基幹科目として位置づけます。その上で、住居・インテリア領域における上記の４つを対象とした設計の専門家たる人材養成を目指しています。

2．アドバンスド科目でプログラムを選択し、専門性・総合性を修得する。

１・２年次に前述の空間設計を学ぶ設計基幹科目とともに、住居・インテリア領域の基盤となる科目を学修します。１・２年次の時から将来の進路選択を考え、興味・関心のある専門分野を探索します。３年次からは、専門プログラムもしくは総合プログラムを選択します。専門プログラムでは、スペシャリストを目指し、専門性を高めるためスタジオに所属、総合プログラムでは、プロジェクトリーダーの役割を担えるジェネラリストを目指し、総合的な視点で学習を進めます。各プログラムでは、専門的あるいは総合的知識及び技術・技能を学修します。

3．社会的な課題解決を目指した、実体験できる学びの場

デザインサーベイ実習、プレゼンテーション実習など実体験ができる豊富なカリキュラムを用意。さらに、地域コミュニティや企業との共同プロジェクト、ICT を活用した工学実習など、地域や社会とのつながりの重要性を、実体験を通して学びます。ユーザーの声を聞き、実物をデザインする機会があるのも本学科の強みです。

■ 2023 年度の学科の TOPICS

当学科の教員６名が執筆した「日本の名作住宅」に関する専門書が、2024 年２月に建築系大手出版社より刊行されました。本書は、1920 年代から 1970 年代に作られ、今なお現存する貴重な日本の名作住宅を解説したもので、主に 2016 年から 2017 年に行った現地調査と調査後の作図作業には、当時在籍していた 15 名の学生を含め 19 名の学生が携わりました。この書籍は、優れた住宅作品を普段体験することが難しい学生たちのために、設計授業のサブテキストとしての使用も予定されており、建築分野への進学を目指す高校生にも読んでもらいたい専門書にもなっています。執筆者：小泉隆、松野尾仁美、福山秀親、信濃康博、吉村祐樹、近藤岳志

写真１　書籍表紙

■卒業後の進路

2023 年度の主な進路実績は以下の通りです。
（株）一条工務店、（株）河村・佐藤デザイン、（株）柴田建築設計事務所、（株）船場、大旗連合建築設計（株）、大東建託（株）、大和リース（株）、（株）野口豊高建築構造設計、パナソニックホームズ（株）、（株）菱熱、リーメック（株）。※五十音順

■目指せる資格

卒業後すぐに一級建築士、二級建築士の受験資格を取得可能です。大学院在学中や卒業後数年以内に、２級建築士を取得する学部卒業生もいます。その他、インテリアコーディネーターや宅地建物取引士に挑戦し、在学中に合格する学生が複数います。

教員紹介 ｜ 都市デザイン工学科

研究分野
生態学・緑化工学

研究テーマ
自然環境の保全・再生・修復および創出

教授
UCHIDA TAIZO
内田　泰三

研究分野
地盤工学

研究テーマ
発生土や副産物の地盤工学的有効利用

教授
HAYASHI YASUHIRO
林　泰弘

研究分野
土木材料
コンクリート構造工学

研究テーマ
多機能コンクリート部材の開発に関する研究など

教授
MATSUO EIJI
松尾　栄治

研究分野
土木環境システム

研究テーマ
流域治水と雨庭に関する研究、文化的景観の計画と管理に関する研究

教授
YAMASHITA SAMPEI
山下　三平

研究分野
水環境工学，応用生態工学，グリーンインフラ

研究テーマ
水環境の改変と生物応答，AI を用いた環境評価，市民参加型環境管理

准教授
IYOOKA HIROKI
伊豫岡　宏樹

研究分野
水環境工学，河川工学，グリーンインフラ

研究テーマ
自然の機能を活用した流域管理に関する研究，AI/IoT 技術による洪水予測

准教授
SATO TATSURO
佐藤　辰郎
2024 年 3 月 31 日退任

研究分野
耐震工学
構造工学

研究テーマ
設計の想定を超える規模の地震作用に対する橋梁全体系の崩挙動特性の解明とその評価法の確立

准教授
OKUMURA TORU
奥村　徹

研究分野
水工水理学
海岸工学

研究テーマ
沿岸域の防災と海域の利用に関する波や流れの研究

准教授
YOKOTA MASAKI
横田　雅紀

研究分野
社会システム工学
安全システム
自然災害科学

研究テーマ
災害対応及び対策の実証的研究

准教授
YAMADA TADASHI
山田　忠

■学科の概要

都市デザイン工学科は1964年に九州産業大学工学部（当時）に設置された「土木工学科」に端を発した学科です。社会の基盤となる鉄道、道路、港湾・空港、河川、上・下水道などの経済・社会生活を支える公共施設をつくる技術を学ぶとともに、公園、緑地、自然環境などの厚生空間を整え、人間を含む生物一般が共に生きられる環境のデザイン力、計画力を身につける学舎でもあります。

さらに近年は、地球規模の環境問題、気候変動、それとも連動する大規模災害への対策が急務であり、そのための新しい知識と技術が求められています。本学科ではこれら新旧の課題について学ぶことができ、必要な資格が得られるようにカリキュラムの工夫をしています。

■都市をデザインするプロフェッショナルの育成

本学科の特色の一つは、都市防災や生物多様性など社会的要望の大きいテーマについて「土木デザイン」「都市防災」「まちづくり」「環境緑化」の４分野を軸に学修するカリキュラムがあることです。

■地域の文化と自然を活かすワークショップ

二つ目の特色は、様々な地域連携の実践です。

たとえば、近隣地域で登山道を住民・行政・本学教員・学生が共同で活用策を考案するワークショップを実施しています。そこではまた、古民家を空き家対策でリノベーションしたり、竹林の山を灯明祭で文化的に活用したりするなど、持続可能な地域をつくる支援と連動したプロジェクトを行っています。

■自然災害と折り合う社会のために

九州では毎年のように発生する豪雨災害をはじめ、熊本地震や桜島の噴火など自然災害が頻発しています。気候変動もあり激化が予想される自然災害に対しては、自然環境がもつ防災・減災機能を活用するグリーンインフラの導入が重要です。本学科では都市型水害による被害をグリーンインフラによって低減する新技術（雨庭など）や、斜面崩壊を低減する草木の導入などについて、行政・産業界と共に研究を進め、社会に提案しています。

■目指せる資格

また、在学中に「建築士」が受験できること、「測量士補」や「環境再生医（初級）」の資格を登録申請により取得できることなども本学科の魅力となっています。

このほか、土木施工管理技士（二級は在学時に受験可）、建築施工管理技士、造園施工管理技士、管工事施工管理技士、ビオトープ管理士などの技術者資格（二級）を、最短で取得するための体系的なカリキュラムが導入されています。

高等学校教諭一種免許状（工業）なども特徴として挙げられます。

■就職先について

卒業後、就職して活躍する分野は多岐にわたります。民間会社としては、建設コンサルタント業・建設業・住宅/不動産会社・高速道路会社・鉄道会社・電力会社・造園業など多岐にわたります。

また、官公庁（国土交通省・都道府県・市町村・警察・消防など）や学校（大学・高校教員）も人気の就職先となっています。

実習の様子

研究室紹介 | 建築学科

内田研究室（構造解析ゼミナール）

安全な構造物を作るためには、構造物のことをもっとよく知る必要があります。内田研究室では、様々な力を受ける構造物や構造部材の挙動を解析的に明らかにすることが大きなテーマです。

内田研究室では、解析手法として、構造設計にも利用される構造解析や材料レベルからモデル化を行う有限要素法解析（FEM解析）を用います。３年生でゼミ配属になると、有限要素法の勉強を開始します。ゼミでは毎回、プレゼン形式で輪講を進めます。４年生になると、研究室会議で、毎週の研究の進捗状況をプレゼン形式で報告し、みんなでディスカッションします。内田研究室ではプレゼンに次ぐプレゼンです。また、３年生歓迎会に始まり、４年生の卒研の節目節目に、その他、夏合宿、最終発表会、最終提出、追い出しコンパと、飲み会に次ぐ飲み会です。とても充実した２年間を送ることができます。

2023 夏合宿（日帰りバーベキュー）

夏合宿は、2020～2022年の間、コロナ禍により中止しましたが、2023年に日帰りバーベキューとして復活しました。飲み会も復活。

北山研究室（建築設備ゼミナール）

建築や都市の環境・設備分野の研究室です。快適でエコな環境創造は大切な命題ですが、研究室では“Think Globally, Act Locally”を合言葉に、様々な空間スケールでの課題に取り組んでいます（図１参照）。

2023年度の４年生は16名で、多くが設備工事業（サブコン）や総合建設業（ゼネコン）へと進みました。取り組んだ卒業研究のいくつか紹介します。「**RC建物のカーボンニュートラル化に関する研究**」では、建設時と運用時のRC構造体によるCO_2吸収量を見積もりその可能性を検討しました。「**大学施設でのエネルギー消費量とCO_2排出量の研究**」では、本学の過去５年のエネルギー消費量を整理し、類似施設との比較、コロナ禍前後の動向などを分析、特性を明らかにしました。「**学校教室での空調・換気設備の最適運用の研究**」では、継続して長期実測しているデータから設備の運用法と教室環境の調節について分析、提案を行いました。「**センシングによる可視化とマイコン制御による環境調節の研究**」では、居室の空気・温熱環境、照度などを自動計測し、その結果から空調・換気設備や照明設備の運用をマイコンで自動制御します。高齢者の熱中症予防や自然採光の積極的利用に寄与できればと思っています。

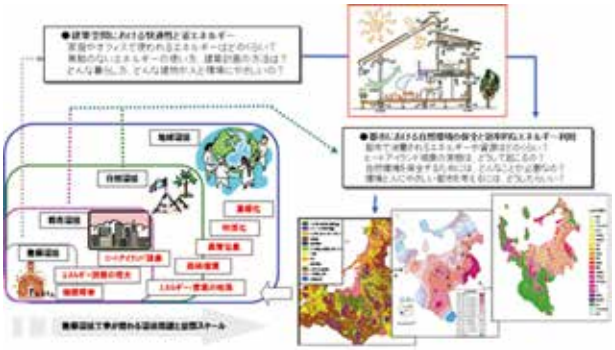


図１　研究対象のスケールと環境問題

■白川研究室（建築材料構法ゼミナール）

本研究室は，建築材料や構法などを専門分野としています。研究としては，鉄筋コンクリート構造物の耐久性予測，補修補強材料の評価，新たな仕上げ材料の開発などを行っています。行っている研究の一部について研究の背景と内容を紹介します。

現在、多くの建物が存在し、また、建設されています。日本全国での建築土木分野で使用される工事額は、五十五兆円程度ですが、この内、年々維持修繕工事の比率は高まっており、28％が維持修繕工事に使用されています。維持修繕工事を行うには、建築物の躯体部分の劣化程度（耐久性）を診断することが必要となってきます。

そこで、本研究室では、非破壊で建物の劣化状況を予測することができる「表面吸水試験装置」を開発し、その有用性を検証しています。写真１に研究室で開発している「表面吸水試験装置」と既に実用化されている「透気試験装置」を使用し、実構造物を調査している様子を示します。この装置を使用し，鉄筋コンクリートの耐久性を評価する方法について他の大学と共同で検討も行っています。

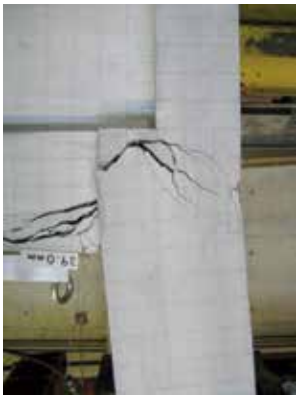
写真１　表面吸水試験装置による実構造物調査

■花井研究室（コンクリート系構造ゼミナール）

鉄筋コンクリート造は、建物のさまざまな構造種別の中でも主要な構造のひとつです。また、地震国・日本において、地震に強い建物を造ることは重要な課題です。花井研究室・コンクリート系構造ゼミナールでは、鉄筋コンクリート造の建物について、建物を構成する部材や接合部の加力実験を通じて、設計法や性能評価方法について研究しています。

これらの研究成果は、日本建築学会「鉄筋コンクリート構造計算規準」といった建物の設計基準に反映されています。

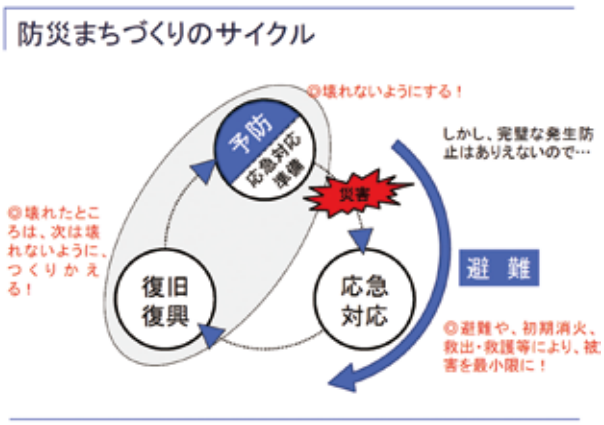
また、企業と共同で、鉄筋コンクリート造の建物の新たな耐震補強工法の開発にも取り組んでいます。



■日髙研究室（都市政策ゼミナール）

日髙研究室は、都市計画を専門とする研究室です。1999年度に開設されました。1999～2006年度までの８年間は、CADやCGによるコンピュータ支援によるビジュアライゼーションを主な研究テーマとし、その活動の中では、景観研究センターとの連携により、小型CCDカメラを活用したシュノーケルカメラシステムの開発等を行ってきました。

その後は、『景観まちづくり』や『防災まちづくり』をテーマとした都市計画研究を軸にして卒業論文等の指導を行っています。近年の卒業論文等では、『景観まちづくり』研究として「景観法制定前後の景観形成基準の変化に関する研究」「絵になる景観の視点場環境に関する研究　-筑後画壇の描いた風景画を事例として-」等、「防災まちづくり」研究として「地域による地震災害予防・減災活動に関する研究」、天神地区等のエリアマネジメント組織との共同研究として「エリア防災の推進に関する研究」、「雨水貯留浸透技術を活用した分散型水管理による防災まちづくり」等の研究に取り組んでいます。



■冨田研究室（建築歴史ゼミナール）

冨田英夫研究室（建築歴史ゼミナール）では、近代の建築・都市理念の地球規模での影響関係に注目し、つぎの［1］［2］［3］をメインプロジェクトとして研究しています。

［1］20世紀ドイツの建築芸術学校バウハウスの教師・卒業生たちの地球規模での建築・都市設計にかんする研究

［2］中世・近世・近代のドイツ語圏地域における曲線・曲面を使った建築形態のCGを用いた形態分析（ドイツ後期ゴシックの反転曲線リブやフライ・オットーのグリッド・シェル構造の研究）

［3］日本人建築家第一世代（とくに九州出身の辰野金吾、曽禰達蔵、岡田時太郎）の建築手法の研究

『きたれバウハウス』展（東京ステーションギャラリーほか、2019-2020）への協力（カタログ執筆など）

■矢作研究室（建築デザインゼミナール）

建築デザイン・設計を専門分野とする研究室です。実践教育を主眼としており、課題や研究活動においても、学生の提案内容が実際の社会でどのような意義があるか、あるいは実現可能であるか、意識しながら指導を行っています。３年次のゼミでは、少子高齢化、グローバル化、環境問題、SDGs、ウィズコロナなど、その時々の社会問題について話し合い、学生がそれぞれ社会への眼差しを持ち、建築で何ができるのか徹底的に議論を行います。他には、建築家を選択して、作品や思想を調べて議論を行い、建築家の住宅作品をCGや模型で再現して、その建築家が意図したことを読み解くなど、実践的な修練を行います。

そのような修練の集大成として行う「卒業設計」では毎年「SDL卒業設計日本一決定戦」に挑戦しており、2016年には元村文春さんが日本二、2020年には田所佑哉さんが11選に入選しています。

田所佑哉さんの卒業設計作品「便乗する建築」

■大庭研究室（建築ストック活用ゼミナール）

私たちの住む身近な地域には、多くの使われていない建物が存在します。その種類は、住宅（戸建て、集合住宅）や店舗、診療所、学校など様々であり、建物の歴史や所有者、築年数、構造、規模、敷地、周辺環境、地域課題等も異なります。それゆえに、「建築ストックの地域活用」には決まった正解がありません。また、これらストックは、適切に管理されなければ私たちの生活によくない影響を及ぼします。しかし、管理・活用の工夫により、地域の衰退緩和や活性化に繋げることができます。リノベーションは地球環境保全に貢献する選択肢とも言えます。

大庭研究室は、2021年度より始まった新しい研究室です。建築ストックとその周りにある地域資源（自然、歴史、文化、慣習、人材等）のコラボレーションによる地域づくりの仕組みを研究していきます。フィールドワークを中心に活動し、詳細な調査・分析に取り組み着実に研究成果を積み重ねていきます。

（主な研究テーマ）

・民家再生(空き家活用）システムに関する研究
・農泊の持続可能性に関する研究
・地域施設の適正配置計画に関する研究

松山市の戸建て住宅を活用したシェアハウスの実測調査の様子

■姜研究室（耐震構造ゼミナール）

巨大地震に対して備えるためには、新築建築物の耐震設計の高度化だけではなく、既存建築物の耐震性能を評価して適切な対応をすることも重要な課題となります。耐震構造ゼミナールでは、新築建築物の耐震設計法、新構法の開発、既存建築物の補強方法などを研究しています。

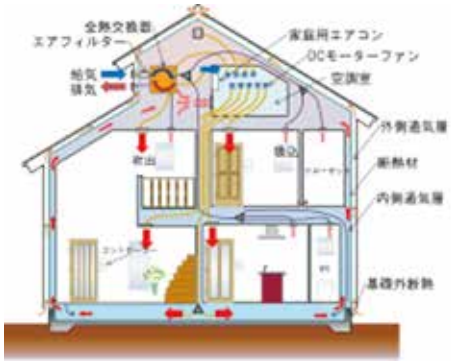
・有開口耐震壁の圧力場を考慮した耐力評価式の提案
・W-Eco SYSTEM：省資源・長寿命化を目指した小型PCaパネル打ち込み型枠構法の開発
・中村式鉄筋コンクリート造建築の調査・記録および解析
・デザインの保護を重視した近代建築の耐震補強の方法と近代遺産の保存活用
・建築学習教材の開発

KSUプロジェクト型教育として、様々な団体と外部連携を行い、次世代の人材育成にも取り組みながら、学生自身のスキルアップに繋がるような活動を行っています。

（写真）黒崎こども商店街

■隈研究室（建築環境ゼミナール）

快適性と省エネルギー性の両方に優れた住環境デザインをどのように実現するかということを考えて研究をしています。建物を使用する際の温湿度環境や暖冷房で消費するエネルギー量（電気代）の算定をコンピュータシミュレーションで行い設計に反映させます。また、省エネルギーや脱炭素に向けた動きとして、全館空調システムに自然エネルギーである太陽熱を取り入れることで暖房、給湯、浴室乾燥などで消費するエネルギーの削減をします。そのプロジェクトでは、気候特性の異なる6地域に建設した実証住宅のすべてで43～92%の負荷削減を達成しています。



全館空調システムのイメージ

実証住宅の外観写真

■香川研究室（居住環境デザインスタジオ）

専門分野

◇建築環境工学・感性工学（・設備工学・教育工学）

◇快適で健康的な居住環境デザインのための研究

主な研究テーマ

◇主観と客観による快適と健康の総合評価

◇住環境性能評価機能をもつ3DCAD開発

◇地域共創型の課題解決

研究室の取り組み方針

平成28年4月以降、学生の進路（進学、就職、留学、独立、後継…）や将来の夢と、先進的な研究内容とのユニークなつながりを探り続けています。

卒業生の主な進路

#㈱アサヒファシリティズ #石垣市建築局 #大橋エアシステム㈱ #亀屋硝子㈱ #㈱河村佐藤デザイン #九州産業大学 #㈱九電工 #㈱JRシティ大分 #㈱笹戸建築事務所 #昭和建設㈱ #㈱新日本設備計画 #㈱スエナガ #須恵町役場 #セキスイハイム九州㈱ #大英産業㈱ #大東建託㈱ #大和ハウス工業㈱ #髙藤建設㈱ #㈱竹中工務店 #中設エンジ㈱ #㈱ディークオン #ナフコ㈱ #㈱ピースホーム #福岡エネルギーサービス㈱ #丸栄化工㈱ #㈱菱熱 #森松工業㈱ #悠々ホーム㈱ #㈱よかタウン

皆様のご支援に深謝申し上げます。香川 治美

写真　2023年度の取り組みの一部

左から：住環境計測装置　デコ柱　ソロワークブース

障がい者向けグループホームの設計・計画から実現まで

■小泉研究室（空間デザインスタジオ）

□インテリア・建築・パブリックスペースなどを対象とした空間デザインに関する研究とその実践活動を主たる専門とする研究室。近年は、北欧の建築・デザインの調査研究を基に、それらをまとめた書籍作りや展示会の開催、講演活動などに注力。自然光や人工光による空間演出の研究も、継続研究として重視。ゼミでは、専門内容に関する卒業研究や卒業設計、並びに関連する講義や実習、現地調査などを実施。学生が自主的に熱意をもって研究・実践活動を行える環境を大切にしている。

□主な書籍、展示会、講演等：『北欧のパブリックスペース 街のアクティビティを豊かにするデザイン』2023年、『北欧建築ガイド　500の建築・都市空間』2022年、『アルヴァ・アアルトのインテリア　建築と調和する家具・プロダクト』2020年、『北欧の照明　デザイン＆ライトスケープ』2019年、『アルヴァ・アールトの建築　エレメント＆ディテール』2018年、『北欧モダンチャーチ＆チャペル 聖なる光と祈りの空間』2017年、『北欧の建築　エレメント＆ディテール』2017年、「北欧の灯り展　照明デザインから見る灯りの文化」2019年・日本フィンランドデザイン協会と共催・新宿リビングセンターオゾン・長野県小海町高原美術館、NHK　Eテレ「趣味ドキッ！ステイホームを心地よく… ぬくもりの北欧スタイル 第6回おうちで実践！」出演・2021年1月13日、「北欧の灯り　～二人の巨匠：ポール・ヘニングセンとアルヴァ・アアルトを中心に～」講演・2019年12月11日・アルテック・ストア（青山）、映画「アアルト」トークイベント・2023年10月21日・KBCシネマ（博多）

■福山研究室（＋商環境デザインゼミナール・スタジオ）

『**領域・境界の形態**』を主題にした建築意匠学・建築計画学を基盤とする**設計の研究**を行う福山秀親主宰の研究室です。企業や地方自治体からの実施を前提にした設計・デザインの研究・設計実務を受託し、『**領域・境界の形態**』を主題にした建築意匠・建築計画論を実施の設計・デザインに繋げる方針で活動を行っています。

教育活動は研究活動とは分けて位置付けており、オフィスや商環境施設を『**領域・境界**』の視点・立ち位置から考察していきます。『**領域・境界**』を主題にした設計手法をゼミメンバーで深め、**新しい領域論・境界論**を示し、領域形成・境界面の形態操作を試み、**新しい建築・インテリア**の空間設計や概念操作に繋げていき、「卒業研究」で発展させました。卒業研究の形式は「**研究としての設計**（設計実習とは異なる）です。

境界の形態：E-project（商業・業務・住居複合施設）2025.竣工予定

■諫見研究室（地域貢献実践スタジオ）

スタジオで取り組む「積み木であかりのワークショップ～童話を題材とした読書感想光～」は、光源にLED、反射材・遮蔽材に積み木を使い、「照明の良否は光源・反射・遮蔽等のバランスによる」との知見を子どもたちが学ぶ、アーティストインレジデンス（芸術家の滞在型地域貢献実践）活動です。あかりの行事や光の現象を見ながら旅する紙飛行機の「こーき」が主人公の題材童話には絵がありません。それを子どもたちがLEDと積み木で読書感想光として表現し、絵本として完成させます。

本研究の成果は日本建築家協会ゴールデンキューブ賞組織部門特別賞を受賞するとともに、研究の一環である作品企画「あかりのありか≪のと≫」により、文化庁日本博･奥能登国際芸術祭（石川県珠洲市･写真）の出展者に、国内外191組（222作品）から選出されました。また、さいたま国際芸術祭（さいたま市）、科学技術振興機構・サイエンスアゴラ（東京都）、大井川鐵道･無人駅の芸術祭（静岡県島田市他）でも講義や作品出展を行いました。

作品企画「あかりのありか《のと》」（奥能登国際芸術祭）

■信濃研究室（再生デザインスタジオ）

■既存ストックの再生・活用・リノベーション

「今世紀に入り始まった“リノベーション現象”を手がかりに、既存ストックをいかに再生・活用することにより、私達が育ててもらった“まち”を次世代に引き継ぐことができるのか」が研究テーマです。

■何を学ぶのか

再生・活用・リノベーション時代に重要なのは、「文化的価値の上の文化的行為をいかに創造できるのか」です。リノベーションが生み出すライフスタイルの文化的価値は世界観を共有する人々を吸引する共感システムとして機能し、感度の高い人々を引き寄せ、いつしかエリアの再生＝まちづくりへと発展してきます。このような文化的構図を背景とした継続的な小さな取組の拡大が、育ててもらった“まち”を次世代に引き継ぐことにつながっていきます。

■産学連携プロジェクト

名島団地リノベーションプロジェクト

福間倉庫リノベーションプロジェクト

■松野尾研究室（住生活デザインスタジオ）

スタジオでは「住居」を中心に据え、主に居住ライフスタイルに関連するテーマを扱っています。実体験に重きを置く、かつ実践的な教育で、住宅に携わる建築技術者の育成を目指しています。

特に、木造建築文化に着目し、古民家を対象に、暮らし方調査や実測調査を通して、これらを地域資源として活かすための課題を分析しています。現在の住宅のあり方を考察するためにも、日本の歴史的文脈の中で培われた木造建築文化に触れる必要があると考え、そうした機会も設けています。

その他、少子高齢化が進行し、高齢者の一人暮らしや在宅介護が増加するなか、社会の変化に対応した住宅のあり方も研究のテーマです。高齢者や障碍者、そして誰もが過ごしやすい住環境を目指して、住宅、地域、福祉の３つの視点から、課題解決につながるよう取り組んでいます。

令和５年度は、（公社）福岡県建築士会から地域貢献活動への助成を頂き、（一社）柳川暮らしつぐ会と連携しながら、古民家の見学や解体ワークショップを実施しました。その他、鹿児島の住宅設計施工会社と連携した実務家から学ぶプロジェクトや小学生を対象としたワークショップも行っています。

写真　柳川での古民家解体ワークショップ

■吉村研究室（家具・什器デザインスタジオ）

家具や照明器具など空間に関わるモノを対象に、特に「建築人間工学」の視点から研究を進めています。建築人間工学は人間と建築空間・設備機器・家具等との調和（安全性や快適性等）を考える学問です。

当研究室では、学生と共に、次のことを行っています。⑴学生インテリアデザインコンテスト出展、⑵卒業研究（建築人間工学に関する研究）、ほか。本稿では活動の一部を紹介します。

⑴　学生インテリアデザインコンテスト出展

自らデザインした家具を制作し、外部からの評価を受ける機会を得るために、３年生の後期には、JID日本インテリアデザイナー協会南日本エリア主催「学生インテリアデザインコンテスト」に出展しています。2021年度は、「古材を活用した椅子」を提案した学生が奨励賞を受賞しました。審査員からお話を伺ったところ、座面や背板の寸法・角度・曲面がよく考えられており、身体へのフィット感が良かった。また、古材の荒っぽい見た目や印象と座り心地のギャップも含め、評価されたそうです。

⑵　卒業研究

主に建築人間工学分野の卒業研究を行っています。これまでの主な研究テーマ：高齢者のための木製安楽椅子の設計・製作～立ち上がり動作を考慮した肘掛けの位置に関する研究～／評価グリッド法を用いた浴室空間の評価構造に関する研究／携帯情報端末使用時の立位姿勢を補助する肘置き高さと前方壁奥行きの最適値を求める主観評価実験など。

■近藤研究室（家具空間デザインゼミナール）

2024年度より着任しました近藤岳志と申します。実務家教員として、住宅などの設計及び設計監理業務、造作家具や木製建具の製作・製作図作成などの経験を活かした研究を行っていきます。

今後、発展させていきたい研究については、以下の通りです。

①建物と一体化し、空間構成に大きく寄与する造作家具に関する分析と開発・製作に関する研究
②可変性のある家具に関する分析と開発・製作に関する研究
③耐震建具・家具を用いた木造住宅の耐震補強に関する研究

写真１「吹抜空間と TV ボード」

写真２「可変性のある家具」

■柳瀬研究室

「視えないものへの眼差し」

私は31才の時に建築設計事務所を開設して今年で、39年になります。建築の設計をやって１番良かったと思うことは、見ること、聞くこと、例えば映画を見ること、小説を読むこと、美術館に行くこと、特に旅をして建築や街を見て回ること等に、年をとっても常に新鮮な興味を失わずにいられることです。それはとても幸せな事だと思っています。建築は人の暮らし全般に密接に関わるものであり、上記のことが全て仕事の肥やしとなると思うからであります。

「住居・インテリア」の設計を学ぶことは、単に手先のテクニックを学ぶことではなく、人の暮らしとは何かを学ぶということです。「住居・インテリア」を学ぶことによって今まで見ていたものが、全く違ったものとして、新しい世界が見えてくる喜びを感じることと思います。

設計はその場に「在るものを活かし」「無いものを創造する」作業でもあります。「在るものを活かす」ことは、視えないものを発見する行為でもありましょう。そういった「視えないものへのまなざし」を大事にしていっていただきたいと思います。

別府の家

第17回建築九州賞 佳作作品
おおいた木の良さを生かした建築賞2023　優秀賞

研究室紹介 ｜ 都市デザイン工学科

内田研究室（生態工学ゼミナール）

研究方針

Conserve to preserve!　都市および農村の持続的発展には、開発のみでなく自然環境との共生が不可欠です。本研究室では、自然環境の保護・保全・再生・修復・創出に資する手法について、動植物の生理生態から研究を行っています。

キーワード：都市緑化・治山緑化・生物多様性

2023年度の卒業研究課題

・福岡市野鳥公園における生物相の変遷
・ネナシカズラの種子発芽ならびに栄養繁殖特性
・シカ不嗜好性植物を用いた道路法面緑化の評価
・阿蘇烏帽子岳における地域性種子を用いた登山道の修復
・唐原川における動植物相
・街路樹の植枡に侵入定着する植物群集の特性

立花山での実習

・Bee Hotelの国外における取組みと我が国への導入に向けて

研究室の活動 ―地域交流―

・唐原川のいきもの観察会（福岡市）
・小学校プールのいきものたち（立花小・勝馬小）
・オグラコウホネプロジェクト（新宮町）
・阿蘇波野写真展（阿蘇市）
・立花山登山教室（香椎下原小）

佐藤研究室（流域マネジメントゼミナール）

「水」をベースとして自然と人の営みが調和した、より豊かで持続的な社会の構築を目指して、実践的な研究やプロジェクトに取り組んでいます。

持続的な社会の構築に向けて、人口増加、高度経済成長をベースに培ってきた流域における住まい方を再考する必要があります。防災・減災、環境保全、都市・地域づくりを一体的に捉えた新たな流域マネジメントを実現していかなければなりません。そのためには、自然の持つ様々な機能をうまく使って社会課題の解決を目指すNbS（Nature-based Solutions）やグリーンインフラの考え方が重要となります。当研究室では、グリーンインフラの多面的な機能の評価や不確実性を補うための最新AI/IoT技術に関する研究、災害からの復興デザイン等に関する実践的な研究を行っています。

自然再生河川における魚類調査

災害後の小学校跡地利用に関するワークショップ

■松尾研究室（コンクリート工学ゼミナール）

コンクリートは社会インフラを支える重要な建設材料のひとつです。コンクリートの歴史は古く、ローマ時代から使われていました。ただ、現在とは固まるメカニズムが異なるため、正確には別ものと位置付けられています。近代のコンクリートは産業革命期に新たに発明されました。それでも19世紀前半からの長い歴史があり、基本的な技術はすでに確立されています。それでもその時々の社会背景に応じて研究する内容はまだまだたくさんあります。

写真 -1　卵殻が入ったモルタル

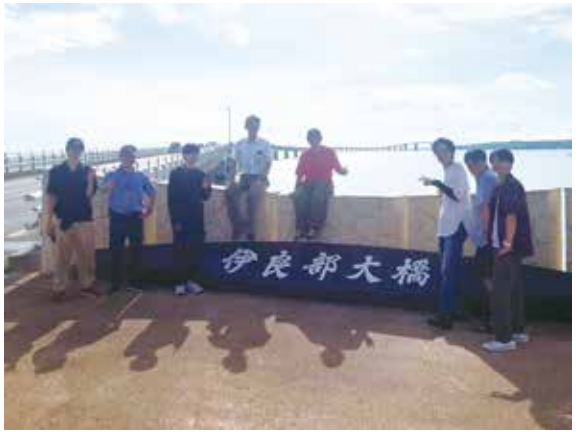
松尾研究室ではこのコンクリートに関する材料的あるいは構造的な研究を行っています。当研究室での最近の研究事例は、「マイクロ・ナノバブル水を練混ぜ水に用いたコンクリートの表層品質改善」、「卵殻を細骨材の代替に用いたコンクリートの特性」、「竹筋コンクリートに関する研究」、「非破壊試験による品質管理に関する研究」、「軽量コンクリートの開発研究」、などがあります。

実験が大変なときもありますが、研究室のみんなで一致協力して楽しく頑張っています。実験は主に９号館の１階でやっています。学生部屋は８号館４階にありますので、気軽に遊びにお越し下さい。

■林研究室（地盤工学ゼミナール）

地盤工学における主な研究対象は盛土などの「工学的材料としての土」と斜面災害などの「地盤そのもの」です。本研究室では、建設工事で発生する軟弱な土砂を盛土などの建設資材として活用するための土質改良材の開発や降雨などによって発生する斜面崩壊などの予測に関する研究を行っています。

研究の醍醐味は「自分のやりたいこと知りたいことを自主的に取り組めること」ですが、まずは土の特性を調べるための物理試験や力学試験、化学試験に加えて現地での調査などを経験することで、授業で学んだ知識や理論を実際の土や地盤のイメージと結び付けて土や地盤に興味を持ってもらいたいと思っています。また、工学分野の研究では社会的な背景や現状の技術を理解することが重要です。研究は個人で進めるだけでなく、企業や学会など学外の



宮古島への研修旅行

技術者や研究者と共同で行うこともあり、活動を通じてこれらの理解も深まります。

研究以外にも研修旅行、現場見学、他大学との合同ゼミ、学会発表、子供向け体験実験なども実施しています。様々な活動を楽しみながら大学生活での貴重な思い出を作れる研究室だと思っています。

■山下研究室（景観計画ゼミナール）

■研究室の方針

技術や思想は実践に応用されることで真価がわかります。本研究室では、学生とともに、社会が課題とするテーマについて、現場に入り、地域の人々や自然の状態を体験的に知り、それを大きな視野や科学的な手法によって捉え直し、対策を練って、実装するというプロセスを重視します。

本研究室の大きなテーマは次の２つです：

１）地球温暖化への適応と分散型水管理

２）伝統工芸の産地における文化的景観の持続と観光

市民のみなさんや行政や企業の技術者、それに他大学の研究者や学生との交流をとおして、幅広い実践的なプロジェクト型研究教育を進めています。

■研究室の雰囲気

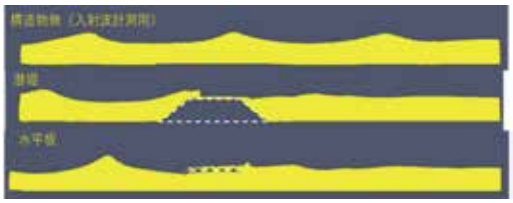
８号館４階の研究室・ゼミ室が、大学にみんながいる場所です。計画系の研究室なので、実験室はなく、研究室・ゼミ室ではおもに、研究の報告会、ゼミの研究会、PCを使った作業などを行います。

学内では研究室・ゼミ室のほかに、23号館４階の景観研究センターで、研究会やセミナーが開催されるときに参加して、学内ではなかなか聴けない貴重なお話を伺う機会がたくさんあります（写真は研究室で学内につくった雨庭）。

■横田研究室（海岸工学ゼミナール）

全国沿岸で課題となっている海岸侵食問題を解決する手法として、沖から来襲する波を減衰させつつ、沖向きの流れを発生させない、「透過型の消波構造物」を考案し、水理模型実験、数値シミュレーションによって効果の確認を行っています。また、波エネルギーは再生可能エネルギーとしての活用も期待されています。さらに、この消波型構造物に逆止弁付きの遊水室を設けることにより、新たな再生可能エネルギーの取得手法についても提案し、水理模型実験を行っています。

水理模型実験



数値シミュレーション

■奥村研究室（耐震・構造工学ゼミナール）

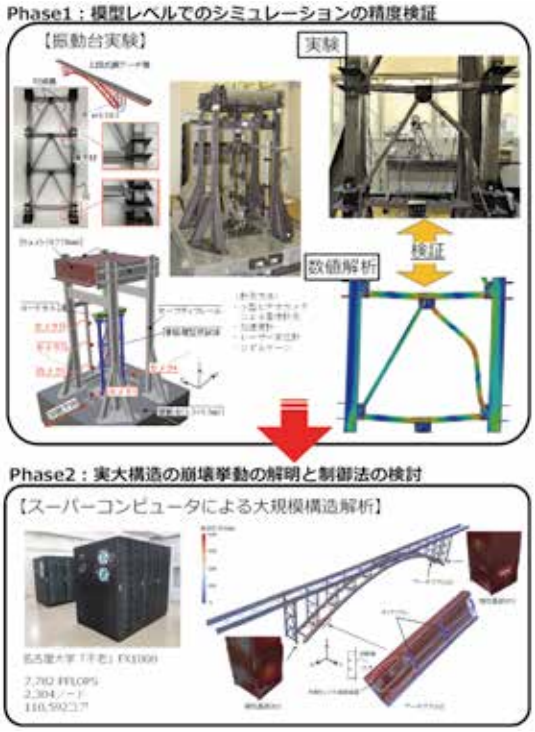
■研究の概要

橋梁の耐震設計では、あらかじめ規定した設計用の地震動に対して構造安全性や地震後の使用性・修復性等の耐震性能を確保します。しかし、設計の想定を超える規模の地震動が作用した場合に対して、構造物が崩壊に至るような致命的な被害を防止するためにはどうすればよいでしょうか？

従来、過去の記録を上回る巨大地震を経験するたびに設計用地震動の規模を引き上げるという対症療法的な対応がとられてきましたが、このような事後対応から脱却し、想定外の巨大地震に対しても構造物が致命的な大規模崩壊に至らないようにするための方策や設計法を確立していかなければなりません。

本研究室では、振動台実験や高度なシミュレーションにより、想定外の地震作用に対する次世代の耐震技術について研究を行っています。

本研究室の取り組みの一例



■山田研究室（防災計画学ゼミナール）

日本では毎年のように自然災害が発生しています。近年の九州地方に限っても2016年１月の大寒波、2016年４月の熊本地震、2017年７月の九州北部豪雨、2020年７月の豪雨などがあります。研究室では、災害に遭わないようにするための、もし遭っても被害を軽減するための教育研究活動、社会貢献活動に取り組んでいます。

2023年度の卒業研究では、2023年７月に発生した久留米市田主丸地区での土砂災害を事例にした住民の避難行動の分析、雲仙岳噴火災害の語り部を対象に語る内容の分析と活動の課題の把握、1953年西日本大水害を対象にした水害伝承の実態把握などに取り組んでいます。また、社会貢献活動では、学生とともに８月27日に「九産大公開セミナーin東箱崎防災まちづくり」を開催しました。

研究室にて防災を学びそして防災まちづくりに参加した学生は、国や地方自治体、鉄道会社、建設コンサルタント、建設会社に就職しています。３年間の主な就職先として、国土交通省中国地方整備局１名、大分県庁１名、東京都千代田区１名、諫早市１名、大刀洗町１名、西日本旅客鉄道㈱２名、大林道路㈱１名、ライト工業㈱１名、松尾建設㈱１名、㈱サンテックインターナショナル１名、㈱間瀬コンサルタント１名、日本都市技術㈱１名となっています。

写真　久留米市にある筑後川災害復旧記念碑

伊豫岡研究室（水圏環境システムゼミナール）

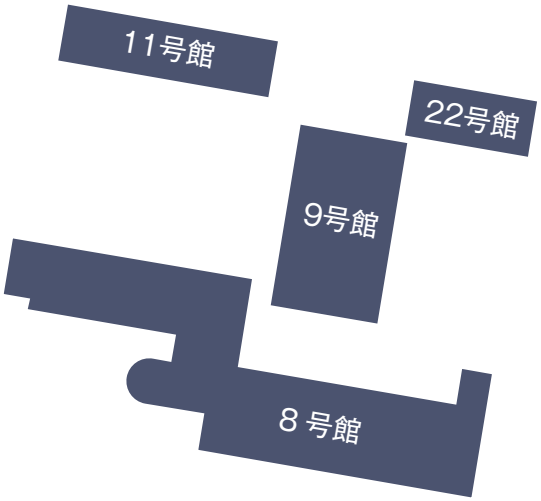
身近な水環境（河川、海浜、干潟など）を中心に人間活動と環境の両立ができる技術やまちづくりについて研究を行います。現地調査や現地サンプリングによって集められたデータを使って、物理環境と（人間を含む）生物の応答について理解することを基本としていますので、屋外での活動に積極的に参加できる学生に向いていると思います。ドローンや各種の観測機器った調査、AIやGISや数値計算などを使った解析を行いながら研究を進めていきますので、幅広い技術を身に付けることもできます。

また、研究と並行して地域活動や環境学習などの課外活動にも取り組む予定ですので、少し忙しいかもしれませんが充実した時間が過ごせる研究室にしたいと思っています。

室見川でのシロウオの産卵調査の様子

香椎浜での環境学習の様子

［建築都市工学部　施設一覧］



▲８号館外観

1998年に建替え新築が完了した８階建ての建物です。建築都市工学部の専門科目の多くはここで講義が行われ、ゼミ室等も配置されています。近年、エントランス廻りやトイレが改修されて綺麗になりました。

▲８号館円形ホール

半円形になったガラス張りの空間が特徴的で、待ち合わせや休憩スペースとしてよく利用されます。

▲８号館設計製図室

建築学科および住居・インテリア学科にはそれぞれ設計製図室があり、その名の通り設計デザインや作図の講義が行われます。
写真は、2017年に新しく完成した住居・インテリア学科の設計製図室です。

▲８号館プレゼンテーションルーム

名作照明や椅子が展示されており、パッチワーク状になった床材は実物を体感できるデザインの教材としても使用されます。オープンキャンパスは、アルネ・ヤコブセンデザインの「エッグチェア」に座れるチャンスです。

▲８号館食堂「クラブハウス」

“九産大”にちなんで、毎日93人目に当たるとお代が無料になります。
2023年４月に全面改装リニューアルオープンしました。

▲９号館

材料・環境実験などが可能な様々な実験設備が備えられており、実験系の講義や研究が行われます。また、木材加工のできる木工室などもあります。

▲22号館

実大立体構造物試験装置や400t万能試験機など大型の実験装置があり、様々な構造物の加力実験などを行うことができる施設です。

物事を捉える指標を培う

株式会社フジタ　長家　徹（2017 年度卒）

私が九州産業大学に入学して建築の世界に足を踏み入れたのは 2014 年の春のことです。早いもので 10 年が経ちました。現在はゼネコンの設計部門に所属し、主に規模の大きい建物の建築設計に携わっています。在学中の皆さんに向けて、私の仕事や社会人としての生活についての経験談を交えながらアドバイスをお伝え出来たらと思います。

まず、私が働いているゼネコンとは「総合建設業者」と呼ばれ、建築や土木の建設を手がける企業です。設計部門では物流施設、生産施設、住宅・宿泊施設、医療・福祉施設など、様々な用途の建物の設計や施工監理に携わっています。住宅メーカーの設計部門やアトリエ系建築設計会社、組織系建築設計会社など建築物の設計を担当する職場はいくつかありますが、私が考えるゼネコン設計部の魅力は大きく２つあります。１つ目に「幅広いプロジェクト経験」が挙げられます。様々な種類のプロジェクトに関与することで、設計者としてのスキル向上や広範な知識を得ることができます。次に、「技術とデザインの融合」があります。機能的で美しく、かつ効率的な建築物を設計するために、技術力とクリエイティブなデザイン力をバランスよく発揮することが求められます。これらの要素は設計職全体に共通していますが、ゼネコン設計部門では特に顕著です。また、実際の施工フェーズにも携わることが多く、これが自分の意図したデザインをどのような材料でどのような工法で作るのかといった実践的なスキル向上にも繋がっています。

私は学生時代から憧れていた建築の設計を職業にできていることにやりがいを感じ、誇りを持っています。一の建築物を取ってしても様々な視点で観ることができ、捉え方は多岐に渡ります。そのため経験を積むほどに新たな発見があり、いつまでも飽きません。これは仕事のみの話ではなく普段の生活や旅行などでも建築は関わってきますので、より一層充実した日々を過ごせているといっても過言ではないでしょう。

皆さんの中には明確な目標を掲げ大学生活を過ごす方もいると思います。しかし、私の場合は大学の入学当初から卒業時の姿や将来の方針がはっきりとしていたかというとそうではありません。そもそも、私が建築の設計職を志したのは、幼い頃からもの作りが好きだったことや母の家系が棟梁をしていたという理由しかありませんでした。今の自分が進んできた道を改めて振り返ると、学生時代に異なる環境に身を置いていたことが現在の自分に繋がる重要なことだったと思います。大学時代は水泳部と建築サークルに所属し、アルバイトも引っ越し屋やブライダルスタッフ、カフェの店員など様々なことを経験しました。そこで出逢う方々の影響や得られる経験から徐々に今後の進路を見出し、決断してきました。将来について漠然としたイメージしかないのであれば、それはそれでいいと思います。大切なことはいつか決断する時が訪れた時に自分にとって何が大事かを理解すること、タイミングを見失わないことです。

最後に、私が社会人になって思うことは場所や時間の制約上、活動の自由度は学生の時期には到底敵わないということです。これは多くの社会人の人が当てはまると思います。学生の時期に趣味や旅行に留学、アルバイトでも様々な異なる環境に身を置いていてみること。そこで得た経験は様々な角度から物事を捉える指標となって後の人生をより豊かにしてくれるはずです。限りある時間を有意義に使って多くのことにチャレンジしてみて下さい。狭い窓から世界を見るのではなく、物事を広く捉えることを意識して残りの学生生活を過ごしてくれることを願います。

仕事とやりがい、そして少しの誇り

株式会社安藤・間　原野紗都子（2018 年度卒）

今回、本誌に寄稿する機会を頂きありがとうございます。建築学科卒業生の原野と申します。私が大学を卒業してから５年、建設業界で働いて感じたことをご紹介させていただきます。

私は、現在【施工管理】として工事現場に出て日々職人さんと建物をつくるための管理をする仕事をしています。「物を建てる仕事をしたいな」と建設業にほんの少しの興味を持ったのは小学生４年生の頃。１／２成人式で将来の夢を発表するときに遡ります。当時はもちろん就職活動をするまで【施工管理】という職を知っているわけでもなく、ただ、設計やインテリアに興味がありました。在学中に建物をつくるには意匠、構造、設備、施工と様々な分野の知識が必要で、そのどれが欠けても建物はうまく建たないことを知り、実際に建物が建っていくところを間近で感じられる施工管理という仕事を選びました。

入社してから商業施設、映画館、学校、工場と様々な分野の現場に携わらせて頂いています。施工管理の仕事内容は様々で、工事の内容によって日々の仕事は変わってきます。ひとりでは絶対にできない仕事です。上司や先輩はもちろんたくさんの職人さんに助けてもらいながら仕事をしています。たくさんの人と仕事をするうえで一番大切だと思うことは“コミュニケーション”です。日々の会話や行動が信頼関係を築くことに繋がっていきます。いろんな人と会話をしてたくさんの情報を得て、工事の段取りを組み立てていきます。自分で計画したこと、調整したことがスムーズに行えるとパズルがパチッとはまったようで楽しいです。現場に出て改めてすごいと感じたことは、私たちが何気なく日々を過ごしている家も買い物をするスーパーも勉強をしている学校もすべてたくさんの人の手によってつくられているということです。当たり前に思うかもしれませんが、そんな私たちの衣食住の「住」を支えている業界が建設業界です。そこには何千、何万という人が関わっており、より良い建物をつくろうとしています。私たち施工者はもちろんお客様により良い建物を引き渡せるように日々管理をし、職人さんもその道のプロとして仕事をしてくれています。もちろん仕事は大変で、なぜこんなに頑張ってるんだろうと思うことも全てを投げ出したいときもあります。しかし、携わった建物が完成したとき、商業施設や映画館ではお客さんが楽しそうに過ごしているのを見て涙を流しました。学校で小学生が勉強しているところを見たとき、休み時間に楽しそうに遊んでいるのを見たとき誇らしい気持ちになりました。それだけやりがいがある仕事です。私は、この仕事に出会うことができてとても良かったです。一緒に仕事をしてきた上司、先輩、職人さんには感謝の思いでいっぱいです。現在は『誰かの生活の一部になる建物をつくり続けたい』をモットーに仕事をしています。

近年、働き方改革を言われていますが、建築も絶賛改革中です。IT 化が進み、私が働き始めて５年、以前より働きやすくなっているのを実感します。まだまだ課題はありますが、より良くなっていくと信じています。これから社会に出て様々な経験をする皆さんにもやりがいを感じることができるようにチャレンジしてみてほしいと思います。

選択の準備

atelier kubel アトリエクベル　外村　省吾（2013 年度）

大学を卒業してちょうど 10 年が経ちました。現在は個人で設計の仕事や、家具の製作等を行いつつ、外部の設計事務所の仕事も行っています。元々、大学進学も設計の仕事も興味がありませんでした。そんな私が、建築設計やインテリアに関する仕事をして生活をしている事が不思議でもあります。

高校生の頃、経済的に余裕がない家庭だった為、高校卒業後は就職を考えていましたが、両親は大学まで進学する事を勧めてくれました。理数系の科目が得意だったので、理系で学べる学問を調べたところ住居学・インテリアというあまり見慣れない学問を見つけました。当時、生活していた住居に対しての不満や、同じように苦しい住環境で過ごしている人にも、何か役に立てる事が学べるのではないかと思いました。その時ちょうど、住居・インテリア設計学科が増設されました。何かの縁だと思いました。

入学して最初の設計製図の演習は、思うように作図が出来ず苦労しました。その演習の最後の課題は、自分で空間を設計し製図・模型製作をする課題でした。初めて自分で考えたモノやコトを、他者に向けて発表する機会でもありました。演習を進めていく際に当時の担当教授から、最初は簡単なモノでいいからとにかく模型を作るようにと言われました。その次の講義で実際に模型を作ったのは私だけでした。本当に簡単な模型で、特に面白いモノでも発想があるものではありませんでした。ですが、その模型を元に担当教授と、どのように考えを深めればいいのか等を拙くとも話し合えた事を覚えています。製作した作品は建築学科の先輩達にも見てもらう事がありました。当時は同じ学科の先輩がいなかったので、学科の垣根を越えて先輩達と交流が出来たのはとても嬉しかったです。たまたま作った模型がきっかけで課外活動にも参加し、交流の場を広げる事が出来ました。興味の幅が広がり質も深まりました。

卒業後は教授の紹介もあって設計事務所で働く事が出来ました。住宅やクリニックの設計がメインの事務所で、仕事の数も多く大変でした。当時の先輩社員から言われた言葉で印象に残っている言葉があります。それは「失敗する事が君の仕事」です。若手社員のうちに色々失敗しておかないと後々失敗できなくなるよと、笑いながら話してくれました。今でも印象に残っています。出来るなら、大学生のうちからでも色々失敗すべきだったなと思いました。

社会に出てみると、余裕が無くなり自分が本当にやりたい事が分からなくなる時があります。そんな時に立ち返る原点の一つが、私自身は大学で学んだ事、関わった人です。そして、自分自身で選択してきた事の積み重ねが今の自分をつくっている気がします。勉強したい事を自分で選ぶ事。自分の時間をどのぐらい使うかを選ぶ事。それは有意義で幸せな時間だと改めて思います。大学生活はその選択の練習でもあると思います。

古民家改修

店舗カウンター製作

外の世界に触れること

建築設計事務所 DABURA.m 株式会社　柴田智帆（2022 年度卒）

本学を卒業して２年。私が建築設計を嫌いにならずに取り組めている理由の一つに、「建築以外」「同じ環境以外」の人々とのコミュニケーションを通して様々な視点や世界に触れる機会に恵まれていることがあると感じています。

学部時代は、小泉研究室や ABC 建築道場・北欧研究会での活動、外部コンペへの参加などを通して幅広い学びの機会をいただくことができました。学外の方とも触れあう機会が多く、同じ建築分野でも様々な価値観や視点・世界があることを知りました。卒業後は就職とも迷いましたが、もう少し広い視点を身につけ自分の進路を選びたいと思い、金沢美術工芸大学大学院へ進学。そこでは宇宙空間で使う製品デザインを研究している人、食事時間の UI/UX デザインをしている人など多種多様な分野で研究を行う同期と出会えました。彼らとコミュニケーションを行う中で得た気づきは、建築分野で当たり前だと思っていた考え方が実は良い意味でも悪い意味でも特有のものだったこと。違う視点で建築を見るとそう見えるのかと、とても刺激をもらいました。また、修士研究では社会に接点を持ち実感を伴って設計したいと思い、金沢市役所や民間企業・市民の方々に支えられながら「まちに触れる」をテーマにまちづくり・まちの居場所づくりについて実験や活動を行いました。まちに興味がなかった人も、まちを楽しむ視点を一緒に体験することで普段の何気ないまちに関心を持ってもらうきっかけになること、自分から働きかけていけば分野外の人たちも巻き込みながら同じ志を共有できることを学びました。活動は卒業した来年度以降も市と連携して継続することが決まり、関連して実施のプロジェクトも立ち上がり、今後も続けていけるベースを作ることができました。さらに大学院２年の夏に参加したデンマークでの建築短期留学では、実際の敷地を対象に現地で設計をしていく中で、日本との建築やまちに対する設計者・市民の価値観の違いにも驚かされ、改めて自分はどのように建築を捉えるか、考え直すきっかけになりました。

今これらを振り返ると、自分のフィールドで息苦しくなったり行き詰まった時、違う視点に目を向け新しい環境に飛び込み世界を広げ、結果的に「苦しい」を「楽しい」に変換できる視点を獲得しながら進むことが、私の建築設計とちょうど良い距離を保つ方法だったように思います。

建築は 40 歳でも若手と言われる分野です。学生の間の設計センスよりも、建築や設計を嫌いにならずに続けられる力が大切だと感じています。設計が苦しくなったときは、他の興味が湧くものに目を向けて深掘りする。落ち着いたらまたそれを設計に還元できれば良い。今はそのくらいの距離感が私にはちょうど良いと考えられるようになりました。ありがたいことに、建築はどんなものでも吸収して設計に繋げられる包容力を持っています。

これから新築を設計できる数は減り AI も発達する中で、設計だけで仕事をしていくのはなかなか難しい時代になるとよく耳にします。自分なりの価値観や視点を持つこと、他分野と横断し協働しながらものづくりができることはより重視されるようになるのだろうとも感じます。私はやっと学生期間という準備体操が終わり、４月から設計事務所で働くスタートラインに立てたところです。設計のお仕事とは別に、金沢市のプロジェクトをはじめ様々な人と関わり合いながら自分の興味を広げていくことは続けていこうと思います。建築を好きになるために、嫌いにならないために、建築以外のものに触れ合っていろんな世界を見てみる。今設計や進路で苦しんでいる人は、ぜひ外の世界に触れてみてほしいです。

公務員から伝えたいこと

長崎市土木部土木防災課　野田　和哉（2020 年度卒）

本誌を読んでいる皆さんは、新しい生活に期待を膨らませ、一歩踏み出そうとしている方々だと思います。私は、2020 年度に九州産業大学を卒業し、現在は地元である長崎で市役所に土木技術者として勤務しています。今回は、公務員とはどんな仕事をしているのか等をお伝えできればと思っています。

私が在学していたのは、今でいう建築都市工学部都市デザイン工学科で、主に土木分野について、日々勉学に勤しんでいました。この学科を選んだ理由は特になく、ただ漠然と大学生活を送っていました。そんな中、旅行が趣味だった私は、日本１周した際に東日本大震災の被災地を訪れ、自然の恐ろしさ、復興に携わる人々の逞しさを見て、はっきりと土木の分野で働きたいと感じました。そして、計画や施工管理等多岐にわたる土木業務に携わり、できるだけ住民の身近なところで仕事をしたいという思いから、市役所の土木技術者という選択をしました。

現在私は、市役所の土木技術者として採用され、４年目になります。１年目は、道路等の維持管理が主な部署、２年目以降は災害復旧業務を主としている部署に配属されています。市役所はだいたい３～５年ごとに配属部署の異動があり、部署ごとに業務が異なるため覚えることは多くありますが、その分学べることも多くあります。現在の配属されている部署では、私がやりたかった災害復旧業務を担当しています。具体的には、災害によって被災した道路、河川等の公共土木施設の現地調査から復旧工法の選定、復旧に必要な国の補助金の申請、工事の発注、現場管理といった業務になります。災害復旧事業は、早期復旧が求められることから、タイトなタイムスケジュールとなるため、連日の残業等大変ではあるのですが、工事が竣工し、被災現場が元の姿に戻り、無事に共用されるとやりがいをとても感じます。

また、市民の方々への事業の説明や業者の方々とのやりとりも重要な業務の一つです。工事を実施する際には、住民の方々に工事の説明をして、理解してもらわなければなりません。そして、発注する内容と現場状況で差異が生じた場合、業者の方と協議し、どういった施工方法に変更するか、この施工内容で対応可能か業者の方に検討してもらい、納得してもらわなければなりません。このように、様々な人を相手にすることも多々あることから、「コミュニケーション力」と「自分の意見を相手に伝える説明力」はとても重要であると、社会人となって痛感しています。

私は、持ち前のコミュニケーション能力はあるものの、説明力が不足していたため、入庁当時は大変苦労しました。まだ学生の方やこれから大学生となられる方は、恐れずに成果発表や意見交換にチャレンジしてみてください。その経験は、社会人となった時に必ず活きてきます。

最後になりますが、まだ自分が具体的にどういった業種につきたいかわからない方や、将来のイメージがつかず不安になっている方がいるかと思いますが、経験できることはとりあえず何でもチャレンジしてみることが大事です。その中で培った経験は、社会人となった際に自分の自信になり、必ず助けてくれることと思います。

私は、入庁して４年ですが、まだ業務においてできていないこと、経験していないことが多々あり、今後も勉強しながら、資格等を取得してどんどん自分自身をスキルアップしていければと思っています。また、私自身も公私問わず何にでもチャレンジし、様々な経験をしたいと思っています。そして、長崎の街をより良く、より住みやすい街にしていく一端を担えればと思っています。

夢を叶えるまで、そしてその後

大林道路株式会社　久冨　唯（2016 年度卒）

１．はじめに

大林道路株式会社の久冨唯です。都市基盤デザイン工学科を卒業後、就職して７年目です。今回は、私の夢を叶えるまでとその後をお伝えしようと思います。

２．学生時代について

土木系の公務員をしている父親に憧れて、中学生の時に自分も土木に関わりたいと志しました。土木技術者と言っても様々な働き方があります。学生時代は、父に公務員の業務内容や働き方について聞いたり、学内外で土木技術者の方々とお話しできる場に積極的に参加し、建設コンサルタントやゼネコンの方などから建設業界のことを幅広く教えて頂いたりしていました。この経験のおかげで将来の自分を想像することができたと思います。また、就職活動や現在の業務に大きく役立っています。

３．就活・そして社会人生活について

学生時代に様々な技術者の方と出会い、特に現場での施工管理に強く興味を持ちました。もっと深く施工管理について知りたいと考え、大学３年生のときに大林道路㈱でのインターンシップに参加しました。その時出会った方々に憧れ、自分もこんな技術者になりたいと強く感じた為、入社を決意しました。

入社してからは、大阪支店に配属され、施工管理として、現場に出始めました。最初は１日現場にいるだけでも体力的に大変で、初めて聞く現場の用語や関西弁が分からず、不安に思うこともありました。しかし、大阪支店の役職員のみなさまと協力会社の方々に恵まれ、現場が好きになることができたと思います。

次に自分の転機になったのは５年目の春です。国交省発注の電線共同溝の現場代理人を任せて頂きました。慣れ親しんだ場所から異動することになり寂しかったのですが、現場について教えて頂き良くしてくださった上司の方々や協力会社の方々から背中を押してもらいました。約２年、辛い日もありましたが、何とか完工まで仕事をやり遂げることができました。この時目標だった１級土木施工管理技士の資格も取得し、ステップアップのきっかけになったと思います。応援してもらった友人や家族、そして会社の方々等大切な人達が自分のことのように喜んでくれたことが印象的でした。

完工後、入社７年目の春に新入職員の研修の講師リーダーを任されました。約３週間、新入職員達と寝食を共にしながら、現場での業務について教えるという経験でした。社会人になりたての新入職員に教えるのはとても苦労しましたが、少しでも現場で困らないように、そして現場で働くことに誇りを持って欲しいとの思いで指導できたと思います。新入職員達や一緒に講師を務めた仲間たちに慕ってもらえて、かけがえのない経験になりました。その後地元の福岡営業所に配属され、現在に至ります。技術者としてはまだまだ未熟ですが、土木技術者として現場で働くこと・１級土木を取得することという夢を叶えることができました。

４．学生の皆さんへ

学生時代を振り返ると、もっと遊んでおけば良かったと思っています。サークル活動も勉強も遊びも頑張っていたつもりでしたが、比較的時間の取れる学生時代にしか経験できないことは、もっとあったと思うからです。自分が好きな事・興味ある事をとことん追及して社会に出てほしいです。

また、できれば早いうちに、自分の興味のある業界・職種の方と関わる機会を持ってほしいです。視野が広がると思いますし、社会人になった時にギャップの発生が少ないと思います。

私もまだまだ未熟ですが、技術者を志した時の熱い気持ちを大事にして、これからも頑張ります。どこかで九産大の後輩と仕事出来たら嬉しいです。

建築学科４年　井手香菜子

今回、本誌に寄稿する機会を頂いたことを心より感謝申し上げます。コロナ禍での大学生活は、友人作りの努力や遠隔授業の経験を通じて、人との繋がりの大切さを学びました。建築学科での設計課題には多くの時間を費やし、先生方の指導のもと、設計の知識を一から学びました。友人と協力して取組んだ夜通しの模型づくりは､特に印象深い思い出です。

３年次に大庭研究室に配属されてからは、初めてのフィールドワーク研究や論文執筆、学会発表など様々な経験をしました。研究室活動で一番印象に残っているのはフィールドワークの一環での登山です。私は運動が苦手だったのでみんなのスピードについていくことが大変でしたが、ゼミメンバーが私に合わせてゆっくり歩いてくれて、とても助けられました。この山登りで信頼感も団結力も強くなったと思います。卒業研究もみんなと一緒だったからこそ乗り越えられました。

大学生活で関わった先生方や友人、設計事務所のアルバイト先の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。社会へ飛び立つことに不安はありますが、この経験を活かして、日々努力していきたいです。学生の皆さんも学生生活を思いっきり楽しんでください！

住居・インテリア学科４年　有木桃子

今回、本誌に寄稿する機会を頂いたことに感謝申し上げます。

私は絵を描くことなど、思い描く想像物を表現することに面白さを感じていました。建築設計を学ぼうと決めたのは自分のアイデアを形にしていく楽しさに惹かれたからです。

大学では１年次より建築設計に関わる基盤科目があり、徐々に実習や演習を通じて知識を広げることができました。基本的な知識の積み上げで理解していく構造力学に苦手意識がありましたが、基礎教育サポートセンターでの丁寧な個別指導で理解が深まりました。３年次からは研究室に所属し同級生だけでなく先輩や後輩とチームをつくりコンペティションに参加しました。周りが図面から建物を立体的に作成できるBIMソフトを使いこなしている様子に焦りを感じていましたが、先輩や友人に教えていただき、操作スキルと表現力の向上に繋がりました。また、ワークショップでの現地施工やインターンシップは就職前の貴重な経験となりました。

卒業後は設計事務所に就職しますが、大学で学んできた建築知識やBIMスキルを活かして、更に成長し続けていきたいと思います。

最後になりましたが、熱心な指導をしていただいた建築都市工学部を始めとした先生方、同じ目標に向かって共に勉学に励んだ学友、あらゆる面で支えてくれた両親、とても充実した大学生活を送ることができました。この場を借りて､感謝申し上げます。

都市デザイン工学科４年　伊東諒騎

私が本学の都市デザイン工学科を志望した理由は、小学生の時に、東日本大震災の悲惨なニュースが忘れられず、「より多くの人を守ることができる職業」になりたいとの思いです。入学してからの４年間は短くあり、濃密でした。この機会に、私の大学生活を振り返りたいと思います。

１年次は、新型コロナウイルスの影響を受けました。とくに前期はほぼ全て遠隔授業となり、授業に対するモチベーションの維持に苦労しました。モチベーション維持のために、授業内容に関して先生に多くの質問をするなど工夫しました。先生との連絡手段がメール等で限られた状況でしたが、学ぶ楽しさを知りました。また、就活への不安から夏期休暇中に 1day インターンシップに参加し、自己分析する機会を頂き、大学生活の指針ができました。

２年次は、勉学に励みながら就職先を調べ、コミュニケーション能力を鍛えるため、話し合いの場に積極的に参加しました。

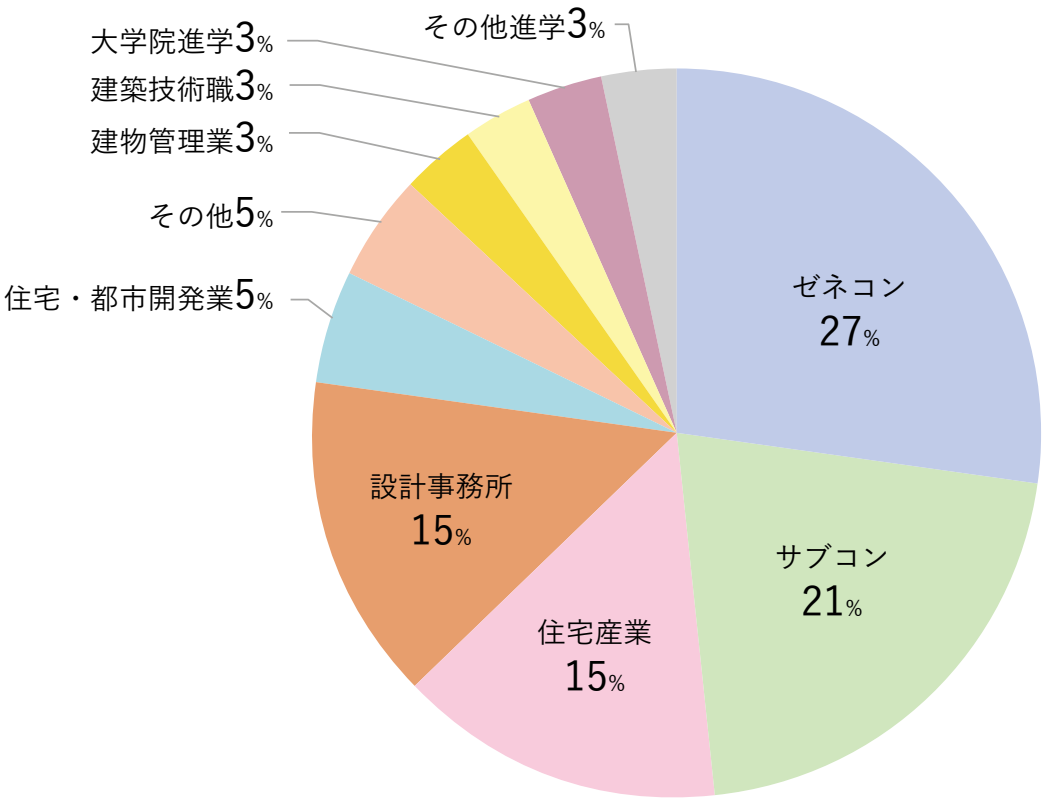
３年次からは就職活動を主におき、公務員を志望し、公務員勉強に力を入れ、個人的にインターンシップを何度か参加しました。

４年次では、幸いにも卒業研究・卒業実習の履修だけで、大学生活で一番自由な時間ができました。そこで、「九産大公開セミナー in 東箱崎 防災まちづくり」に主催者としてグループワークのファシリテーターを務めるなど正課外活動に取り組みました。

本学での４年間は多くを経験し、自分を成長させるためであり、新しい自分を発掘する日々でもありました。志望していた公務員への内定も頂くことができました。

進路実績紹介 | 建築学科

2023年度　建築学科　進路実績種別



主な進路一覧

ゼネコン
- 竹中工務店
- 五洋建設
- 前田建設工業
- 西松建設
- 安藤・間
- 東急建設
- 東洋建設
- 大成ユーレック
- 佐伯建設
- 上村建設
- 吉原建設

サブコン
- 高砂熱学工業
- 九電工
- 大気社
- ダイダン
- 新菱冷熱工業
- 斎久工業
- 東洋熱工業

住宅産業
- タマホーム
- ヤマダホームズ
- ミサワホーム九州
- コプロス

設計事務所
- 日企設計
- 西建設計

建物管理業
- 駅前不動産

住宅・都市開発
- 生和コーポレーション

大学院
- 九州産業大学大学院
- 神奈川大学大学院

※ 2024年３月１日 時点の集計により作成
※一部抜粋、順不同　※(株)(有) は全て省略

エス·エーアイ構造設計（株）

建築学科

YAMAGUCHI KOUKI

山口　航希

私の就職活動

私は大学３年の夏から構造設計会社に絞り就職活動を始めました。夏休みの間からインターンシップに参加することで早期選考に応募することができ、１月にはエス・エー・アイ構造設計から内々定を頂きました。落ち着いて就職活動を行い、後悔のない選択ができるように早め早めの行動を心掛けると良いと思います。

高砂熱学工業株式会社

建築学科

KURINO TAKERU

栗野　嵩琉

私の就職活動

私は大学３年次に設備系施工管理職に絞り企業研究を始め、大学主催の夏季インターンシップに参加しました。そのおかげで選考までスムーズに進めることができました。また、そのほかにも複数の企業説明会に参加することで、各企業の特徴を捉えて就職活動を進め、後悔のない選択ができました。

株式会社竹中工務店

建築学科

KOGA TAISEI

古賀　大晴

就職活動

竹中工務店の施工管理職で内定をいただきました。３年生の夏からインターンシップに参加し、その数は 15 社以上になったと思います。面接では嘘は通用しないと私は感じました。実際の経験や、心からの思いのみが面接官に伝わると思います。インターンシップや課外活動など様々な経験を大切にしてください！

株式会社タトアーキテクツ

建築学科

HARA JINNOSUKE

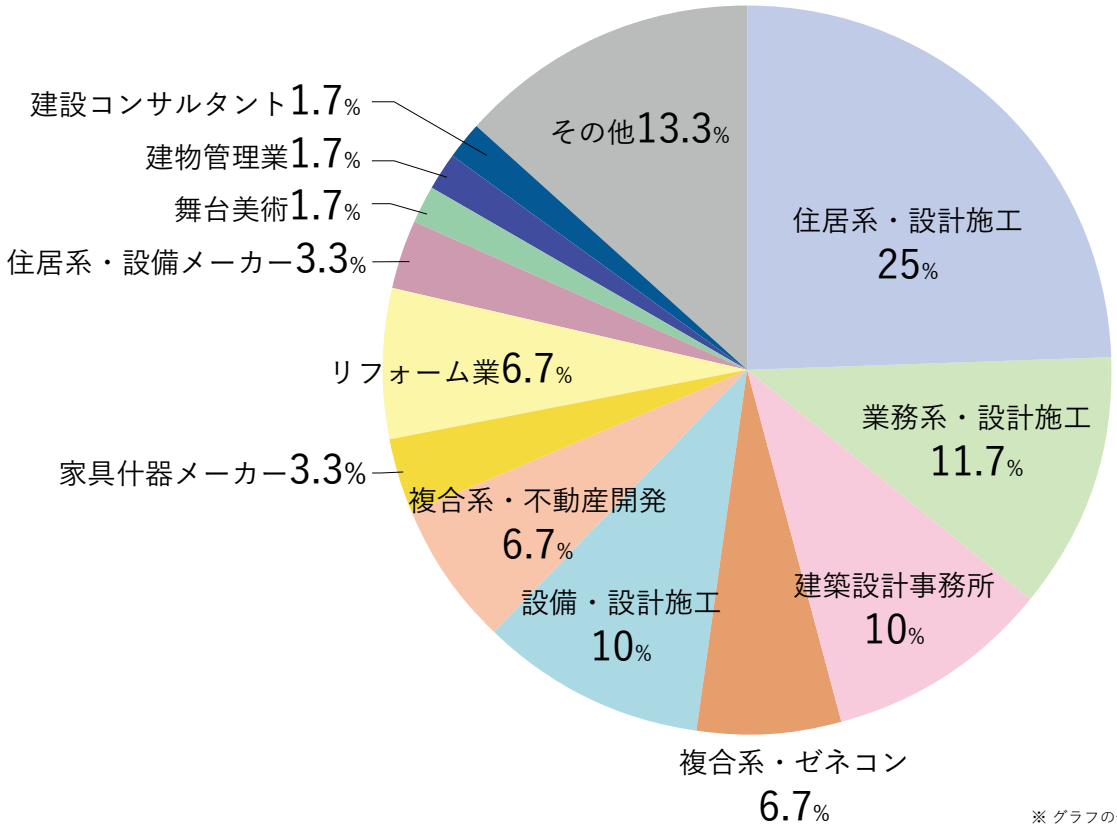
原　仁之丞

就職活動

私はタトアーキテクツというアトリエ設計事務所に内定を頂きました。3 年生の春休みに大学に講演会で来ていただいた方の事務所で、その時に私の事を知ってもらいました。その後もオープンデスクやアルバイトを通して業務に携わっていく中で、建築と向き合いながら、将来私が目指す目標に近づくことができる場所だと感じ、就職の意思を伝えました。将来どう過ごしていきたいか、常に自分と向き合いながら努力していきます。

進路実績紹介 ｜ 住居・インテリア学科

2023年度　住居・インテリア学科　進路実績種別



※ グラフの分類は当学科による教育上の分類です。

主な進路一覧

住居系・設計施工
一条工務店
パナソニック　ホームズ

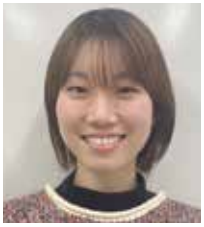
設備・設計施工
菱熱

業務系・設計施工
船場
大和リース

複合系・不動産開発
大東建託

建築設計事務所
河村・佐藤デザイン
柴田建築設計事務所
大旗連合建築設計
野口豊高建築構造設計
リーメック

※ 2024年３月１日 時点の集計により作成
※一部抜粋、順不同　※(株)(有) は全て省略



株式会社一条工務店

住居・インテリア学科
MURAOKA MIU
村岡　美雨

就職活動について

私が就職活動をする上で一番大切にしていたことは楽しむということです。就職活動というとどうしても「やらなければならないこと」という考えになりがちですが、インターンシップは別の大学に友達ができたり、観光ができたりと良い点も多いです。面接も硬く考えすぎずに、自分のことを知ってもらうという考えで人事の方と会話を楽しむと良いと思います。大変なことも多いと思いますが、自分なりの楽しみを見つけて、納得のいく就職先を見つけてください。

株式会社河村佐藤デザイン

住居・インテリア学科
SHIMADA KAZUYA
島田　和弥

これから就活に挑むあなたへ

よく世間一般では就職活動はキツい、大変だというイメージを持たれがちです。ですが、決してネガティブに捉えないで下さい。就活を楽しんで下さい。これから来る未来を想像しながら自分を鼓舞し続けて。そして就職活動は大なり小なり選択をする場面がたくさんあります。たくさん悩んで下さい。その過程が必ず自分を良い方向へ導いてくれます。行き詰まったときは思い返して下さい。何故、やっているのかを。答えは人それぞれですが、自問自答して返ってきた答えに実直に行動して下さい。

原初に立ち返って。
楽しんで。

株式会社菱熱

住居・インテリア学科
OTOMARU TAISHI
乙丸　汰史

就職活動について

私は就職活動を行う上でインターンシップに参加することが大切だと感じました。インターンシップに参加することで、仕事内容だけでなく、実際の職場の雰囲気や将来自分が担うかもしれない役割も具体的にイメージする事ができました。入社後は１級管工事施工管理技士の資格取得を目指します。

私は在学中、準硬式野球部に所属していました。毎朝７時からの練習後、授業に出席するのは大変なことでしたが、勉学と部活動と就活と、納得のいく学生生活を送ることができました。

株式会社船場

住居・インテリア学科
AYABE WATARU
綾部　航

Turning point

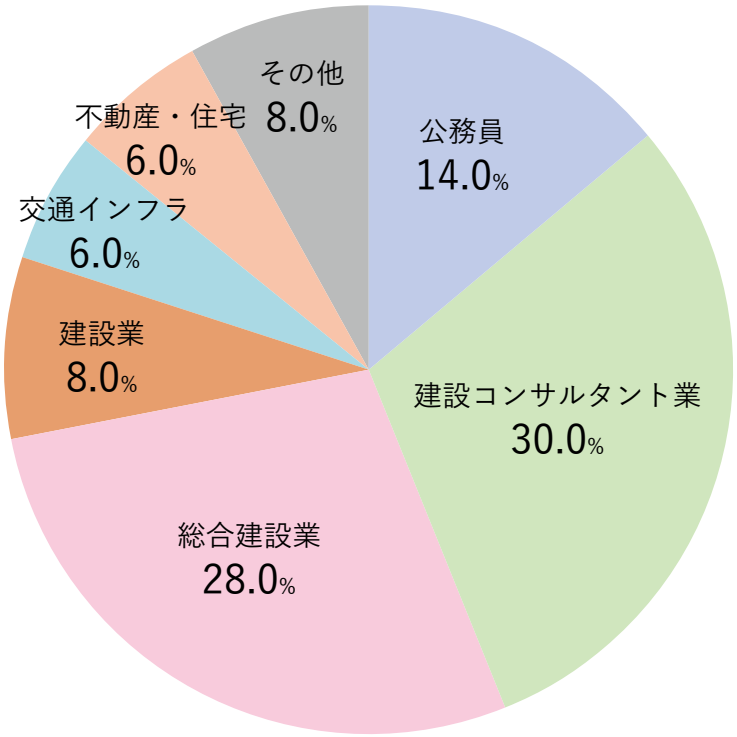
物作りが好きで選んだ住居インテリア学科。
コロナ禍で身についた挑戦する意欲。
寝食を忘れて切磋琢磨し合った設計課題。
インターンで出会った他大学との交流。
建築を志す最高の仲間との出会い。

これらの自分にしかない体験を武器に挑み、自分自身を見つめ直した就職活動。

これからは株式会社船場のデザイン職としてヒトの人生の分岐点となるような、ココロを動かす空間を設計したい。

進路実績紹介 | 都市デザイン工学科

2023年度　都市デザイン工学科　進路実績種別



主な進路一覧

公務員
大分県庁
宮崎県庁
東京都特別区（千代田区）
那珂川市役所
光市役所

建設コンサルタント業
日建技術コンサルタント
オリジナル設計
ティーネットジャパン
日本振興
日本地研
西日本高速道路エンジニアリング中国

総合建設業
安藤ハザマ
熊谷組
五洋建設
東亜建設工業
戸田建設
NIPPO
前田道路
三井住友建設

建設業
川田工業
九電工
富士ピー・エス
富士技研

交通インフラ
九州旅客鉄道（JR九州）
西日本旅客鉄道（JR西日本）

不動産・住宅
アーバンライフ
飯田産業
東栄住宅

※ 2024年３月29日 時点の集計により作成
※一部抜粋、順不同　※(株)(有) は全て省略

西日本旅客鉄道株式会社

都市デザイン工学科
MOROFUJI YUI
諸藤　ゆい

就職活動での経験

私は、３年生の冬から就職活動を始めました。初めはどうしたら良いのか分からず、ひたすら合同説明会やインターンシップに参加し、土木業界以外にも参加しました。初めは不安でしたが、説明会に参加するうちに少しずつ自分のやりたい事が見えていき、働きたいと思うことができる会社を見つけるこができました。

宮崎県庁

都市デザイン工学科
FUJITA TAKURO
藤田　拓朗

就職活動

私は自分の地元で働きたくて宮崎県庁を目指しました。公務員試験の勉強は３年から始めました。学科試験は市販の参考書をやり込みました。試験を想定した練習をするのが必要だと思います。小論文は受ける自治体の下調べや、過去問などで練習しておくと良いと思います。エントリーシート、面接は先生方に添削して頂いたり、キャリア支援センターを活用したりしました。

五洋建設株式会社

都市デザイン工学科
TOMONO YOURYU
友野　遥流

就職活動について

私は３年冬に行われた「学校主催の合同企業研究会」から就職活動を始めました。以降の活動で出会った会社の人、感じ取れた会社の雰囲気を重視して入社先を選びました。

就職活動は大きく成長できる行事だと実感しました。メールや電話での受け答えや、面接でのプレゼン力など仕事をする上で必要な力が多く身についたと感じています。

株式会社 NIPPO

都市デザイン工学科
WATANABE TAISEI
渡辺　大晴

就職活動

私は３年の冬から就職活動を始めました。学内や福岡市などが主催している就活イベントなどに参加し、気になる企業があればインターンシップに参加しました。エントリーシートは先生方に添削していただきました。社員さんの話などを聞き自分自身が働きたいと思える会社に出会うことができました。

資格実績紹介

≪　令和5年度　資格取得状況　≫

キャリア・アップ支援奨励金対象資格

ランク＊1	資格種別	資格・免許名称	合格者
S	国家	二級建築士	21UA029　佐藤　壮馬
A	国家	宅地建物取引士	20UH056　村岡　美雨
			20UH060　横山　あいり
B	国家	２級土木施工管理技士学科試験	１名
	民間	Photoshopクリエイター能力認定試験エキスパート	１名
	民間	ビオトープ計画・施工管理士2級	20UC032　坂本　慎太郎
C	民間	環境再生医　初級	19UC036　田村　颯太
			20UC003　板平　果鈴
			21UC008　大串　亮介　他15名

その他

-	民間	技術士第一次試験	21UC060　吉本　薫

全7種　25名！！資格取得おめでとう！！

キャリア支援センター　キャリア・アップ支援奨励金
概要URL：https://shikaku.kyusan-u.ac.jp/career/

キャリア支援センター　＊1 キャリアサポート奨励金制度

WEBサイト

この制度は、在学期間中に本学が奨励する各種資格（国家・公的・民間）を取得した学生に奨励金を給付することで学習意欲の高揚を図り、資格取得を奨励することを目的に設けられました。対象の資格ごとに定められたランクによって、合格すると奨励金が給付されます。
【ランク別給付額】S：５万円 A：３万円 B：１万円 C：８千円

２級建築士

建築学科

SATO MAO

佐藤　真生

資格取得

この時期に取得した理由として、大学生という時間に余裕がある時に取得をすることで、就職活動や将来の資格取得の時間が省けると思ったからです。皆さんも時間がある今のうちに色々な資格にチャレンジして欲しいです。

２級建築士

建築学科

SATO SOUMA

佐藤　壮馬

資格取得

学生のうちに取得しておくことで、将来のキャリアに有利で、実践的な知識を早いうちから身につけることができます。就職やキャリア形成に強力なアドバンテージになるので、頑張って取得するべきだと思います。

２級土木施工管理技士学科試験

都市デザイン工学科

NAKAMURA MASAYA

中村　雅也

取得できる資格は学生のうちに

資格は授業で習った事も出題されるので、社会人になって授業の内容を忘れないうちに資格を取得するといいと思います。毎年同じような問題が出題されるので，過去問を解き問題の傾向を理解すれば数週間の勉強で取得できると思います。

宅地建物取引士

住居・インテリア学科

YOKOYAMA AIRI

横山　あいり

資格取得

不動産業界に就職するにあたって内定先から日建学院受講の支援をいただき、資格を取得しました。大学在学中はまとまった時間がとりやすく、また試験当日までに１日何時間勉強すべきかなど、細かな計画を立てる練習にもなりました。

宅地建物取引士

住居・インテリア学科

MURAOKA MIU

村岡　美雨

資格取得

私は就職後の自分のために、この資格の受験をしました。１回で合格するために、資格学校も利用して勉強をしていました。この資格受験のために得た知識や勉強方法は社会人になっても役に立つと思います。この経験を活かして今後も様々な資格に挑戦したいです。

博士前期課程研究課題および指導教員

建築デザイン分野　22GTI02　楮野美沙

研究題目：集合知としてのヴァルター・グロピウス設計「全体劇場」案（1927）

指導教員：冨田英夫

研究背景

建築家ヴァルター・グロピウスの作風は建築に対する自身の理念を実現する過程に合わせて変化し、「全体劇場」案（1927）は機能主義的な特徴が初めて表れた作品である。この作品は、設計の依頼者であり演出家のエルヴィン・ピスカートルが望んだ「政治劇場」を実現するために、当時の最新技術を取り入れた大胆な劇場建築案である。以降、構成主義的と機能主義的な設計は使い分けられており、「全体劇場」案はグロピウスが建築に対する考え方を変化させるきっかけを与えた作品であると考えられる。

研究目的

実は、「全体劇場」案の設計過程には多様な専門家が関与していたため、これらの専門家達の存在がグロピウスに作風の変化のきっかけを与えた可能性も考えられる。そのため、グロピウス設計「全体劇場」案（1927）の設計過程における形態の変化と多様な専門家との関係性について明らかにし、「全体劇場」案を多分野にわたる専門家の知見によってもたらされた集合知の建築として再評価することを本研究の目的とする。

研究概要

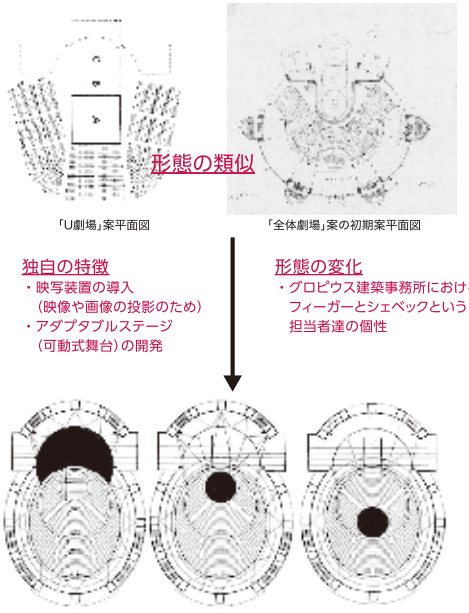
グロピウスはバウハウス教員のモホリ=ナギの思想が反映されたモルナール設計の「U 劇場」案（1924）を参考に「全体劇場」案の設計を始めた。しかし、「U 劇場」案との形態の類似を持つ「全体劇場」案の初期案に対して、最終案では独自の特徴を見せるようになった。

この特徴は依頼者ピスカートルが自身の演劇論を表現するために「全体劇場」案の計画以前から開拓してきた演出手法である。

ピスカートルの舞台で実際の戦争の映像資料が背景に使われている様子

演出手法
- 舞台背景に映像や画像を用いることで、観客に内容の理解を促す
- オープンスペース型の舞台で観客との一体感を演出

さらに、設計段階における形態の変化にはグロピウス建築事務所におけるフィーガーとシェベックという担当者達の個性も関係しており、「全体劇場」案は多分野にわたる専門家の知見によってもたらされた集合知の建築であると言える。



「全体劇場」案平面図(左から順に奥行、前部、中央舞台)
＊黒く色がついている部分が舞台

図版出典
- Winfried Nerdinger (ed.), The Walter Gropius Archive, Volume 1, New York, London, and Cambridge, Mass., Garland Publishing, Inc. and Harvard University Art Museums, 1990.
- オスカー・シュレンマー、L・モホリ=ナギ、ファルカス・モルナール「4バウハウスの舞台」新装版バウハウス叢書、利光功訳、中央公論美術出版、2020（独語初版1925、邦訳初版1991）。
- Erwin Piscator, Das politische Theater, Reinbek bei Hamburg, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, 1963 (1st ed. 1929).

まとめ

グロピウスはモホリ=ナギやピスカートルといった演劇分野の専門家による実践的な知見や、モルナールやフィーガー、シェベックのような建築分野の専門家による形態の着想をもとにグロピウスは1927年に「全体劇場」案を設計したことが明らかになった。

指導教員コメント

本論文は「全体劇場」案の設計過程を（1）設計の依頼者エルヴィン・ピスカートル、（2）グロピウス建築事務所の2人の担当者、そして（3）グロピウスが当時校長を務めていた芸術学校バウハウス、という3方向から注意深く整理しなおし、多分野にわたる専門家の知見によってもたらされた「集合知の建築」と結論づけた。この成果は演劇・建築と複数分野にまたがる資料が遺された「全体劇場」案だからこそ描き出せる成果であり、本研究独自の研究成果として高く評価できる。

冨田英夫

建築デザイン分野　22GTI09　米倉捺生

研究題目：建築の自律性

－多義的カタチによる100を見る建築の提案－

指導教員：矢作昌生

研究背景

建築の構成とは諸要素の形態や、空間の配列などを決めながら、それらを組み合わせて全体を作り上げることである。建築は形態を通して表現されるものであるため、建築は構成なしには成立しない。つまり、どの時代の建築家にとっても、形態、操作を用いることは必要不可欠なことであり、建築を構成していくうえで永遠にして基礎として存在しているといえる。

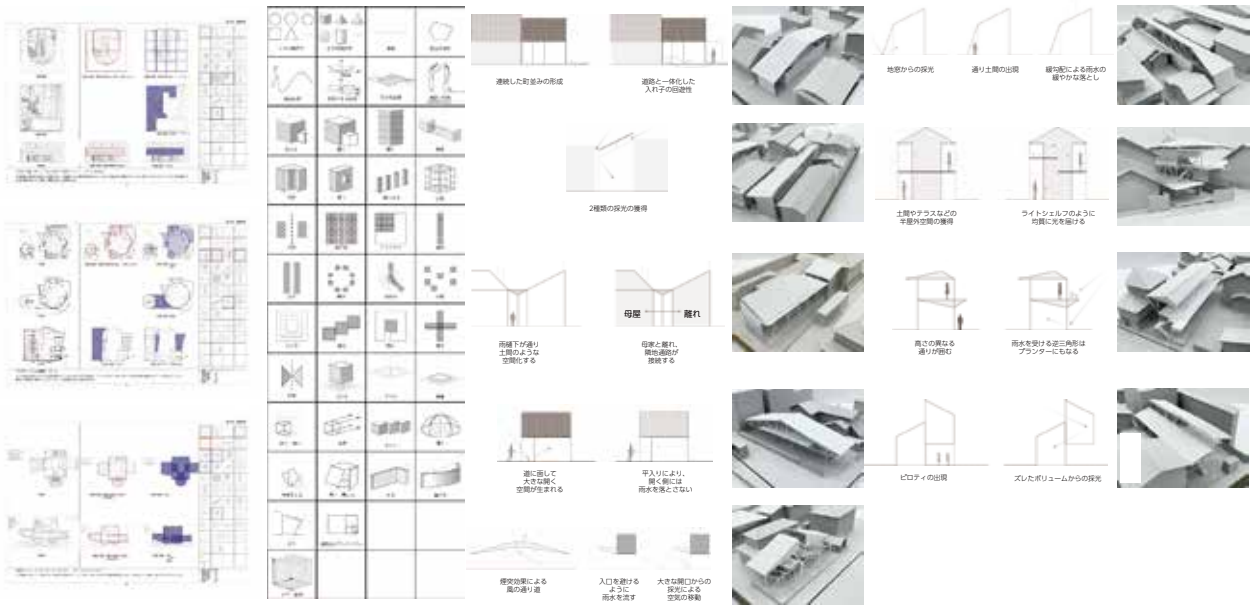
時代を横断して存在するカタチの多義性に関心を持ち、建築の価値がカタチにあると考えた。

研究目的

建築とは、どの時代や思想においてもカタチによりアウトプットされるものである。カタチは時代や思想を横断して必要不可欠なものとして存在しており、意味のあるカタチが今日も遺っている。

カタチとその性格は一対一の関係ではなく、一対多の関係があることで、建築は人間により多様な解釈がなされ自律性を獲得する。本計画では、建築におけるカタチの多義性を明かにすると同時に、建築の自律性をカタチから構成し、仮に100年後にそこに存在する建築を提案する。

研究概要



（分析）

150の建築作品の分析の結果、建築の形態は8の形態の要素、34の形態の操作、2の次元の形態言語に分類されることが分かった。この結果から今日までの建築作品の大多数はこれらの形態言語によって構成されていると考えられる。

どの時代もその中で多様な形態や周辺環境との調和、人の活動を創造したと言える。

（設計）

機能という移り変わるものではなく「雨」「風」「光」「力(構造)」「人の流れ」という変わらないものを基軸として、太宰府において100年後も変わらない価値をもつカタチを導き、建築の自律性について考察を行う。建築のカタチが多義性を持つことで、建築は機能を失ったあとも人間に対して想像の余地を与え、可能性が発見される建築になる。多義性は建築が自律化するきっかけとなり、今後100年を見る建築の骨格になると考える。

総括

本研究では、建築のカタチに着目して分析を行い、カタチの多義性による建築の自律化を考えた。

分析の結果として今日までの建築作品の大多数は限定された形態言語で説明が可能であると考えることができた。また、カタチとは国境だけでなく、意図や思想までも越えることからカタチとその意味が一対多である可能性も見られた。

指導教員コメント

近代建築（機能主義）では建築の形は機能に従うべきであるという理論が一般的であったが、永い時間軸の中では機能が失われたり、別の機能に入れ替わる事例が多く存在することから、建築の存在価値は「形」そのものにあるのではないかという仮説を立て、古今東西150の建築事例の分析を行なった。その研究成果を生かして、太宰府天満宮の周辺を敷地とし、昔から存在する町屋や町割の調査を行い、機能ではなく、光、風、人の流れ、力（構造）という普遍的な要素を基軸として、歴史ある町や建築物の文脈上に、今後、100年後にもその存在意義が変わらない自律的な建築の骨格を提示した。

矢作昌生

2023 年度建築学科　卒業研究優秀作品

●卒業研究の総評（日髙圭一郎教授）

建築学科の卒業研究は、設計または論文の何れか一方を選択する必修科目で、大学で学んだ建築学の集大成でもある。今年度は設計選択者が 33.3％（21/63 人）で、前年度の 27.7％（18/65 人）より増加した。論文は、構造・材料系が 15 テーマ、環境系が 15 テーマ、計画系が 12 テーマの合計 42 テーマであった。総合的に見て、全体の平均レベルは昨年度より高くなっており、設計よりも論文の方が、平均点が高い傾向にあった。卒業設計で金賞を受賞した鴻江舞香君の「本能の建築」と、レードック・タイン君の「INTERTWINED ARCHITECTURE “Weaving Connections: Fascinating Architectural Fusion”」は、共に意欲的な作品で興味深い提案であった。構造系の卒業論文については、濱脇蓮君の「シェル要素とソリッド要素を併用したピロティ建築物の 3 次元 FEM 解析」が、環境系・計画系の卒業論文については中村結君の「運営形態や活動拠点からみた子ども食堂の環境整備課題」が金賞を受賞している。また、中村結君は、最高得点を獲得したことから、併せて建築都市工学部長賞も受賞している。

●設計作品の講評

金賞 「本能の建築」 鴻江舞香君

建築が知覚されるのは主に視覚である一方、嗅覚は記憶と結びつき過去を思い出したり、空間に流れる風を肌で心地よく感じたりする。そこで天神という視覚情報過多な場所に五感で感じる空間をデザインした。

（矢作昌生教授）

金賞 「INTERTWINED ARCHITECTURE “Weaving Connections: Fascinating Architectural Fusion”」 レードック・タイン君

ベトナムの都市フエの都心に住宅を設計する提案である。形態的な可能性を追求する Step A、コンテクストに基づき実践的な設計をする Step B、という理論的な枠組みを構築した点が秀逸である。

（冨田英夫教授）

銅賞 「温泉津温泉―海の歴史を思い起こす―」 野口靖仁君

島根県温泉津温泉（ゆのつおんせん、重伝建）を敷地とし、かつて存在した廻船問屋の空間構成を継承した新築計画と、既存民家を物理的に継承した改修計画の 2 点を柱に、歴史を継承する新しい空間を設計した。

（冨田英夫教授）

銅賞 「超現実建築」 森下汀菜君

太宰府天満宮で巫女として務めた経験から、その歴史と現在の観光地化した状況のギャップに疑問を持ち、菅原道真が記した和歌を私的誤訳という手法で建築化し、時空を超えた超現実建築として提案した。

（矢作昌生教授）

佳作 「大なり、小なり　室と都市のあいだの大きさ」 田中元晴君

一般的には建築も都市も「小」の集合体として「大」が構成されている。逆に「大」の集合体が「小」つまり「大」が重なる所が「小」になると、小の中にいても意識が外に広がるのではないかという提案。

（矢作昌生教授）

佳作 「寄り添い、向き合う」 中村友哉君

北九州空港に近い砕石場跡地を敷地として、人の手により地表が剥ぎ取られた採石場跡の再生と、現代の疲弊した人々の精神の再生を重ね合わせ、空間的にも精神性の高いリトリート施設の設計に成功した。

（冨田英夫教授）

佳作　「偶発的現象による空間の模索」　山蔭香音君

偶発的なプロセスを経て現れる空間の可能性を追求した意欲的な設計手法の提案である。原始時代の根源的な建築の姿にまで視野に入れたような思考上の射程距離の長さが優れた点である。（冨田英夫教授）

●構造論文の講評

金賞　「シェル要素とソリッド要素を併用したピロティ建築物の３次元 FEM 解析」　濱脇蓮君

10 階建 RC 造ピロティ建築物を対象と、下部３層をソリッド要素で上部７層をシェル要素でモデル化することにより節点数の低減を行って大規模解析を実施し３次元応力状態の分析した点が大いに評価できる。（内田和弘教授）

銀賞　「アラミド繊維補強コンクリート柱の曲げせん断性状に関する実験―ロッドの折損に関する検討―」　北ノ園蘭奈君、小林潤翔君、永田翔太郎君、森山友晴君

コンクリートを炭酸化させ CO2 を削減することを目指し、鉄筋の腐食防止のためにアラミド繊維ロッドに置き換えることの可能性を探った実験である。実験データを丁寧に分析した真摯な姿勢は評価に値する。（花井伸明教授）

銅賞　「ピロティ建築物の地震応答解析」　本川楓太君

国土交通省技術基準によるピロティ設計法の考慮の有無について、高さの異なる３つの試設計建物の立体フレーム動的弾塑性応答解析を実施し、レベル２を超える地震動の場合の危険性を示した点が評価できる。（内田和弘教授）

●計画・環境系論文の講評

金賞　「運営形態や活動拠点からみた子ども食堂の環境整備課題－福岡県内の子ども食堂を対象として－」　中村結君

福岡県内の子ども食堂を数量化Ⅲ類で類型化し、環境整備の課題を考察した。フィールドワークで自治体の支援内容や運営状況を把握し、普及に役立つ知見を得ている点が高く評価される。（大庭知子准教授）

銀賞　「戸建て住宅活用型高齢者シェアハウスの住宅セーフティネットへの導入可能性－地方圏の空き家活用手法に関する研究－」　井手香菜子君、安田愛理君

空き家活用の一手法として高齢者向けシェアハウスに注目し、運営形態や使われ方を分析することで運営課題を明らかにした。根気強く行われた現地調査の成果は大変貴重であり、高く評価される。（大庭知子准教授）

銀賞　「学校教室における空調換気設備の最適運用に関する研究」　竹口華恋君、吉満香音君

公立小学校２校の教室内温・空気環境の長期連続測定を行い、空調・換気（熱交換）設備の適切な運用で、夏の熱中症や冬のインフルエンザのリスクを低減し、教室環境を良好に維持できることを示唆した。（北山広樹教授）

銅賞　「コンクリート建築物におけるカーボンニュートラル化に関する研究」　麻生徹人君、尾園翔太君

コンクリート建築物のライフサイクルにおける CO2 吸収に着目し、セメント製造時や建物運用時の CO2 吸収に関する既往文献を参考に、その吸収量を推計しカーボンニュートラル化を検討した。（北山広樹教授）

本能の建築

20UA021 鴻江 舞香

金賞作品

07 plan
流れとたまり。
09 plan
換気塔もマンホールも取り込んで。
10 plan
6 ブロックに分ける
11 plan
福岡の屋台全員集合！
08 plan
五感で感じる空間の種類

INTERTWINED ARCHITECTURE “Weaving Connections: Fascinating Architectural Fusion”

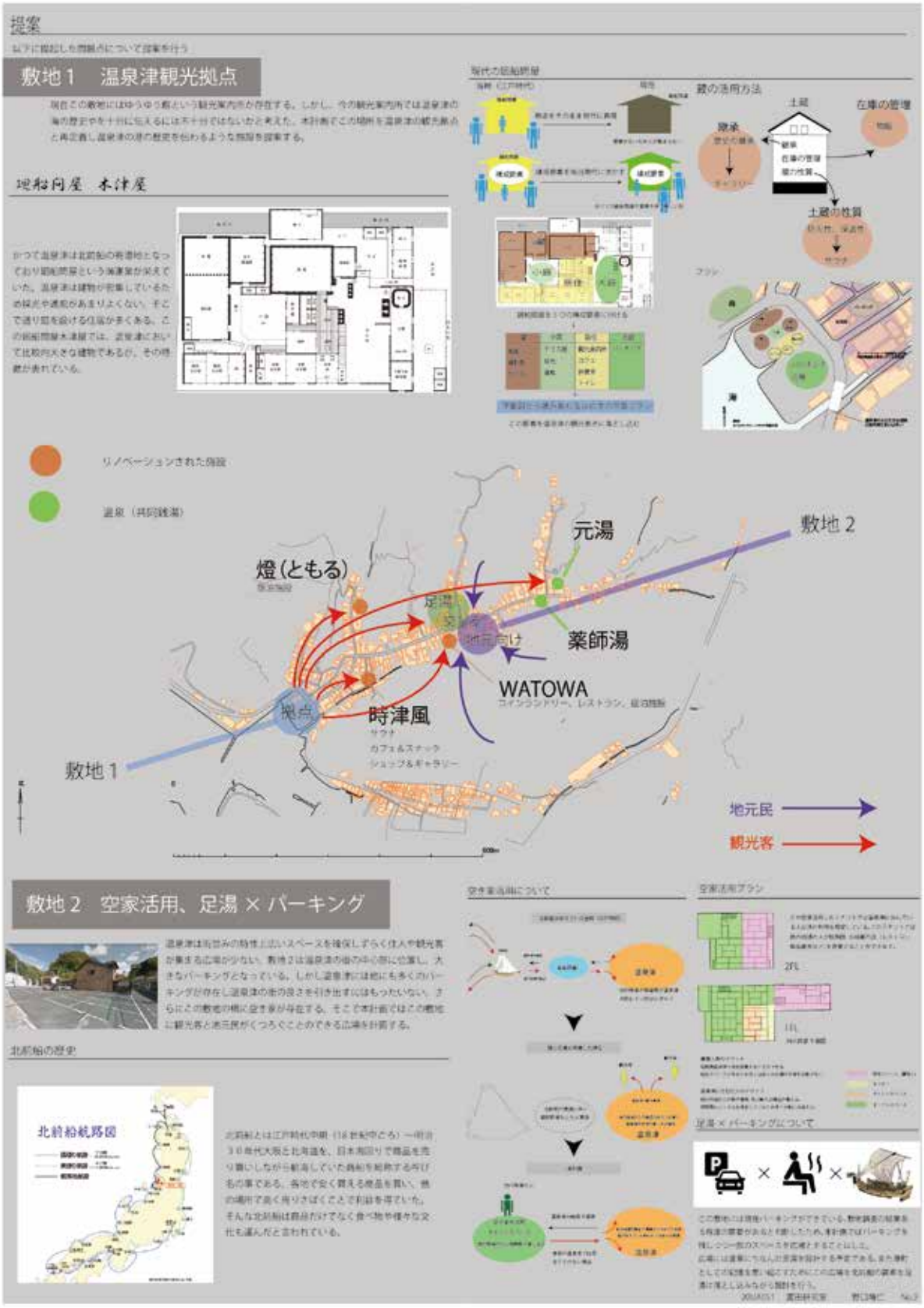
19UA077　レードック・タイン

金賞作品

INTERTWINED ARCHITECTURE
"Weaving Connections: Fascinating Architectural Fusion"
構造と材料の分離図

■温泉津温泉―海の歴史を思い起こす―

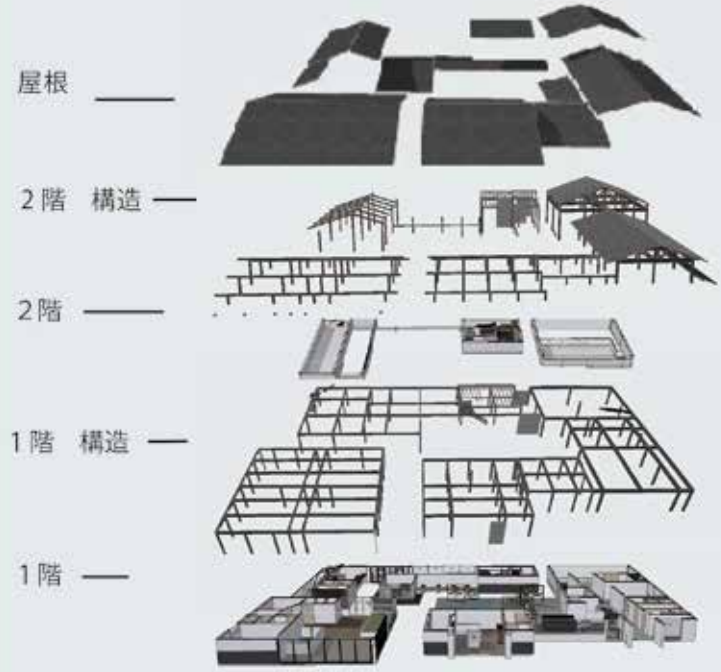
20UA051　野口　靖仁



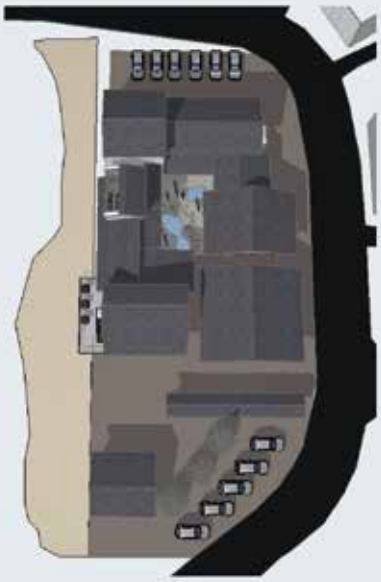
銅賞作品

正面パース

各階パース



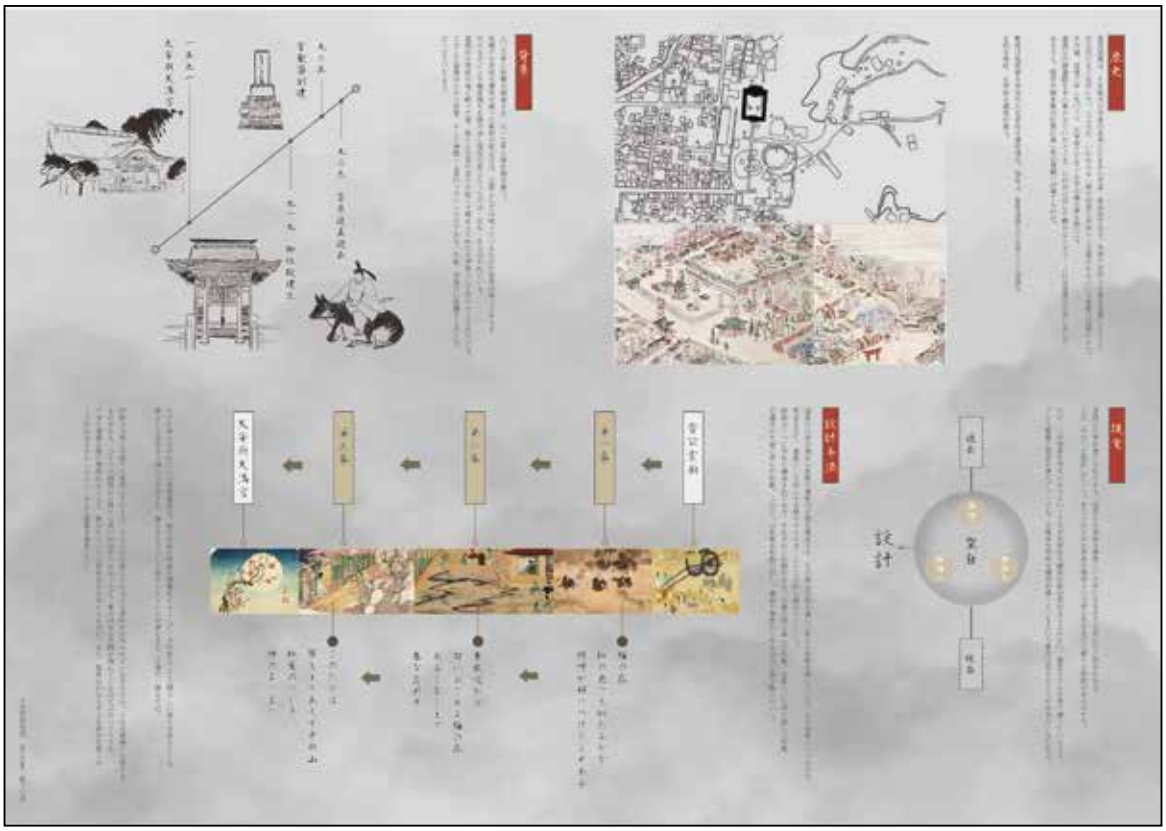
屋根形状



断面パース

超現実建築

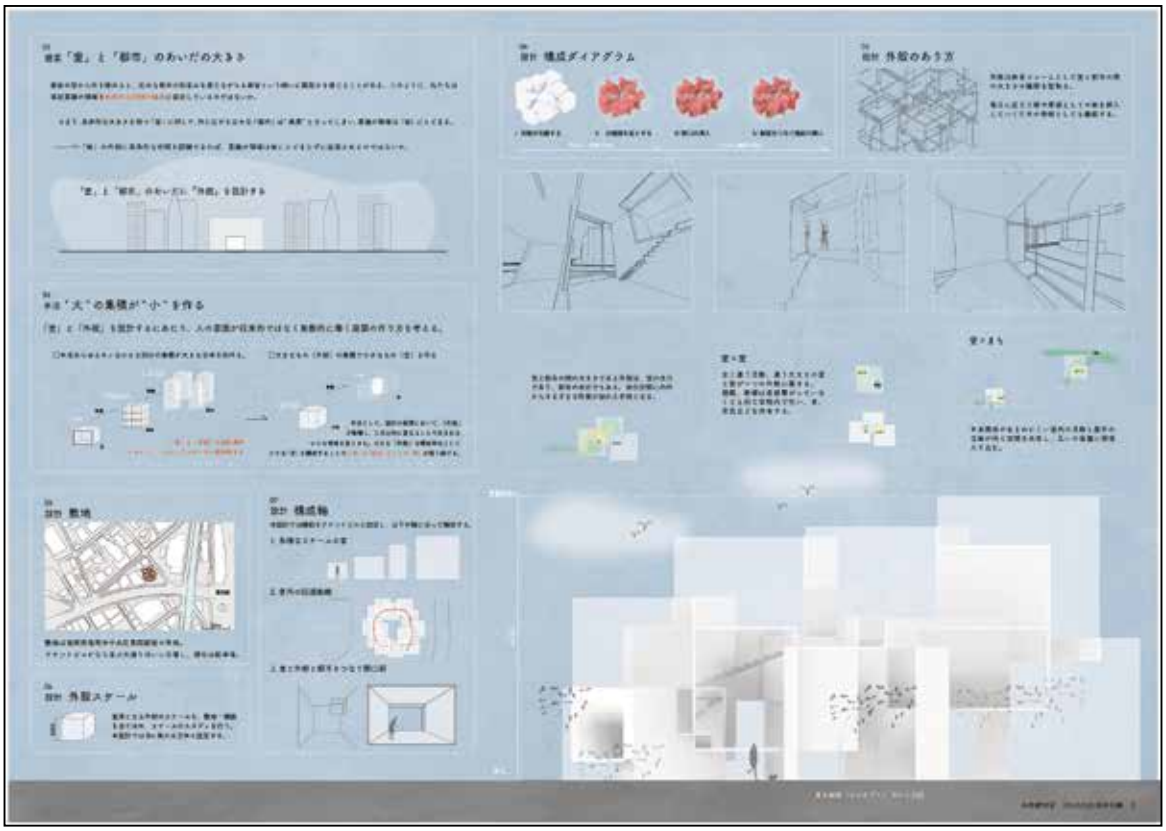
20UA066　森下　汀菜



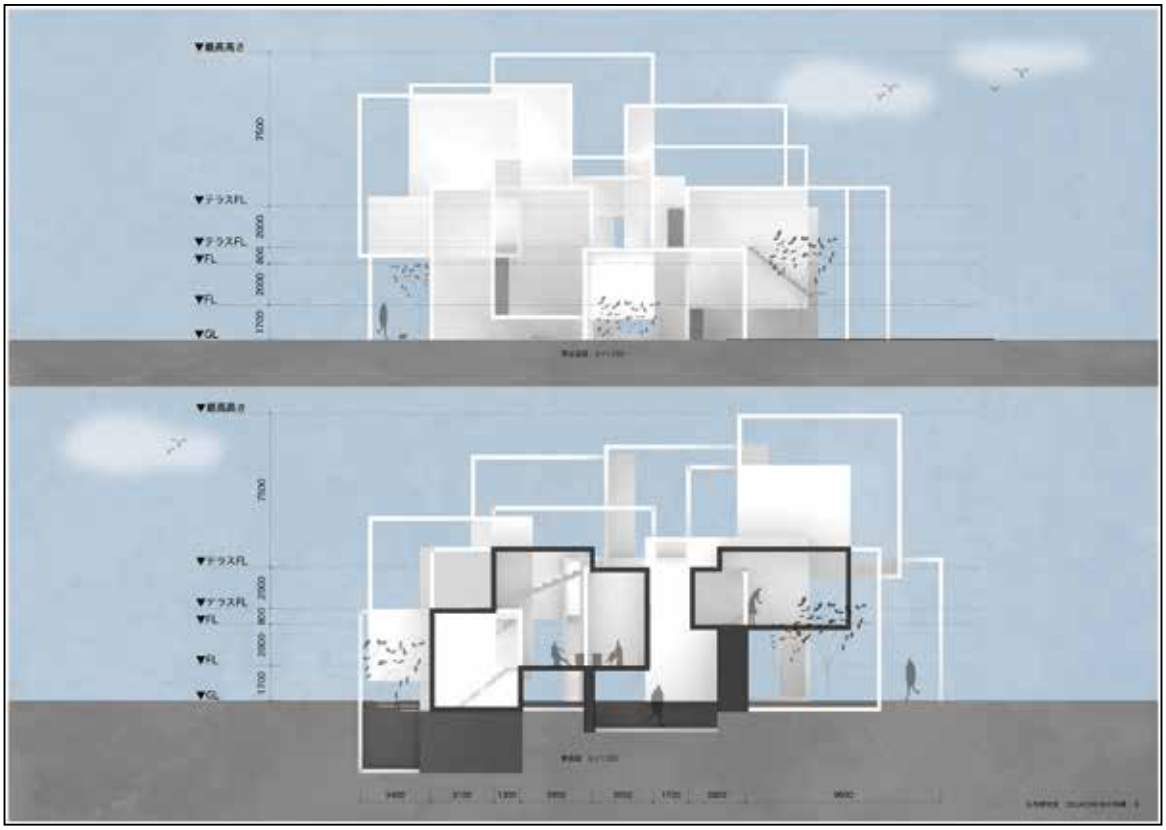
銅賞作品

大なり、小なり　室と都市のあいだの大きさ

20UA038　田中　元晴

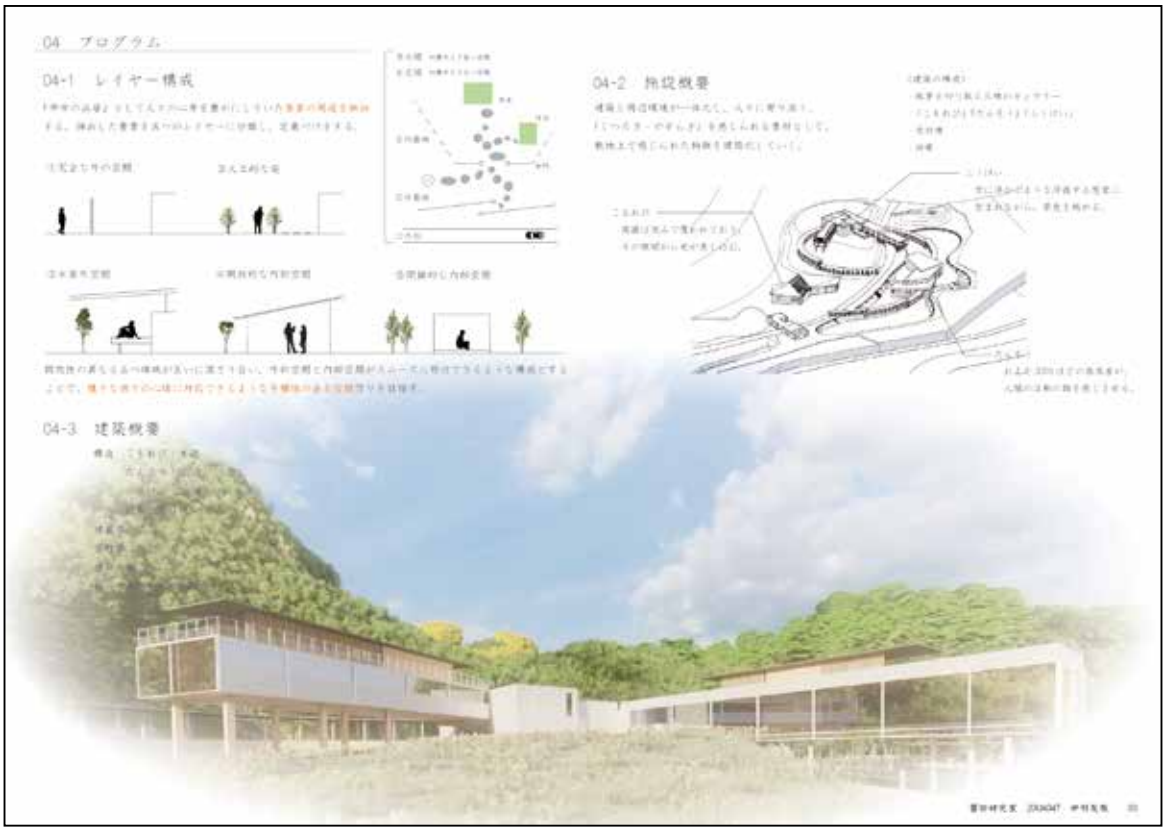


佳作作品

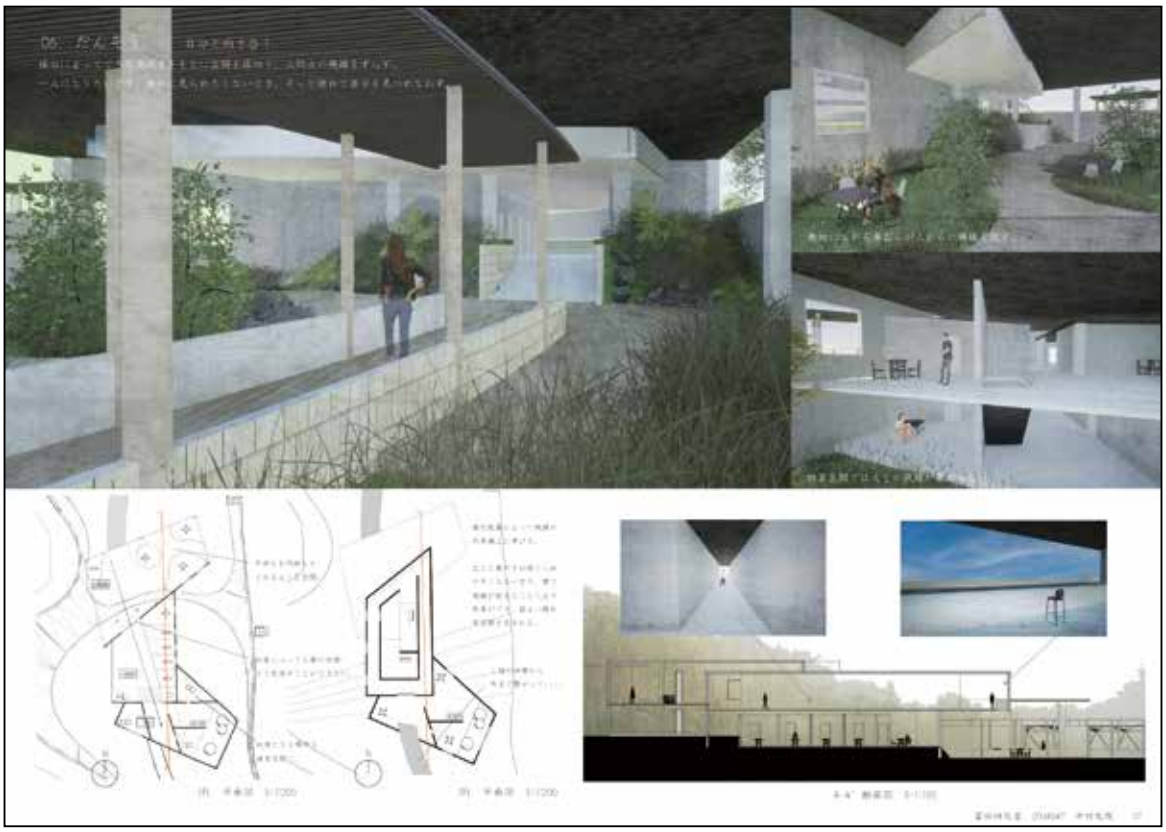


寄り添い、向き合う

20UA047　中村　友哉

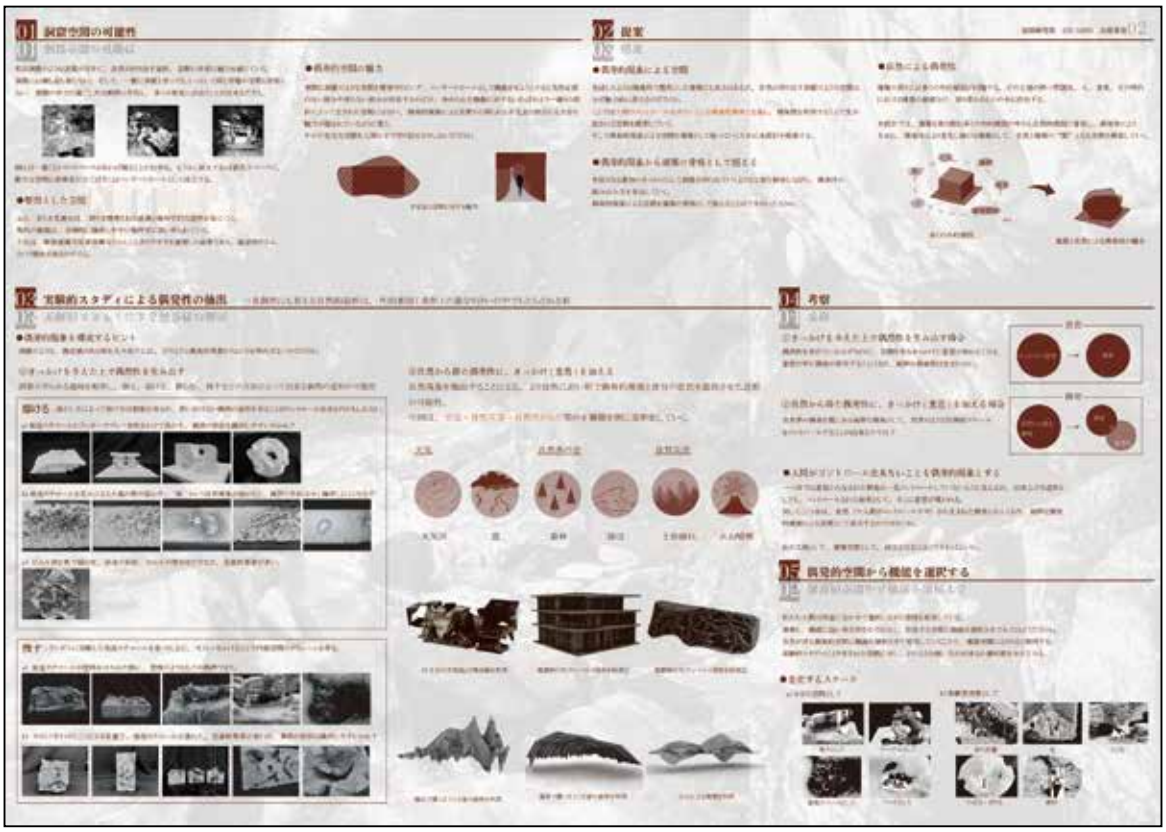


佳作作品

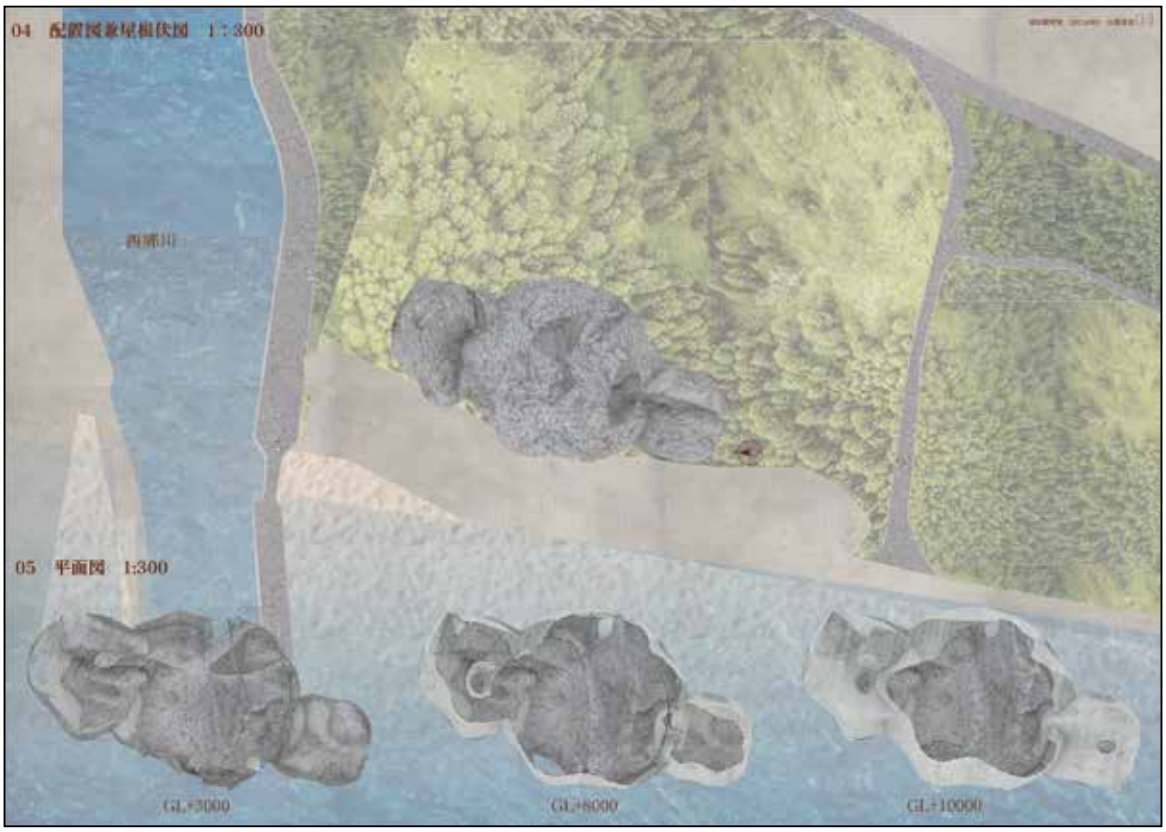


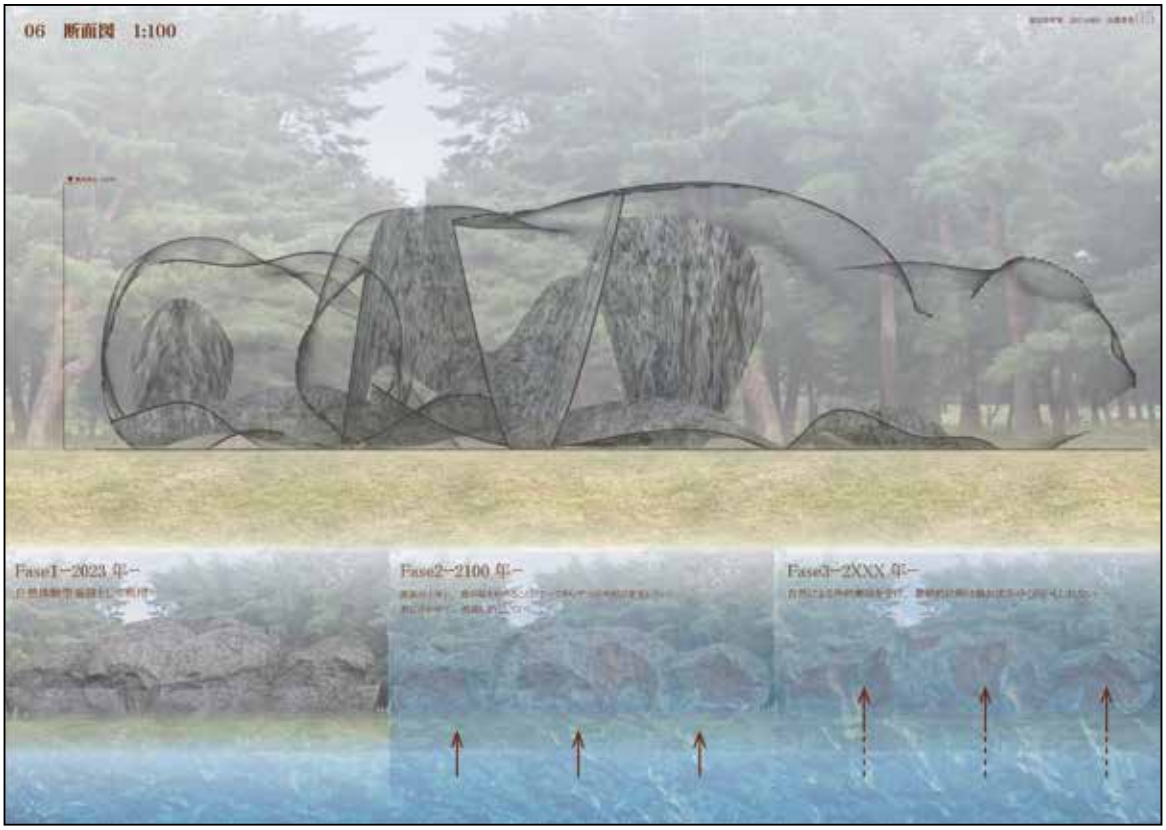
偶発的現象による空間の模索

20UA069　山蔭　香音



佳作作品


04 配置図兼屋根伏図 1:300
05 平面図 1:300
GL+3000
GL+8000
GL+10000


06 断面図 1:100
Fase1−2023 年−
Fase2−2100 年−
Fase3−2XXX 年−

住居・インテリア学科卒業研究優秀賞

「キッチン作業における身体の疲労と心理的ストレスを軽減するスツールの設計・制作 」

20UH007 石川拓武

本研究は、負担の大きい調理作業の『心理的ストレス』と『身体の疲労感を改善』するキッチンスツールの設計・制作を行ったものです。石川さんは、積極的に先行研究や既存商品を調べ、社会に貢献するテーマに辿り着きました。実験１では、身体疲労を改善する家具寸法や作業姿勢を追求され、実験２では、心理的ストレスを改善するデザインを導くために、見た目・形状等に関する印象評価実験を行い、インテリアエレメントとして愛着がもて、キッチンを「お気に入り空間」と思える家具デザインを見つけられました。これら実験結果をもとに設計し、実物の制作まで辿り着いたことは素晴らしいと思います。（吉村祐樹）

「人と人、人と社会の距離感に着目した集合住宅の設計」20UH014 上田沙季

ファミリー世帯 10 戸、単身６戸の中庭を囲む集合住宅。各戸の分散配置の仕方、上下階をずらすことで出来た余白、２階レベルの上の道、各所に散りばめた緑・テラスなどがうまく機能し、また住戸内でもレベル差や開口部など様々な工夫が駆使され、テーマとした心地良い距離感や関わりが、住民相互から家族間、また外部から内部空間にまで、重層的・段階的にバランスよく組み立てられている点がとても評価できる。温かみのある手書きスケッチも魅力的で有効。一方、人と社会の距離感に関しては少し弱く、住民以外の人との関わりや、周辺環境を活かした工夫があるとより良かった。（小泉隆）

「「ふじの荘」リノベーション設計・DIY 施工　～築古アパートの再生プロジェクト～」

20UH055 明徳穂乃花

20UH059 山口夏々未

人が作ったものは、素材を選定し、加工し、接合し、取付けることでできている。セカイが視覚情報によるサーフェスのみで構成されていると錯覚している学生に、世界は物質（サブスタンス）でできていることを五感で感じさせること、これが教室内では教えられない最も学んでもらいたいことの一つである。自らこの難題に挑戦することを選んだ学生２名が、築古の木造２階建てアパートの内装設計・デザイン・施工をやり遂げた。デジタル空間のアーキテクトに奪われた自分の身体感覚を、自らの意志で取り戻すこと、それがこの卒業研究の真のテーマである。（信濃康博）

「領域と境界の形態操作による団地のあり方～社会制度変化に伴う団地の再編～」

20UH016 上原唯

商環境デザインゼミナールの研究はインテリア・建築・都市における環境を生成させる設計を対象とし、領域と境界の形態に着目して研究設計を進めていくことを規定している。本研究は団地に着目しその再編は可能かを問う。団地とは集団住居地の呼称であるが、それ自体で地域社会として完結できるシステムとコミュニティを目指した建築群であり戦後から 20 世紀後半までのニホンの生活環境の概念でもある。その団地を

生成させた背景を丁寧に探りながら建築と建築群の枠組みは残置し、領域と境界のみを操作することで社会制度の変化に対する再編を試みた。言語に丁寧に向き合い、そこから設計言語を用いて組み立てる設計手法に敬意を表したい。（福山秀親）

「居住者のコミュニケーションを向上させる集合住宅の共用空間への提案
～マンションの共用部のリノベーションを通して～」

20UH064 レーティタントゥイ

集合住宅の多くは共用廊下から遮断されているため、住戸が閉鎖的でコミュニケーションが生まれにくい環境となっている。コレクティブハウスのようにダイニングなどを共有しながら暮らすのではなく、コミュニケーションを図るために日頃から様々な接点で他の住人に出会い、お互いの存在を認識していくことが大切だと考え、エントランス、共用廊下、共用階段、ゴミ置き場、駐車場などの共用部において、自分の時間を過ごしているうちに、自然と他の住人との関わりが生まれるような、住人どうしの出会い方を創出する集合住宅を提案した。（諫見泰彦）

学生食堂空間の音響性能評価

19UH024 日下部朋陽
18UH031 近藤旦飛

本研究の目的は学食の居心地をよくするために音響性と意匠性を改善する吸音材と杉材を利用した「デコ柱」の提案で、研究方法は現場計測と数値シミュレーションです。

日下部さんは、現場計測を、卒業研究テーマとして選びました。学食開業中や閉店時に現場計測を実施するためには、専門知識や技術の修得はもちろんのこと、連携先への相談や連絡、報告など細やかな調整が必要ですが、日下部さんは、計画通りに推進できるように、また他学部の学生への協力要請にも、積極的に取り組んでおられました。一般的に食堂は、音楽堂ほどの高い音響性と意匠性を求められませんが、利用者のニーズは少なくありません。本研究は学食の音響性と意匠性の改善効果の解明に貢献します。（香川治美）

治山のススメ ～治山的建築と山の混交林計画による人と山の関わり方の再構築～

20UH033 志賀 桜空

本案は、人の手が入らなくなり荒廃してきた山に対し、人の役割を再定義し、山が維持されていくプログラムの構築を目指している。治山ダムを活動拠点の端緒として、山をフィールドとする木こりと猟師が介在しながら、その周辺を活動の場として提案することで、人と山の新たな関係性を築こうとしている。建築施工技術の知識がない人間がセルフビルドできる仕組みを作り、システムを持続してくことを目指す着眼点が良く、本作品は、時間軸に対しての考察を含め、人と自然との関係を問い直す意欲的な作品で、制作者の強い思いを感じられる。（松野尾仁美）

「キッチン作業における身体の疲労と心理的ストレスを軽減するスツールの設計・制作」

20UH007　石川拓武

キッチン作業における身体の疲労と心理的ストレスを軽減するスツールの設計・制作

20UH007 石川拓武

1. 背景および目的

「料理」は家事の中で最も時間と労力のかかる行為の一つであり、自炊を日常的に行う人が1日にキッチンに立つ時間は約2～4時間程度というデータもある。キッチンでの長時間の立ち作業が身体に影響を及ぼすことは、業務用厨房における調理従事者の疲労感・集中力への影響に関する研究[1]などから検証されており、長時間同じ体勢で作業を行うことは、集中力低下・疲労につながることがわかった。一方で、家庭用キッチンにおける同様の研究は存在しなかった。

某大手食品加工会社が料理ストレスの調査[2]を行なった結果、8割以上の人が「料理をすることにストレスを感じている」という結果が出ている。一方で料理とストレスの関係性について調べていくと、料理をすることがストレス解消になっているという人々も一定数いることが、専門家のインタビュー記事[3]などから分かった。料理をストレスに感じる人とストレス解消に感じる人の作業内容は、さほど変わらないのにキッチン作業に対する心理状況が異なることに疑問を抱いた。

また、キッチン作業における心理的ストレスの種類に関する調査等[4]を見ると、人によって工程ごとの好き嫌いも分かれているように感じた。これら数多くのキッチン作業のストレス要素を解決する方法として、キッチン設備自体を改修したり、便利ツールを用いるといった解決策が考えられるが、前者は簡単には替えられないので、より多くの人に向けた解決策にはならないといえ、後者も限定的な作業の解決策にしかならないと考えた。「時短」もストレス軽減の方法として当てはまるが「(面倒な料理を)早く終わらせる」という消極的な解決策ではなく、「料理が楽しい」と思えるような積極的な解決策を提案したいと思い、空間を構成する要素である家具を用いて、キッチンをお気に入りの空間にすることができれば、料理を楽しく思うことができ、上記の問題を解決できるのではないかと考えた。

事例より、とあるインテリアショップのメディア特集[5]にて、以前は部屋も心も荒れ果てていて、家事も大嫌いだった主婦の方が、家具や生活雑貨を愛着の持てるもので統一することで、家事が楽しくなり、好きになったと話していたことから、①使いたくなる道具のデザインは、行為に対する心理的ストレスの改善に良い影響を及ぼすのではないだろうか。という仮説を立てた。

キッチンで使用される家具の既存商品として、スツールや、マット、ゴミ箱、各種家電などがあるが、本研究では、居心地や疲労感・集中力を直接的に改善できる人体系家具をキッチン作業に導入することで、作業に対する心理的ストレスと身体の疲労感を改善できるのではないかと考え、キッチンスツールの設計・制作を行う。

2. 方法

2-1 実験1 身体の疲労を改善する寸法等の追求

キッチンカウンターは立位を前提としての作りになっている。[illegible]この実験を参考に、[illegible]導き出し、設計に繋げようと考えた。

2-2 実験2 心理的ストレスを改善できるデザインの追求

下線部①の仮説や実験1を踏まえ、見た目・形状等[illegible]を行い、[illegible]キッチンを「お気に入り空間」と思えるデザインを追求する。

制作活動全体の流れは、下記の流れで行なった。

実験1の装置の制作・予備実験
↓
実験1　本実験
↓
実験2　本実験
↓
実験結果をもとにした設計・デザイン活動
↓
制作活動

3.実験報告

3-1 実験1 予備実験

まずは座面高さを調節できる装置を製作した。座面の高さを低めにすると、体勢は楽だが、膝が前に出て、キッチンカウンターとの距離が生まれ、作業が行いにくくなる。一方で座面を高めにすればするほど、膝はコンパクトに収まり、キッチンカウンターとの距離感は改善されるが、臀部への負担が大きくなると感じた。

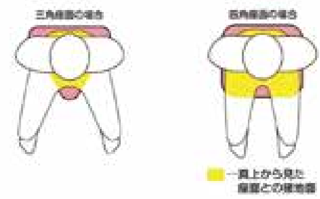
次に、キッチンカウンターとの距離感を適度に保ちつつ、臀部への負担を軽減するため、座面に角度をつけられる装置[画像（1）]を制作した。角度は0°、10°、20°、30°、45°で変えることができる。しかし角度をつけると、後ろ方向へ荷重が分散され、転倒の危険があることや、座面が滑る感触があり、脚に力が入ってしまうことも問題点として出てきた。

これらの問題点を解消するために、今度は②座面のサイズを臀部よりも小さいサイズに落とし、またがるような姿勢が取れる座面形状にすることで、膝が前に出にくくなり、角度をつける必要がなくなるので転倒のリスクや足へ負荷もなくなることが予備実験からわかった。[画像（2）]

下線部②や画像（2)(3)の特徴を参考に装置の座面を跨がれるサイズの丸型の座面に変更し、本実験用の装置とした。

画像（1）座面に角度をつける装置

画像（2）座面高さを調節できる装置(SH640-840)　座面サイズを落とすことで、より座面を高く、膝をコンパクトにできる。



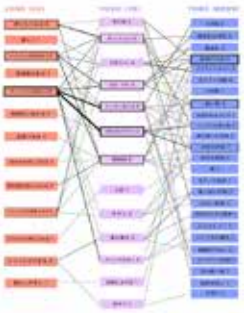
画像（3）三角座面の例「接地面が少なく、足の自由度が増す。

3-3 実験２ 本実験

実験２の本実験では、制作するスツールを愛着の持てるものに、そしてキッチンをお気に入りの空間にするために「キッチンに置きたいと思うスツール」という判断基準で、男女８名の学生を被験者とし、31種類のハイスツールの画像［7］を用いて、評価グリッド法を行なった。
画像を見て、それらを５つの群に分けてもらい置きたいと思う順に並べ、隣り合う群を比べ良いと思った印象をヒヤリングした。まずは画像から感じた印象（中位概念）を聞き取り、次にその印象を構成する要素（下位概念）とその印象がもたらす利点（上位概念）を抽出すると表１のような結果となった。

被験者の多くが良いと感じた印象（中位概念）は、「スッキリ見える」や「空間に合わせやすい」といった項目であった。また、印象による利点（上位概念）として「キッチンに馴染みやすい」や「テンションが高まる」といった項目があがった。
そして、良いと感じた印象を構成する要素としては、「座面の丸み」「細い脚」などの項目があがった。
これら実験２の結果をもとに、キッチンスツールがもたらすことの出来る良い印象、その印象により生まれる利点、その印象を持たせるための構成要素をできるだけ詰め込み、デザインへ反映させた。

デザインに反映させた特徴として、まず素材について、木部の素材はレッドオークを使用した。キッチンに置いていて、愛着が湧き、テンションが高まるような椅子の特徴として「個性的」という印象が多く挙げられた。この個性を表現するためにできるだけ「木目の表情」が出やすく、長く使える木材を採用した。
座面素材は小さめの座面に長時間座っても疲れを感じないように、試行錯誤を重ねた積層ウレタンを柔らかく滑らかな肌触りのフェイクレザーフェルト布地で仕上げた。
形状・見た目のデザインに関しては、「キッチンに馴染む」ようにできるだけスッキリとした印象である必要があったため、脚部は「細めの3本脚」を斜めに組み、「Aラインシルエット」にすることで、コンパクトかつ安定感のある形状を再現した。また、脚部の置の位置から上端、下端に向かって脚を細くすることで、洗練された「かっこよさ」や「持ちやすさ」を再現した。また、「丸みをもたせた座面」の色はアクセントカラーで個性を出しつつ、「落ち着き」を与えられるグリーンを採用。そして最後に木部にオイル仕上げを施し、「木材の色味」「木目の表情」を際立たせることで「個性」や「温かみ」を感じられる仕上げとした。



5. 総括

本研究では、キッチンでの身体的疲労と心理的ストレスを改善するため、立位での使用を前提に作られたキッチンカウンターでの新たな姿勢を提案するスツールの制作を行なった。
実験１の予備実験・本実験、実験２の本実験より、キッチン空間に適した形状・寸法、見た目のデザインがもたらす影響など多くのデータや知見を得ることができ、それらの結果をできる限り制作物に反映させることができたと考える。
完成した制作物を使って、キッチンで被験者を募って実験などを行うことはできなかったが、現物や画像をみた人達からは、「形状が可愛らしくて好ましい」「座面や木部の肌触りが良くて、ずっと触っていたい。」「キッチンに置いてみたい」といったポジティブな反応を感じることができた。
本制作物が世の中で実用化されることで、キッチンでの作業をストレスに感じる人が一人でも少なくなり、キッチンにいることが楽しいと感じられる人を増やしていきたい。その為には実験１・２においてより多くの被験者を募り、得られるデータの精度を高め、制作物の更なる改善に活用したり、実際に本制作物を使用して実際に数多くのキッチン作業を行い、よりキッチン空間で使いやすいように改善していく必要があると考える。

参考文献

「人と人、人と社会の距離感に着目した集合住宅の設計」

20UH014　上田沙季

福岡県建築士会賞

【S 型住戸】
1 階平面図
窓枠とカウンターを繋げる。
2 階平面図
サンルーム
広縁
1FL が椅子のように使える空間。
土間
ナカとソトをつなげる広縁。京都のようなゆったりした空間。
室内、インナーテラス、通路を繋げる土間。
菜園
土間
インナーテラス
1 階からはナカとソトが曖昧な空間を通る。
C.C' 断面図
D.D' 断面図
インナーテラスで通路からの視線を遮る。
2FL
1FL
GL
土間
広縁
段がつくりだす空間と行為
1 階の床レベルより 400mm 下げたリビング。周囲は自由に腰をかけたりもたれたりすることができる高さで、多様な行為を生み出す。
家具を置く場所によって空間の使い方や雰囲気が変わり、多目的に使うことができる。
窓枠とカウンターをつなげた空間。
腰をかけたりテーブルとして使ったり、インテリアを飾ったりできる。
出窓の分断から外に飛び出しているため、寝転んだりクッションを置いてソファのように使うこともできる。
空中の地上
S 型住戸専用の菜園。地上の共用菜園と同様、自由に使うことができる。
すぐそばに土間やインナーテラスがあるため、道具を置いたり室内で作業することもできる。
ソトのようなウチのような
ソトのようなウチのような空間のインナーテラス。天気や時間帯によって空間が変わり、過ごす楽しみができる。
2 階へは階段、インナーテラス、土間を通っていき、空間の移り変わりを感じられる。見える景色が変わり、住み続けても新鮮さがある。
インナーテラスと共有通路と室内を結ぶ土間。直角三角形の形が 3 つの空間をつなげる。
多目的に使える広縁。壁とガラスに囲まれた小さな空間で、縁側のような少し非日常を感じられる。
景色が大きく見える掃き出し窓がソトとナカを繋げる。

「「ふじの荘」リノベーション設計･DIY 施工　～築古アパートの再生プロジェクト～」

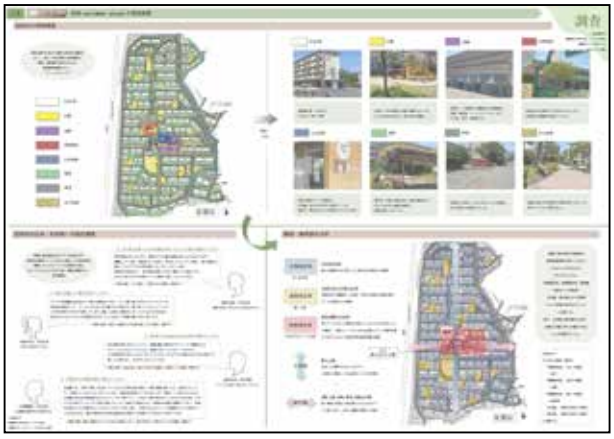
20UH055　明徳穂乃花、20UH059　山口夏々未

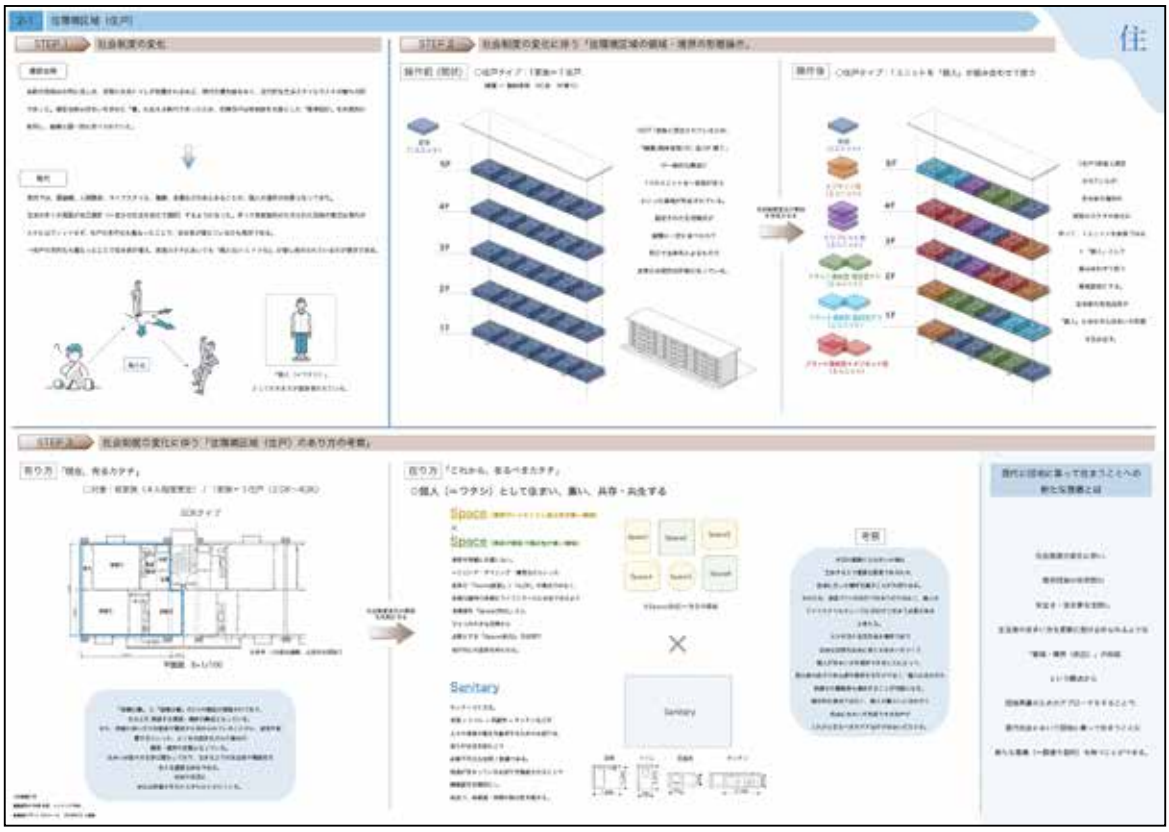
203 号室リノベーション設計
のどかな北欧ライフ
～洗練されながらも温かみのある空間～
洋室　リビング
和室 1　寝室
和室 2　ウォークインクローゼット
和室
クローゼット
DK

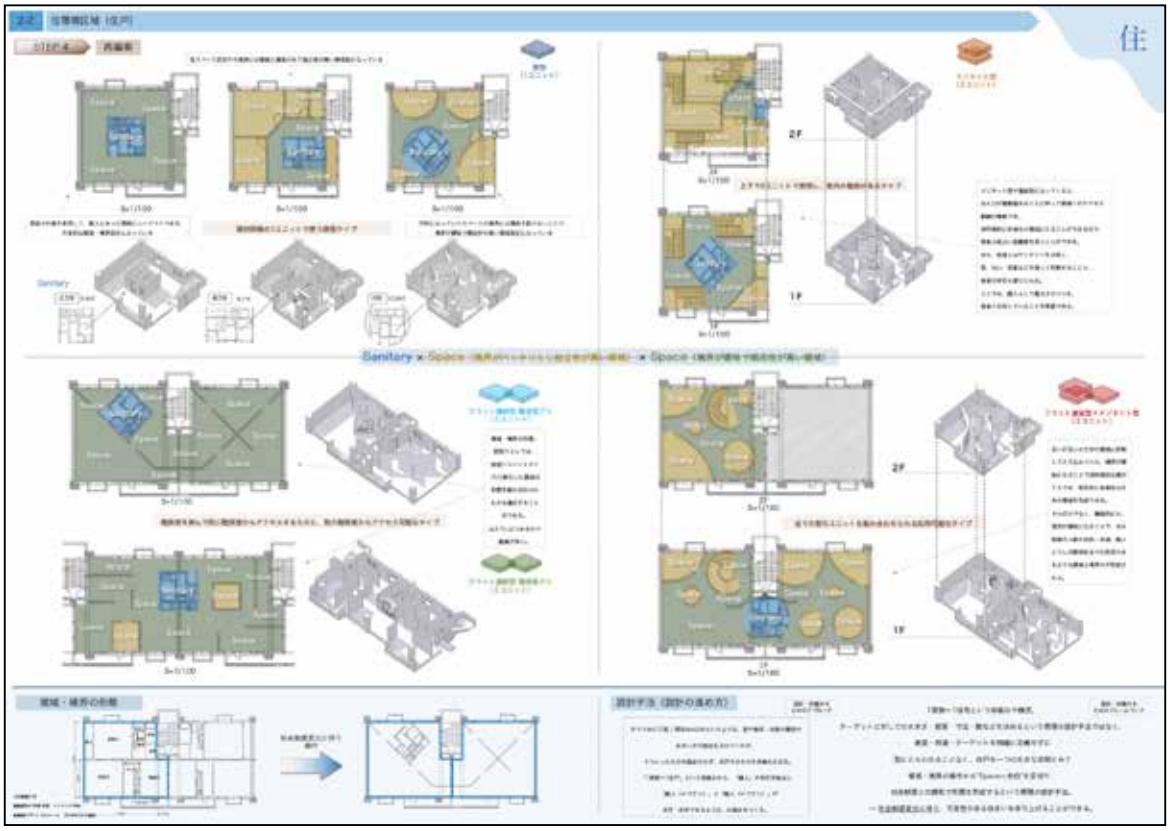
202 号室 DIY 施工
洋室・インナーバルコニー
203 号室 DIY 施工
リビングと和室
リビング
和室
LDK
DK

「領域と境界の形態操作による団地のあり方～社会制度変化に伴う団地の再編～」

商環境デザインゼミナール　20UH016　上原唯







「居住者のコミュニケーションを向上させる集合住宅の共用空間への提案　~マンションの共用部のリノベーションを通して~」

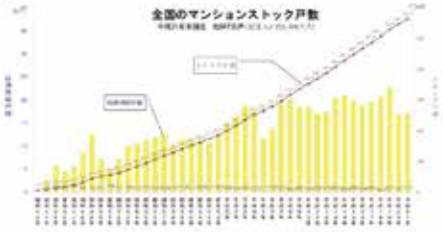
20UH064　レーティタントゥイ

居住者のコミュニケーションを向上させる集合住宅の共用空間への提案
~マンションの共用部のリノベーションを通して~

九州産業大学　建築都市工学部　住居・インテリア学科
卒業研究室　20UH064 レーティタントゥイ

1.　社会背景

「集合住宅」は都市のごく一般的な住まいとして定着した。平成29年末のマンションストック数は約655万戸、居住人口は約1,460万人、全国のマンション化率は11.42%、8.5世帯に1世帯がマンション居住である。東京都では24.1%、さらに千代田区80.22%、中央区75.72%、港区72.51%となり、区民とはマンション住民といっても過言ではない。多くの住民が「マンション」で暮らす。そこには、様々な家族の形があり、多様な価値観、個々の事情がある。マンションはさまざまに社会の縮図といえる。



図表1 全国のマンションストック戸数

◆ 社会問題

平成19年国民生活白書によると、近所のつきあいからまるでつながりの状況について、「生活面で協力し合う人」が10人と回答する割合が65.7%、「1~4人」と回答する割合が28.0%となっており、近所に生活面で協力し合う人がいない人が多いという結果となっている。

図表2 近所付き合いの人数

問題:近隣関係が希薄化になっている。

結果:他人に関心を示さない子供等である環境への不安、住人と不審者の区別がつかない不安、高齢者の孤独死の増加、些細な出来事からでもされてしまう近所紛争などの問題を引き起こしている。

集合住宅内の交流不足

◆ なぜ集合住宅のコミュニティ形成が必要？

メリット
- 高齢化対応・世代間交流
- 災害の時の緊急対応
- 自警形成の容易
- 防犯面
- 子育てのバックアップ
- 生活に必要な情報の入手

デメリット
- プライベートを confined される恐れがある
- 近所付き合い方法等の人がイベントなどに参加することを強制と感じる

詳細

- **高齢化対応・世代間交流ができる。**同マンションに住まうつまりの人の割合は、1980年は21.7%であったが、2008年には46.9%となった。永住意識を持っている人の割合は年々増加する。しかし、高齢になれば、認知症や介護などの問題も発生しなければならない。生活な高齢化、厳しい経済情勢を考えれば公の福祉に期待するにも限界があるので、今後は集合住宅においても近隣で支え合う仕組みが必要となる。また、高齢者はもちろん対立けでなく、子どもたちが遊ぶ様子を見守る等年齢者なりではのまえる例になることも期待できる。
- **災害の時に緊急対応ができる。**大規模な災害が発生した場合には警察会社や警備会社も被害者になるので、個別会社がすぐに助けに来ることは困難である。そこで、災害時には最低限が平心になって行動することが必要だと考える。このように最低限行動するには事前からコミュニティが形成されると、近所と互いに声を掛けあったり、助け合ったり、情報を交換したりすることができるようになる。また、災害からの復興を迅速に進めるためには、コミュニケーションが不可欠だと考える。
- **自警形成が容易になる。**集合住宅内での大事な議論の際に、影響する問題の一つとして住人間のコミュニケーション不足があるときいている。普段から交流がある住人同士であれば、防犯、意見の食い違いがあっても相手を尊重しながら、話合いをし意見が交換できると考える。コミュニティがしっかりとすると、集合住宅内の自警形成がよりスムーズにいくようになる。また、騒音やゴミなどの問題が起きる場合、良い近隣関係であれば、対応しやくなると考える。
- **防犯面を期待できる。**住人同士の関係が少ないの集合住宅の場合、不審者が侵入に侵入しても通報者がない。一方、コミュニティが形成されると、普段からコミュニケーションや会話で住人同士の状況があるため、不審者の侵入に気付きやすくなる。
- **生活に必要な情報を入手できる。**集合住宅では子育てサークルやシニア世代でサークルなど様々なサークルが行われると、生活の悩みを相談できる場が広く広がると考える。例え、子育てには保育園・幼稚園の情報、介護関・公園の情報やシニア世代サークルでは医療機関などの情報を入手できる。
- **子育てのバックアップができる。**前述の「高齢化対応・世代交流ができる」に関連するが、コミュニティは子育てに役立てる助けもあると考える。現役世代にとってシニア世代は、子育てのお先輩としてたくさん頼りになる。また、子供の基礎のそううちメイトをきっかけに、親たちも交流ができ、情報・アドバイスが交換できる。就職期や学校の重要な時期できたり、仕事や用事で帰りが遅くなったときに子供をちょっと預かってもらえるなど、コミュニティのお陰でお互いが助け合うことができるようになると考える。

一方、コミュニティ形成のデメリットとしては、住人同士の関係が必要以上に深めると、プライベートを confined されると恐れがある。そこで、適度な距離感に対する共通認識をしながら個人の生活を尊重にするという世界との良い近隣関係が両立できる共同空間がとても重要だと考える。集合住宅ならではの適度な距離感は「自分はそれぞれお互いの生活を尊重して、相手の生活に踏み込まないが、ありげなく気を配り合い、いざというときは助け合う関係であることをお互いに認識している穏やかなご近所関係」としている。集合住宅のコミュニティ形成については、メリットの方が圧倒的なので、組織として集合住宅には積極的にコミュニティが重要だと重視は考える。

◆ 集合住宅内のコミュニケーションの現状調査

- STEP1:SNSにアンケート配布

- STEP2アンケート調査の結果

- 暮らし向・隣合の結果
- コミュニケーション程度・会った時挨拶する程度(67%)
- 特に関係深くない(6割を占めている(50%)
- 近所の方との関係がどのくらい重要だと考えますか重要(80%)
- マンション内のコミュニケーションが不足していると感じている(65%)
- マンション内のコミュニケーションが不足していると感じる場合、それはどのような理由ですか:他の居住者との交流の機会がない(54%)、時間がない(49%)
- 自治会等よる、コミュニティ形成はまったり積極参加
- 昔はお互いに挨拶し合っていたが、最近は新しい人が引越に先に挨拶しないこともあり、顔を知りの人でない人同士挨拶しなくなってきているのが心配。
- 仲良くしたいとう気遣はあるが、高齢の方々が分からないという理由、小さい子供を連れとした子供はあるようだ。
- コミュニティ形成の他のイベント参加者は毎回決まった少数の固まれで、その他の人などのような形を取れば興味を持ってもらえるかが課題。

- STEP3解析

事例調査のアンケート結果から、「自分の段階を維持するように」と「互いが止まらない」というフレーズをキーポイントにした、集合住宅内のコミュニケーションが不足している主な原因の一つは人々の考え方で、交通を始めることに対する段階的な意識よりもしばしばだったら、隣合の人々は一般的に個人スペースを尊重し、他人のプライバシーを侵害したくないという傾向がある。さらに、忙しい生活や仕事のプレッシャーなどの要因で交流を積極に時間を割くのが難しくなっている場合も多いと感じた。しかし、これらはしっかり「適切なライフスタイル」を確保しよう、隣住者同士の関心度合を作り、普通生活がより空間などでコミュニケーションを促進する設計を施すことで改善は可能だと考えた。集合住宅の共用空間に「コミュニケーションを向上させる研究」を進めた。また、子供のちょっとで交流する機会も多く見られるが、子供だけではなく、多様な世代が交流できる空間を作りたいと考えてファミリータイプのマンションに絞った。

◆ 研究の目的

現在集合住宅のほとんど、共用部下から遮断されているため、社界が閉鎖的で、コミュニケーションが生まれにくい環境となっている。この問題をコレクティブハウスでは解決できているが、こうした企画には積極的にコミュニケーションを求める人しか参加していない。そこで、キッチンやダイニングなどを共有しながら暮らすのではなく、コミュニケーションをとるために日頃から他の住人との小さな接点をつくり、お互いの存在を認識していることが大切だと考える。エントランス、廊下、階段、ゴミ置き場、駐車場などの共用部における、合わせ時間を過ごしているうちに、自然と他の住人との関わりが生まれるような、今までの集合住宅とは違う住人同士の出会いを作りする集合住宅を提案する。

また、絶対に必要なものではないかもしれないが、あればより快適な暮らしができ、よりコミュニケーションができる、小さな空間でも、工夫すると、ちょっと交流が生まれ、そのような「ちょっと」を積み重ねると集合住宅内の良い近隣関係を形成できるのではないかと考える。

2.　物件について

◆ 物件資料

グランデアベニュー
所在地：福岡県福岡市東区下原4丁目15-10
構造・階建：鉄筋コンクリート・9階
築年月2009

周辺の環境：ブランチ福岡下原まで300m、マルキュウ香椎店まで400m、セブンイレブン下原4丁目まで140m
福岡県立香椎高校まで1100m、保育園まで650m、福岡市立香椎下原小学校まで700m、福岡市立香椎第三中学校まで1600m

◆ 周辺環境分布図

物件
- 大通りに配置され、スーパーや店舗などが周辺隣が近いので、利用しやすい。公園アクセス5駅以上利用可、3分徒歩以上利用可の良いマンション。
- 広い部屋が提供されるマンションであり、家族の快適なる生活間・子供たちの遊び場や勉強スペースが整備されている。

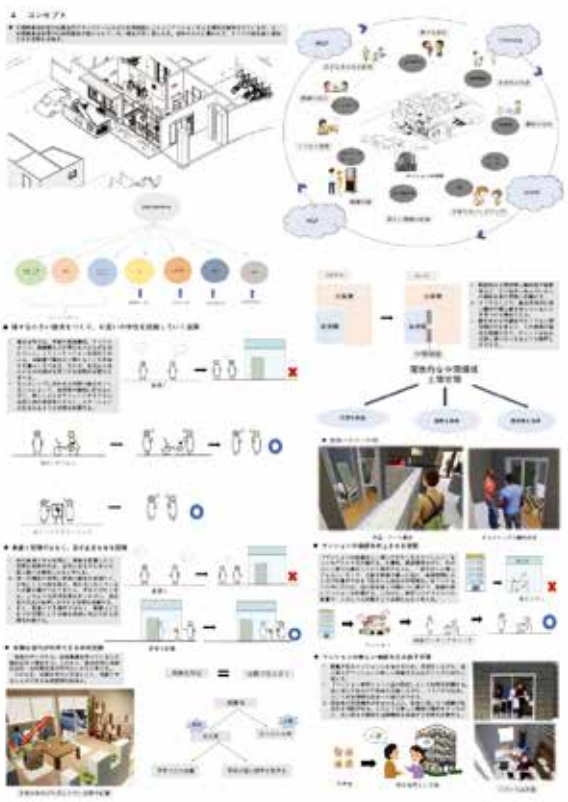
配置場所と各施設の関係性がファミリー向けの理想的な住環境である。

- 教育
- ショッピング
- 公共施設

◆ ピックアップ

周辺調査の結果、当物件の周りには徒歩15分圏内に学校が3か所あり、子供持ち家族にとってもニーズの高いエリアにあることが分かった。また、立地はかなり駅近と同時に多数のコンビニ・薬局・スーパー・公共施設に囲まれており、とても良い条件にある。これらのことから、物件のターゲットはファミリーに定める。

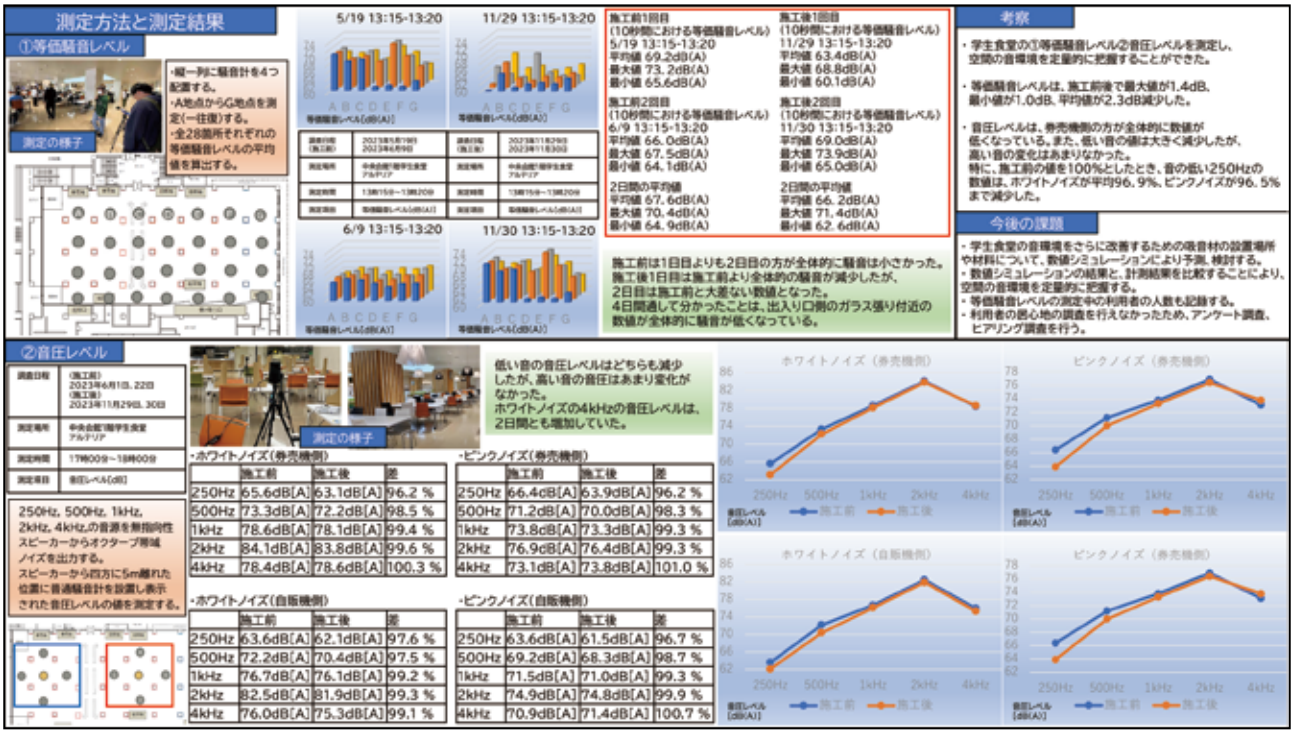
BEFORE



AFTER
ダイヤグラム

■学生食堂空間の音響性能評価

19UH024　日下部朋陽、18UH031　近藤旦飛



学生食堂空間の吸音力評価
九州産業大学建築都市工学部 住居・インテリア学科
居住環境デザインゼミナール香川治美研究室 18UH031 近藤亜海
研究目的
研究背景
既往研究
実験方法
連携体制
学生食堂の概要
装飾柱「デコ柱」開発

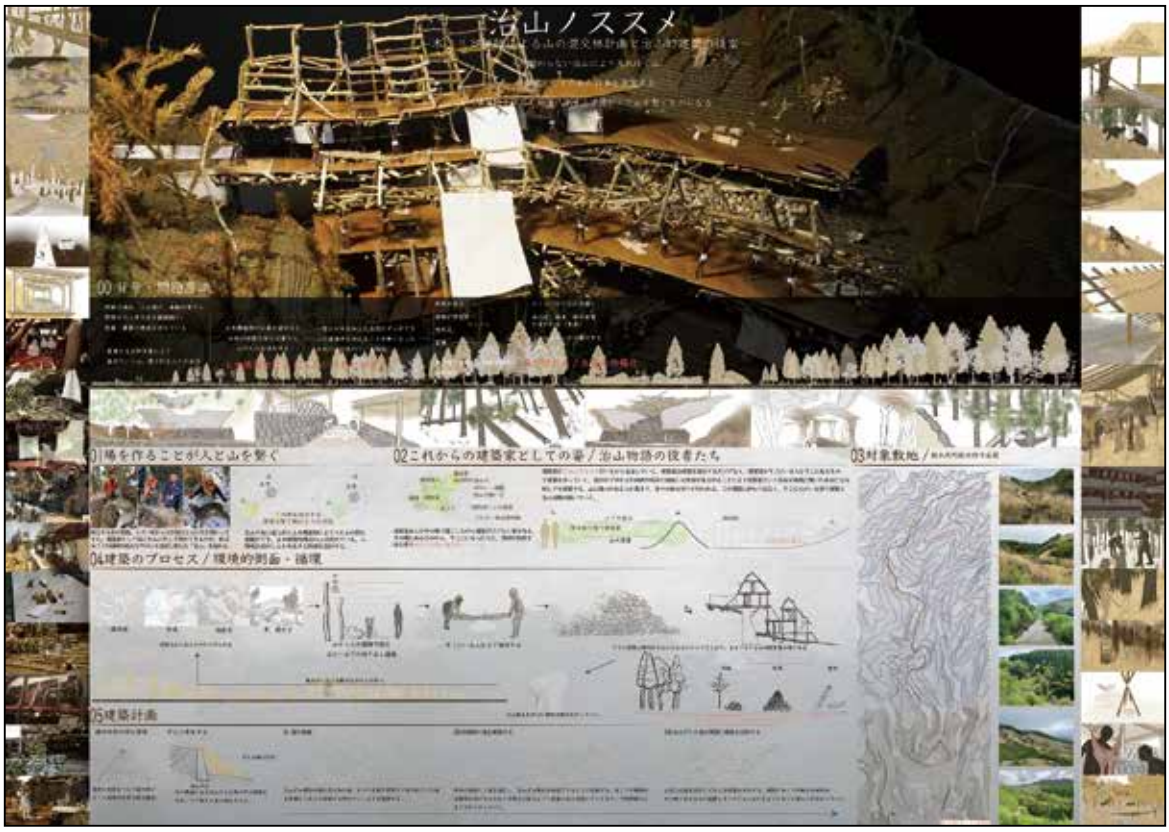
吸音力とは
アルテリアの吸音力の求め方
アルテリアの表面積
客席の表面積
厨房の表面積
床面の表面積
天井の表面積
柱の表面積
数値シミュレーションでワフーズの室全体の吸音力を予測

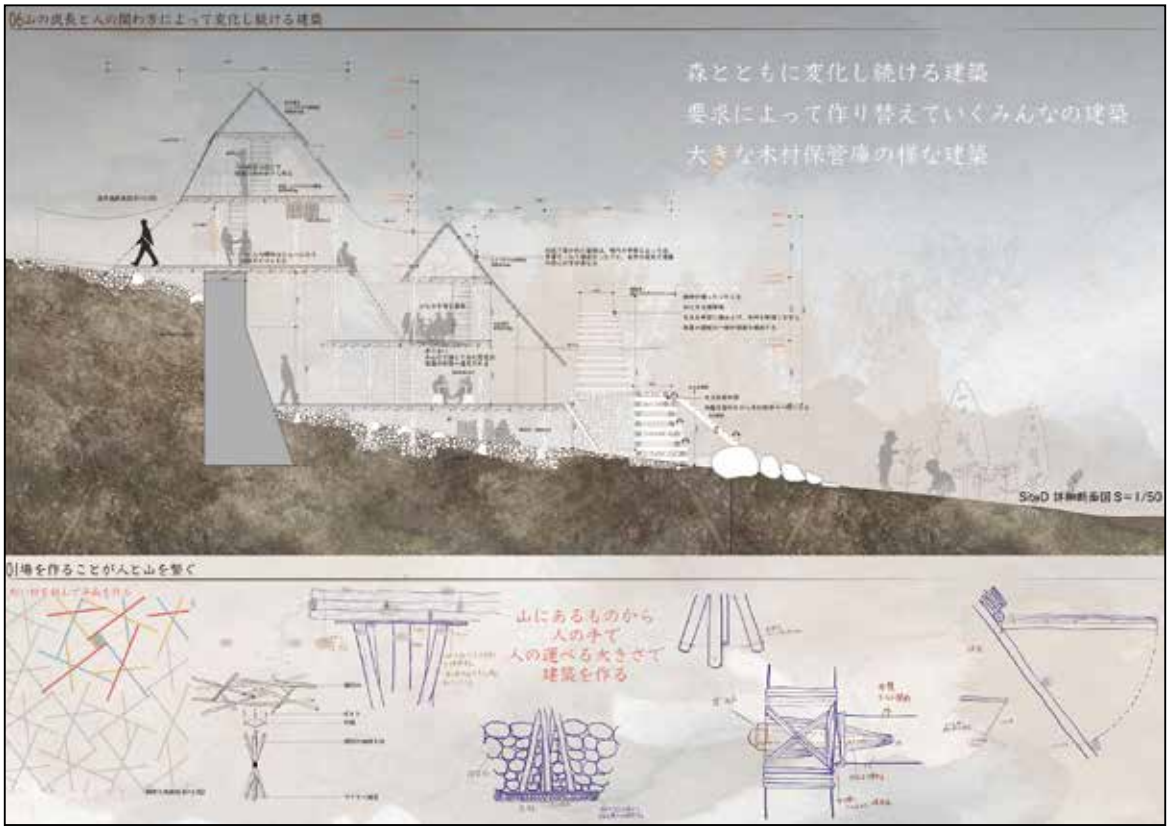
CASE1
Case.2
Case.3
Case.4

Case.5
Case.6
Case.7
まとめ
数値シミュレーションによる予測結果
今後の課題

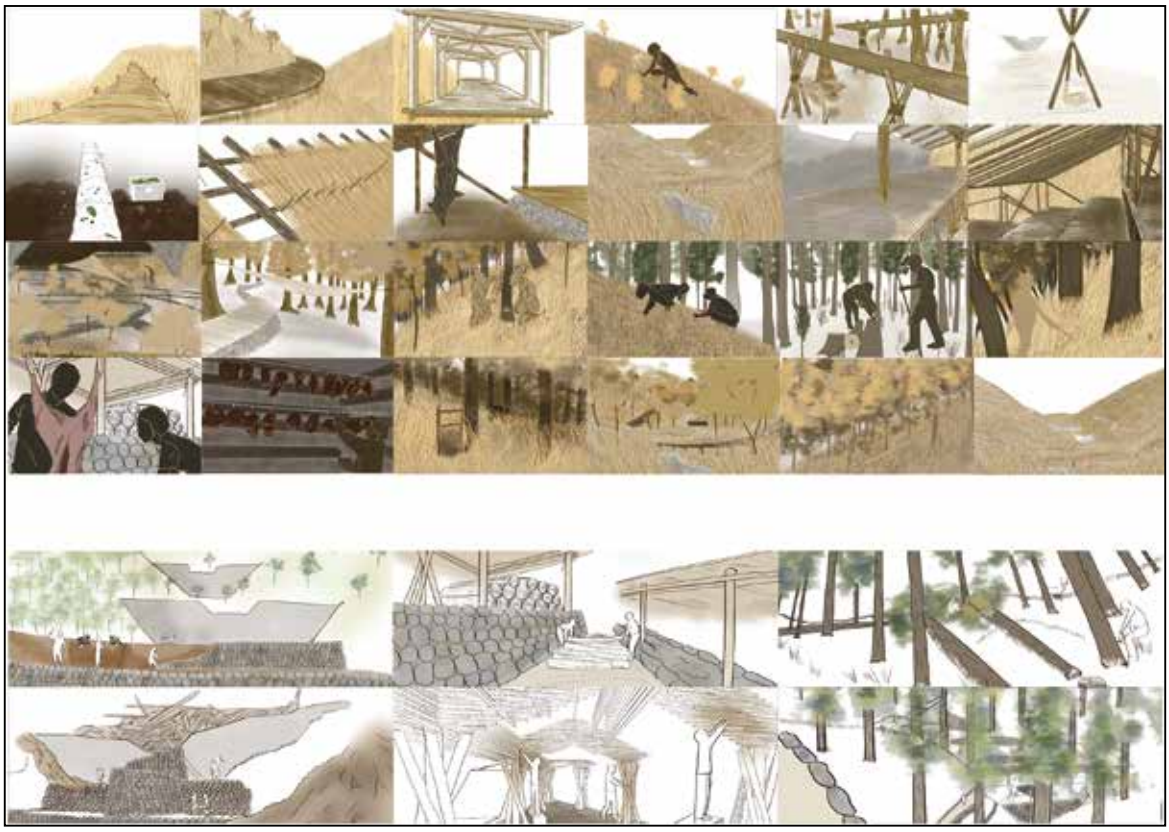
■治山のススメ ～治山的建築と山の混交林計画による人と山の関わり方の再構築～

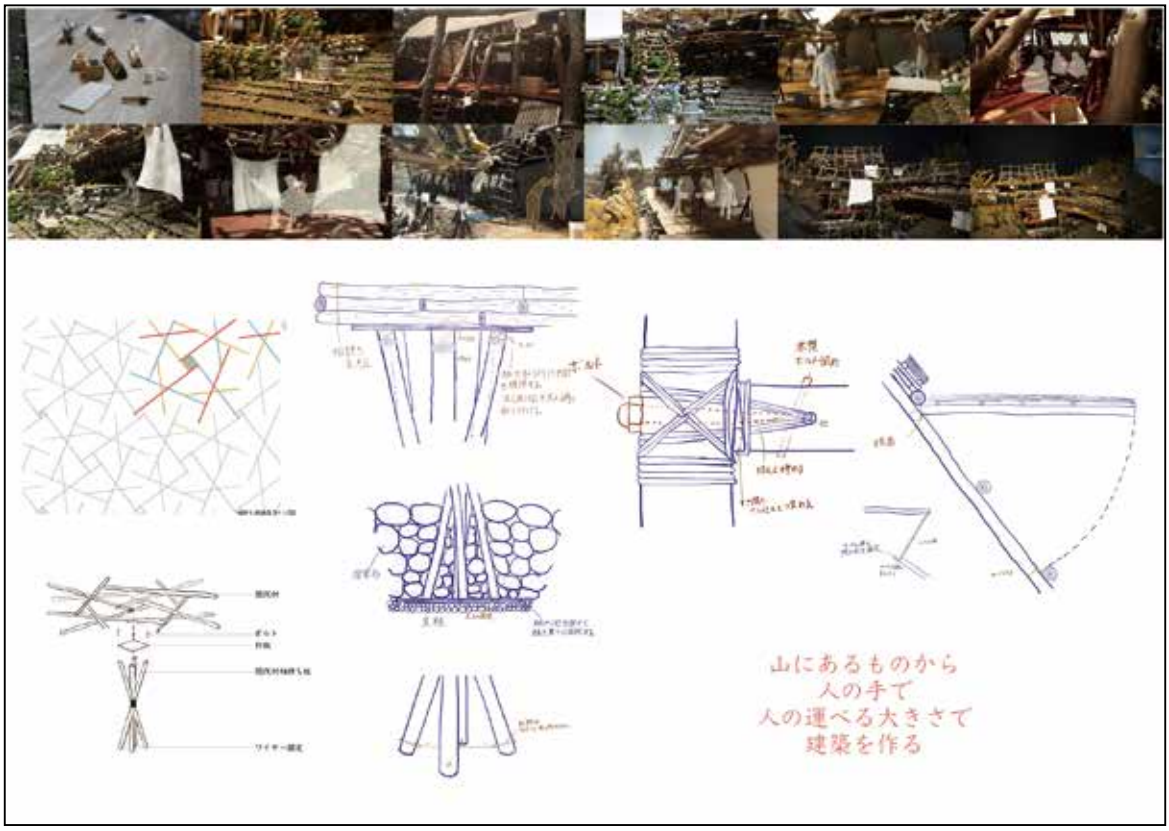
20UH033　志賀桜空





日本建築学会　全国大学・高専卒業設計展示会への出展
月刊「近代建築」別冊「卒業制作」掲載





学生のコメント

「スパコンを利用した上路式鋼製アーチ橋の地震時終局挙動の解析」 20UC048　西田　竣介

スーパーコンピュータと聞くと皆さんはどのような印象を持つでしょうか。私は研究室配属を検討し始めたとき、スパコンという言葉を聞いて触れてみたいという興味を持ち挑戦してみることにしました。

スパコンを用いた研究は想像以上に難しいものでした。解析モデルの把握や解析によって出力されるデータの管理が特に苦労した点です。出力データの管理については数 TB のデータの中からデータを探索するため円滑な作業が行えない点が課題でした。その課題を解決するため Python を利用したプログラミングを行いました。初めて取り組むプログラミングにかなりの時間を費やして学習し、成果として必要なデータだけを抽出するプログラムを作成し、円滑な作業が可能となる環境を整えました。このツールを用いてアーチ橋の安全性照査について検討を行い、既往の研究よりもより詳細な部材レベルでの分析を行いました。

今回の研究を通してスパコンを使用してみたりプログラミングをしたりと、今までにない多くの経験をすることができました。その過程で難しい内容、わからないことに何度も直面し、失敗を繰り返しました。その度にやり方を考え模索し、失敗してもまた違う手法で挑戦し、知識を蓄え成長することができました。今回の研究で、自らで考える力を身についたのではないかと感じています。他にも研究を通して得たパソコンスキルをはじめとする多くの知識はこれからの社会人生活でも基本となり、確実に役立つものだと思います。多くの困難があった研究生活ですが、奥村先生の多くのご指導のおかげで貴重な経験をすることができました。心より感謝いたします。また、協力してくれた研究室のメンバーをはじめ、大学生活をとても有意義な時間をしてくれた友人がいたからこそ、充実した研究生活となりました。ありがとうございました。

指導教員のコメント

奥村　徹

地震時に構造物がどのように壊れるのか？またある部位が壊れたとしても、構造全体として安全な範囲であるのか否かを数理的にどのように表し、それが工学的な現象とどのように対応するのか？簡単そうで実は難しい問題です。前者（どのように壊れるの？）に対しては実験という直接的な方法が挙げられますが、規模の大きな構造物に対しては物理的にも経済的にも現実的ではありません。このような場合、数値シミュレーションにより予測するわけです。しかし、そのシミュレーションの信頼性や精度はやはり、リアルな現象と比較しなければ分かりません。西田君の研究は、本研究室で実施してきた振動台実験の詳細な計測データに基づき精度検証がなされた信頼性の高いシミュレーション手法とスーパーコンピュータの大規模な計算能力を合わせることで、実大構造の実験に準ずるレベルの信頼性の高い評価手法を実現し、これを用いて地震時における不静定次数の高い複雑な構造物の崩壊性状について多角的に検討したものです。このような知見の蓄積が、冒頭に述べた後者の問題（構造全体の安全性評価）における工学的な観点からの裏付けとなっていきます。研究成果もさることながら、私が指導教員としてとくに評価しているのは、答えの用意されていない課題に挑戦的に取り組んだ姿勢です。独学で Python を学び、大規模な解析データを効率的に処理するプログラムなどを作成しました。今までの授業スタイルとは異なり、研究は大変だったと思いますが、同じ研究室の小金丸君をはじめ他研究室の仲間とも仲良くやっていたようで、よい経験になったのではないでしょうか。卒業後の活躍を期待しています。これからも挑戦する姿勢を忘れずに。

スパコンを用いた上路式鋼製アーチ橋の地震時終局挙動の解析

20UC048　西田竣介

1.　はじめに

鋼製アーチ橋やトラス橋などの特殊橋梁ではレベル 2 地震動に対して弾性設計が行われる．これは多数の部材からなる複雑な構造物の実験や信頼性の高い解析を行うことが困難であり，地震時終局挙動について十分な知見が得られていないことが背景にある．当然，通常の耐震設計の範囲では弾性範囲に抑えるため安全側の対応となるが，設計の想定を超える規模の地震に対してはこの限りではなく，ある部材の破壊を起点とした進行性破壊の可能性を否定できない．一方で，不静定次数の高い構造においては，構造系内のある一部材が破壊した後も構造全体系としては，部材間の荷重再配分効果により最大耐力点までの余裕が残されている場合も考えられる．この場合は経済的な合理性を欠くことになる．本研究室では，骨組構造の崩壊挙動を対象とした振動台実験を実施し，その再現解析により数値解析手法の精度検証を実施してきた．本研究では，精度検証を行った構造解析ソフトウェア SeanFEM をスパコン上で用い，地震作用下の上路式鋼製アーチ橋の高精度の大規模解析を実施し，部材の破壊挙動と構造全体系の耐力の関係において載荷履歴が及ぼす影響について検討した．

2.　研究の概要

2.1　解析の概要

既存のはり要素で作成されたアーチ橋モデルを高精度かつ大規模なシェル要素モデル（図-1）に変換して解析を行った．詳細な結果が得られるシェル要素モデルはデータの規模が大きく，通常の PC での解析が行えないためスーパーコンピュータ（以降スパコンと呼ぶ）を利用した．アーチ橋のシェル要素モデルを部材ごとに領域分割し，185 個の各計算ノードを利用して解析を行った．解析ソフトウェアには本研究室で実施した振動台実験 [1] により検証した SeanFEM をスパコンに移植したものを用いた．解析結果の可視化には Paraview を用いた．

図-1　シェル要素モデル

2.2　スパコンについて

解析には名古屋大学情報基盤センター「不老」[2] を利用した（7.782PFLOPS，ノード数 2304，110592 コア）．スパコンでは複数の計算ノード（CPU＋メモリ）間の情報を MPI により伝達し並列計算を行うことで一つの計算機として大規模な計算を行うことができる．しかし出力されるデータが大規模となるため，解析結果を抽出する際のデータのハンドリングが課題であった．本研究の一部として，数 TB に及ぶ大規模な解析データから必要なデータを抽出し管理するプログラムを作成した．

3.　作成したプログラム

Paraview で解析結果の可視化処理を円滑に行うためには，ネットワーク上の HDD ベースのファイルサーバに保存した数 TB に及ぶ大規模データから必要な情報のみを抽出し，ワークステーション上の SSD で IO 処理することが望ましい．出力データ名の規則性を利用して必要なデータを探索し，一つのディレクトリに整理するプログラムを Python で作成した．これにより図-1 のように，解析後のアーチ橋モデルの変形形状の描画処理等を容易に行えるようになった．

4.　アーチ橋の耐震解析

スパコンによる解析を活用した事例としてアーチ橋の安全性照査について検討した．ここでは時刻歴応答解析と Pushover 解析の結果を比較することで載荷履歴がアーチ橋の最大耐力に及ぼす影響について検討した．Pushover 解析では時刻歴応答解析において最大反力が生じた時刻（4.99s）に着目し，この時

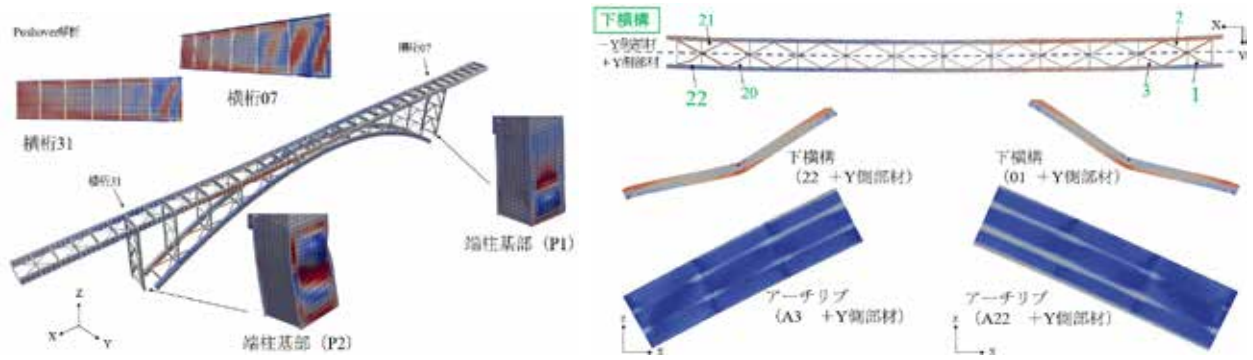


図-2 Pushover 解析による損傷モード

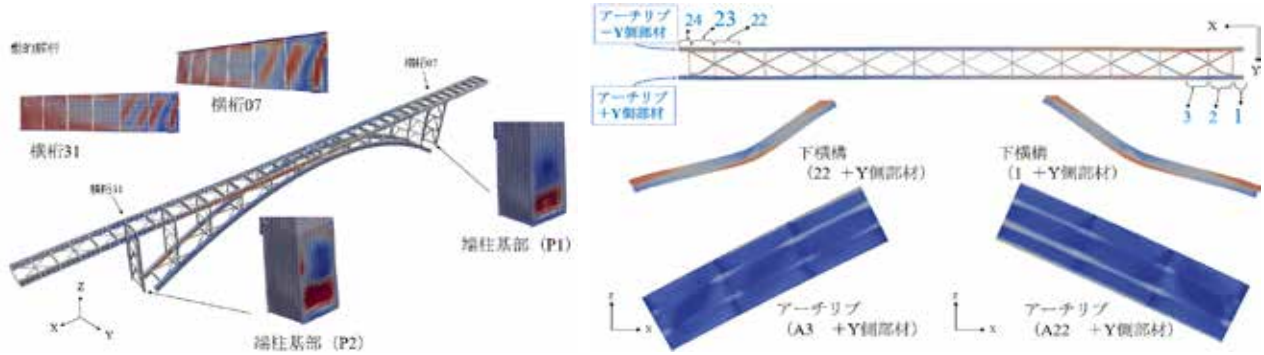


図-3 動的解析による損傷モード

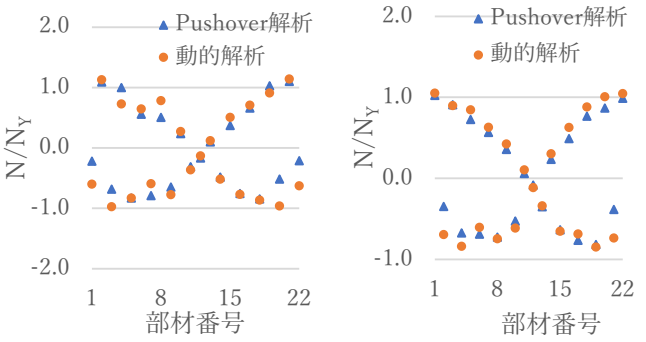
刻に構造系に作用している地震作用力を用いた．構造内の着目部材として，アーチ，端柱基部の各部材に着目した．

4.1 損傷モード

Paraview を利用して，解析後のモデルの変形状況を**図-2**，**図-3** に示す．これらの図からは下横構の複数部材に全体座屈と端柱基部で局部座屈，端柱と接続している横桁でせん断座屈が見られた．

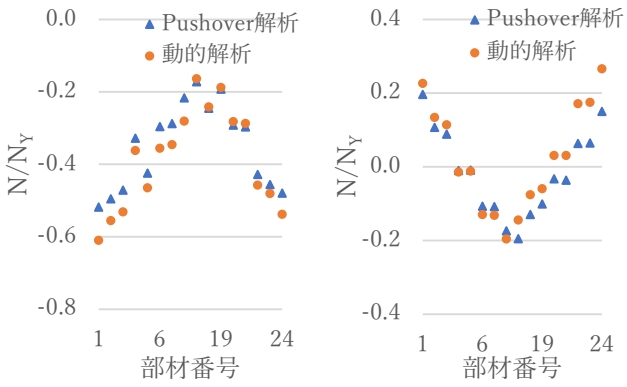
4.2 各部材の荷重分担

Pushover 解析と動的解析において変形状況に違いが見られたため，両解析における N/N_Y の関係を**図-4** と**図-5** に示す．下横構部材では**図-2**（右上）に示す部材，アーチ部材では**図-3**（右上）に示す部材で値に差が生じていることが分かった．以上より，動的解析では各部材が着目時刻に到達するまでの繰り返しの履歴の影響で，分担する内力が Pushover 解析による応答と異なっていることがわかる．



a)+Y 側部材　b)-Y 側部材

図-4 下横構部材の軸力の比較



a)+Y 側部材　b)-Y 側部材

図-5 アーチ部材の軸力の比較

参考文献：1）奥村徹，松村政秀，野中哲也：振動台実験による対傾構を有する骨組構造の地震時崩壊挙動に関する検討，土木学会論文集 A1（構造・地震工学），Vol.78，No.3，pp462-479，2022.
2）名古屋大学情報基盤センター情報連携推進本部：スーパーコンピュータ「不老」紹介，https://icts.nagoya-u.ac.jp/ja/sc/overview.html

建築都市工学部
全国高等学校プロジェクトコンテスト

九州産業大学建築都市工学部全国高等学校プロジェクトコンテスト

2017年度に設立された「建築都市工学部」は、
建築　×　住居・インテリア　×　都市・土木を総合的に学べる西日本初の学部です。

コンテストについて

このコンテストは、私たちの住まい、地域、そして国土をよりよくするために、将来に向けて考えるべきテーマを、全国の高校生と一緒に考えるコンテスト形式のイベントです。

九州産業大学では、1993年から高校生の設計技術を競う「建築設計競技」を毎年開催してきましたが、建築都市工学部の設立に伴って2018年度からアイデア部門を加え、「全国高等学校プロジェクトコンテスト」としてリニューアルしました。さらに、2023年度からは「設計部門」と「アイデア部門」を統合して再出発します。

コンテストでは、〈住居・インテリア〉から〈建築〉、さらに〈都市デザイン〉の領域まで幅広い内容を扱います。高校生であればどなたでも応募・参加できます。応募作品の中から一次審査を通過した入選者には、秋の学園祭の時期に本学に来ていただき、最終発表会でプレゼンの上、各賞の入賞者を決定します。

高等学校での日頃の学習やクラブ活動などの成果を生かして、ぜひグランプリを目指して「プロコン」に挑戦してください！

課題について

2023年度　第6回課題

『未利用エネルギーを活かした、持続可能な都市・建築・インテリアの提案』

小さなことでも、大きなことでも、みんなのアイデアで、
私たちの住環境をより良くしましょう。
〈住居・インテリア〉〈建築〉〈都市デザイン〉を対象に、
どの部分でも、どのような側面からでも結構です。
高校生のフレッシュなアイデアを募集しています。

九州産業大学第6回建築都市工学部全国高等学校プロジェクトコンテスト

提出締切：2023 年 9 月 1 日必着／一次審査結果発表：9 月 29 日／グランプリ賞品 12 万円

九産大プロコン2023

課　題：未利用エネルギーを活かした、持続可能な都市・建築・インテリアの提案

歴史を振り返れば、都市や建築は文化をはぐくみ、風景や風土と化して今も息づいています。すなわち、持続可能な都市や建築がその原点にあるのだと思います。一方で、多くのエネルギーを消費する都市や建築の省エネルギー、環境負荷低減は欠かせません。

そこで、都市や建築の原点を紐解き、私たちの身近にある未利用エネルギー（未だ利用されていないエネルギーや資源・素材など広く捉えてください）を活かした、これからの都市・建築・インテリアについて提案してください。

現実的かつ具体的な提案はもちろんのこと、今は無理でも将来の実現に夢を重ねることも可能です。次代を担う若い皆さんの斬新なアイデアに期待しています。

小さなことでも、大きなことでも、みんなのアイデアで私たちの住環境をより良くしましょう。
住居・インテリア〉〈建築〉〈地域・コミュニティ〉の領域を対象に、どの部分でも、どのような側面からでも結構です。
日本国内の高等学校に在籍する生徒であれば、どなたでも参加できます（高等専門学校は除く）。
多くの高校生のフレッシュなアイデアをお待ちしています。
応募作品に対する一次審査通過者を九州産業大学（福岡市）に招待し、最終プレゼンテーションの結果、グランプリ以下の各賞を決定します。
＊裏面に応募要項

▲ 2023 年度プロジェクトコンテスト募集ポスター

総評　審査委員長　建築学科　教授　北山広樹

総評

「未利用エネルギー」という言葉は、建築の「環境・設備」分野を専門とする筆者にとっては、古くて新しい言葉である。最初に耳にしたのは1990年頃であったと記憶している。「環境共生」等の言葉とともに、化石燃料の消費を抑制する新たなエネルギーとして注目された。人々が生活する都市の中で、これまで利用されなかった都市排熱や温度差エネルギーを総称したもので、これらの有効活用が積極的に試みられていた。福岡市西区のシーサイドももちでは、地域のオフィスビルをはじめドーム球場やホテル、ショッピングモールなどの冷暖房が、博多湾の海水を利用した地域冷暖房により行われており、この供給開始が平成５年であった。それから20年以上の歳月が流れ、再び、コンテストのキーワードとして「未利用エネルギー」をいただき、今回のテーマ設定に至った。

今回のテーマは、上述した本来の未利用エネルギーをより広く捉え、資源や素材などこれまで使われていない様々なものを活用して、持続可能な建築・都市・インテリアの未来を提案してもらおうと考えたものであった。面白いアイデアや発想を展開いただき、夢物語でも良いので、私どもの学部のこれからにも刺激を与えるような作品に期待した。しかしながら、期待に反して結果は応募数19件と振るわなかった。「未利用エネルギー」という言葉の認知の低さや持続可能性という抽象的な要求、さらには従来と異なり設計やアイデアなどの部門をなくして一本化したことなどが要因として思いつくが、より精査したうえで今後のテーマ設定のあり方を検討する必要もあろう。

さて、応募作品19点については、2023年９月21日（木）に開催された審査委員会において厳正に審査が行われ、うち７作品が入選作品として選出され、最終審査に進みました。最終審査会（2023年11月５日（日）開催）では、グランプリに相当する作品はなかったものの金賞２作品、銀賞１作品、銅賞２作品、奨励賞２作品が選出された。いずれの作品も今回のテーマの意図をそれぞれが読み解き、様々な視点から取り組んだ提案作品であり、提出物だけでは見えない、隠れた奥深い考えに基づく提案ばかりであった。

歴史を振り返れば。都市や建築は文化をはぐくみ、風景や風土として私たちの生活に今も息づいている。すなわち、都市や建築の原点こそ、持続可能性だと考えます。いま、エネルギー多消費のトップランナーである都市・建築が原点に戻って見直すことこそ、もっとも必要なことだと、今回のコンテストを通じて伝えられていれば幸いである。

金賞　成蹊高等学校　戸谷　阿佐子

「砂漠都市」

今回のテーマに対して、正面から取り組んだ作品のひとつといえる。現在、都市の砂漠化が進んでいるといわれており、砂漠はネガティブなイメージを与えます。しかし、この提案では砂漠の地下に未来都市を構築しようというものです。頻繁におこる砂嵐を活用した砂力発電が新エネルギーとして導入されており、地下空間は生活エリア、産業エリア、ビジネスエリアにゾー

ニングされ様々な社会活動が行われ、そこに新たなアンダーグラウンドコミュニティーが形成される。穏やかな気候と地下深層水を利用した豊かな水により人に優しい、持続可能で快適な都市が構築される。本人自らが描いたこのようなドラスティックなシナリオに加えて、東京湾の海ほたるを例とした地下空間の検証、砂力発電の細かい仕組みや発電量の試算も具体的なデータとして示され、検証が十分とはいえないが金賞に値する作品として高く評価された。

金賞　静岡県立浜松工業高等学校　堀野　陽太

「つながる笑顔」

かつての地域では、子どもたちは大人に助けられ、大人は子どもの笑顔を生きる糧とした。この共助関係は数年来のコロナ禍によって希薄化し、交流の衰退した地域から子どもの笑顔がなくなり賑わいを失っている。もう一度、共助関係を取り戻すために、子どもの笑顔エネルギーを活用した持続可能な建築（住まい）の提案であった。中庭を囲むように計画された住まいには、室内や屋外、屋根に様々な遊具が配置され、遊具にはその特性を活用した発電システムが組み込まれている。学校から帰ったときやお休みの日には、これらの遊具が子どもたちの遊びを誘発し、大きな笑顔エネルギーと電気エネルギーを産み出し、大人も元気になっていく。子どもの笑顔を未利用エネルギーとして捉え、さらに遊びと発電を結びつけた建築的な提案は、そのアイデアも含めて評価が高く、金賞として認められた。

銀賞　香川県立高松東高等学校　大西　岳

「讃岐の音、奏でる家」

地域資源としての石材に着目し、その文化的、建築的な歴史を踏まえての住まいと暮らしの提案であった。瀬戸内海に浮かぶ島で、石材として使い道のない日常にある小石を利活用して、風で鳴る風鈴や雨で鳴る水琴窟、叩いて音を出す陶琴など癒しの音を奏でる仕掛けを考え、それらを石積みされた円状の塀に沿って配置することで、敷地のなかに響く音が癒しの暮らしを演出するものです。持続可能な地域資源としての着眼点は面白く、石材に関する調査も細かく、円状の塀による音響効果もよく考えられていたが、住まいの間取りや音を奏でる仕組みの細かい部分が読み取れなかった。これらの具体的な内容が加えられれば、より評価も高かったと思われます。

銅賞　滋賀県立彦根工業高等学校　服部　志雄

「山紫水明　～自然とともに～　」

地域の気候や風土を取り入れたパッシブデザインの提案であり、雨水と雪氷水を未利用エネルギーとして捉え、これらを積極的に活用した２階建てのカフェの設計であった。降った雨や雪解け水は屋根中央から２階の庭に滝のように流れ、建物を貫通するガラス張りの四角柱を介

して地下の貯留槽に導かれる。また、床暖房で溶けた雪氷水も生活用水として利用され、雨が少ないときは水の循環利用もできる仕組みとなっている。基本的な建築図面と模型写真で構成された提案は、建築的にも大変わかりやすく高評価であったが、審査委員をもう一歩引きつけるまでには至らなかった。

銅賞　滋賀県立彦根工業高等学校　藤田　ひかり

「花鳥風月」

季節ごとの自然風と雨水を活かした住まいのパッシブデザインが提案された。２階建ての住まいには、南北面に配置された連子窓で強い風を捉え、壁の上下に設けた丸窓から室内へ導かれる。室内の壁は少なく、天井ファンによって上下方向の空気循環を促進するとともに、上部の丸窓から排気する仕組みが季節ごとに詳細に検討され、その内容も図示されていた。また、地下には雨水の貯留槽もあって、雨水循環システムも併設されている。基本的な建築図面やパースと模型によって示された提案は大変わかりやすく高評価であったが、審査委員をもう一歩引きつけるまでには至らなかった。

奨励賞　静岡県立浜松工業高等学校　村上　惇

「循環する店」

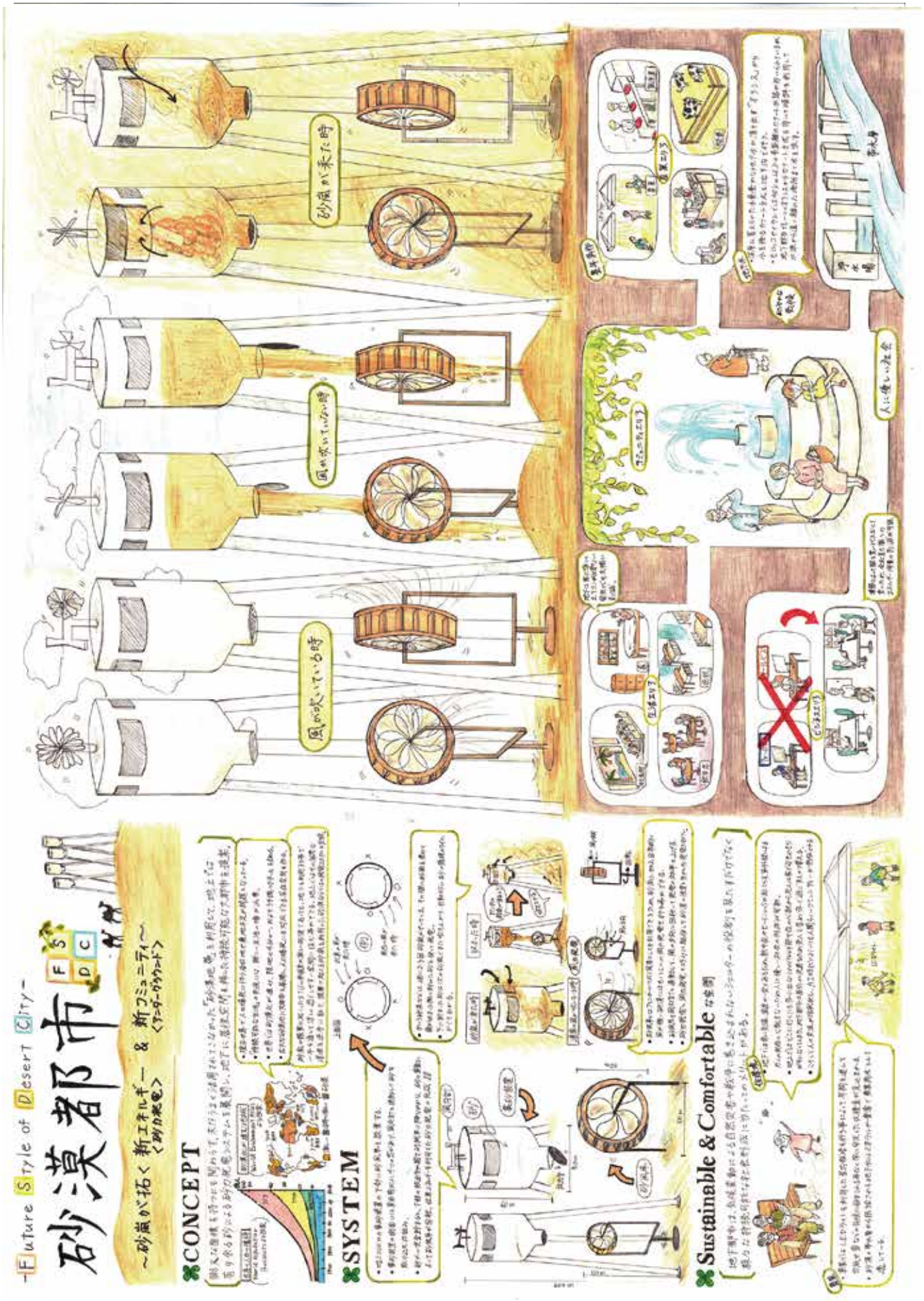
いちばん身近な題材をテーマにした作品であり、生ゴミの堆肥化と食の循環を産み出すように店舗と農家をつないでいる。実際に堆肥化に取り組み、循環を試みた経験を持つ筆者としても、共感できる提案であった。レストランの生ゴミを堆肥化し、それを使って提携農家で育てた野菜を調理に利用する。また、大きな店舗での排熱を電気として循環利用する。身近な食と温度差エネルギーである排熱へ着目した点は評価できるが、それらを活かした持続可な提案としてはやや物足りない感は否めず、もう一歩を深められていればより良かったと思われる。

奨励賞　仙台市立仙台工業高等学校　豊沢　真鈴

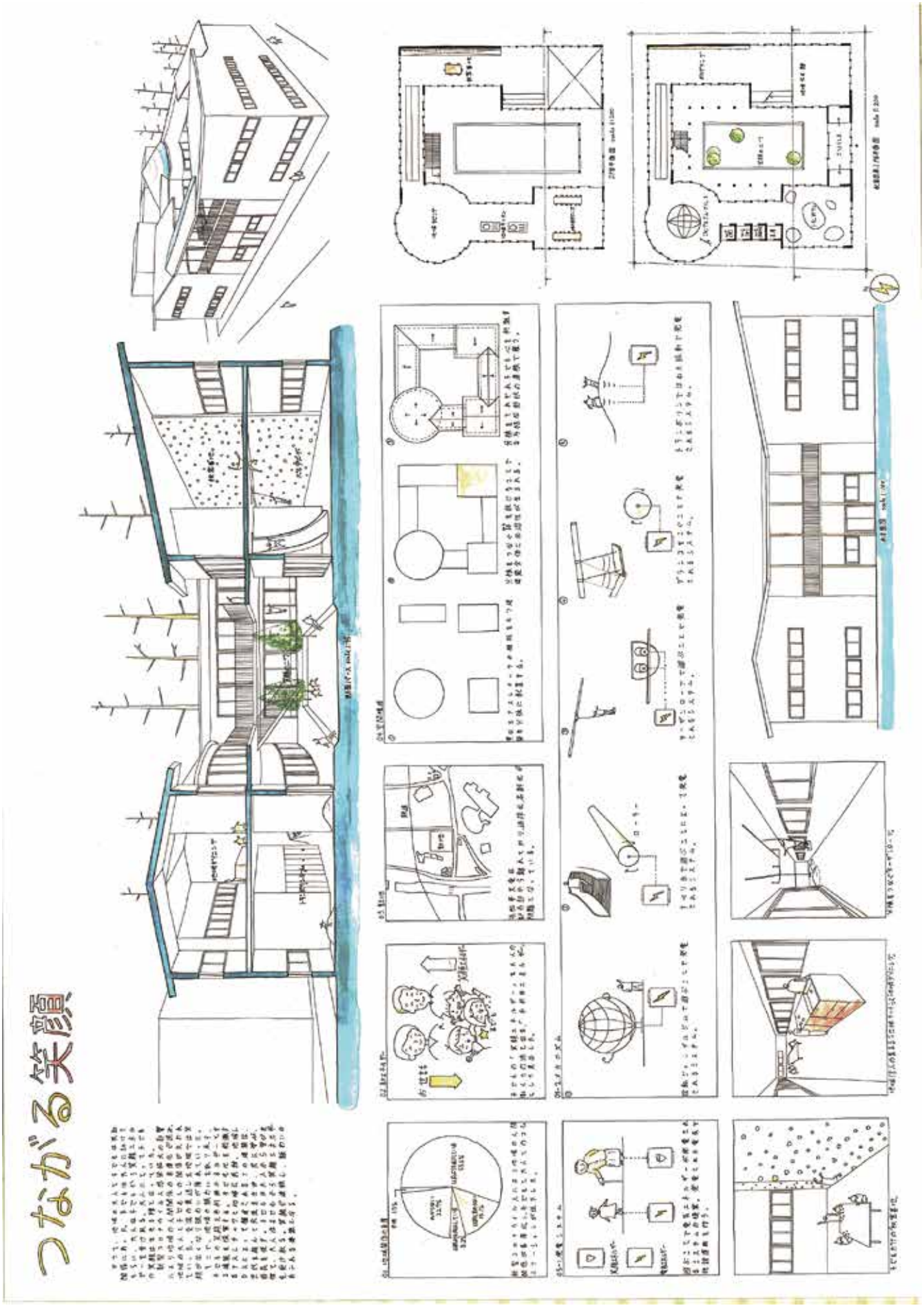
「FACE　GATE」

自然の風、光、水と共生する住まいのパッシブデザインの提案である。複数の門形構造体を入れ子状に組み合わせた構造を軸に、南北面のカーテンウォールから太陽光を取り入れ暖かく明るい空間を、東西面からの自然風は床スラブにあいた大小の穴を通じて上下の風通しで涼しい空間を提供する。また、屋上には非常用水も兼ねたプールが併設され、ルーフポンドの役割を担うと同時に、震災時の制震装置として働く。基本的なパッシブ手法を取り入れた門形構造のデザインは面白く、建築図面やパース等でわかりやすく表現されていたが、提案した空間に対してより深い考察があれば良かったと思われる。

金賞 ｜「 砂漠都市 」戸谷 阿佐子



金賞　｜「　つながる笑顔　」堀野 陽太



讃岐の音、奏でる家

～癒しの暮らし～

コンセプト

さぬきの石 × 建造物＝癒しの暮らし

香川県は、日本で一番面積の小さい県として知られており、よく知らない人にとってはただの田舎と思われがちですが、災害が少なく、1年の60%（249.5日）が晴れで、日本で最も晴天が多い県です。その温暖な気候により生活がしやすいのが特徴です。美しい瀬戸内海の多島美、食文化としても全国的に有名な讃岐うどん、近年では、島々を舞台にしたアートの祭典「瀬戸内国際芸術祭」が開催されており、現代美術を魂して世界中から人が訪れるアートな県です。

「瀬戸内国際芸術祭」の効果により、過疎化で問題になっていた島々に観光客や移住者の増加しています。港や公共交通機関が整備され、レストランやカフェ、民宿ができる等、街の景観も現代的になり、より良く変化しています。この状況を後世にまで維持する為には、多くの人が住み続けたくなるような建築をデザインするアプローチが有効と考えました。

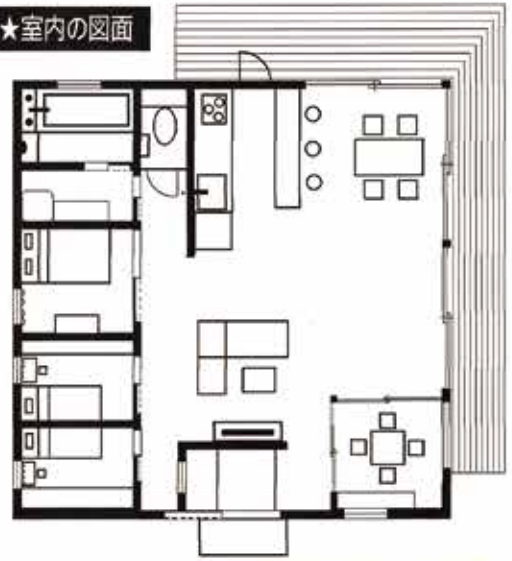
この提案は高松港から20分程の距離にある女木島を舞台にしています。女木島のもつ文化や風土の良さを活かし、自然と調和む新しい姿として、人々の心をワクワクさせたり癒しを与えたりする空間として演出しました。また地域資源の活用として、香川県の"石"に着目しました。「庵治石」や「サヌカイト」といった名石は、実際の生活空間にはあまり溶け込んでおらず、地域の資源として魅力的な活用がされていないのではないかと考えました。今回は、香川の地域資源である"石"と美しい瀬戸内海に囲まれた"島"に着目し、「音で癒される」住まいや景観デザインを提案します！

★ポイント

女木島には元々は、オーテと呼ばれる石を高く積み重ねた塀があり、島独特の景観を見ることができます。その塀は冬の季節風から家々を守る防風防波壁の役目があります。庵治石は、彫刻家のイサム・ノグチにも愛された石で、繊細な細工も可能な細やかな石質から、古くから墓石材、石灯籠などの細工物に利用されています。庵治町では「石灯かりロード」という石の照明で避歩道を照らすイベントもあり、石を生活に取り入れようとする動きもあります。またサヌカイトは、別名カンカン石とも呼ばれ、叩くとカーンカーンと高い金属音を発し、心地よい余韻を残して響きます。この音は、1/fの揺らぎとも言われ、人に癒しを与える効果があります。サヌカイトの音色が生活空間の中に自然に存在すれば、仕事や人間関係等で、心身にストレスを感じている人を癒せるのではないかと考えました。

この提案は、石の魅力と音が鳴る・響く仕掛けを取り入れています。

★室内の図面

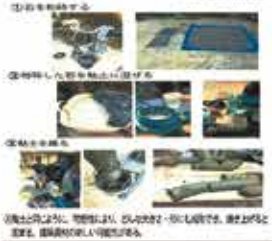


★地域資源の利活用

〈使い道のないサヌカイト の小石が音の出る素材に変わる！〉

五色台には、使い道のないサヌカイトの小石が転がっています。その小石を粉砕し、粘土に混ぜて陶土にすることで、叩くと音がなる材料となります。

サヌカイトの小石を粉砕して製作した「サヌカイ陶琴」は、サヌカイト本来の音と同様の高く澄んだ音が鳴ります。そして、サヌカイトを利活用した材料として、インテイリアやエクステリアに活かすと、自然の風や雨のエネルギーによって、癒しの音色を響かせることが可能になります。可塑性をもつ 地域資源ですが、陶芸の陶土のような素材に変えることで、どんな形にも成形することができ、建築の一つの資材としての可能性を秘めていると考えました。



★癒しの音を奏でる仕掛け

（サヌカイトが奏でる音源）
- 風鈴等の扇で鳴る仕掛け
- 台風音等の雨で鳴る仕掛け
- 陶琴等、叩いて音を出す仕掛け

★石についての説明

＜香川の石材に関わる文化や地域資源＞

①『サヌカイト』

五色台の地質構造概念図

坂出市役所HPより

サヌカイトは、五色台や屋島をはじめとする本州北部地域に広く分布する古銅輝石安山岩の一種で、瀬戸内地域に起こった火山活動によってマグマが地表に噴出し、冷え固まってできた岩石です。

全国でも数カ所でしか産出が知られておらず、珍しい岩石です。また、音の良いサヌカイトは香川県の五色台のみでしか産出されず、きわめて珍しく希少な岩石です。

1964年の東京オリンピックの聖火式で使用され、2020年のオリンピックでも※記載より聖火式で使用されました。

②『庵治石』

『TIME AND SPACE』イサム・ノグチ

香川県高松市郊外の庵治町・牟礼町にまたがる雌峰「五剣山」で採掘される庵治石は、国産の最高級品で、日本が誇る銘石と言われています。庵治石の美しさである石目は、「細目」と、細目より少し粗くて白っぽい「中目」に分けられ、「細目」は緻め細かい目をしており、白い部分と黒い部分が織りなす「斑（ふ）」の模様がふわりと浮かんで大変美しいのが特徴です。

香川庵治町には イサム・ノグチのアトリエがあり、石屋と協働して作られた作品が数多くある。左の写真は、高松空港に設置されているモニュメントです。庵治石は、彫刻だけでなく、その緻めの細やかさから、茶室作品やインテリア、エクステリアと幅を変えています。

③『オーテ（石垣）』

香川県高松市女木島の女木島港周辺に多く見られます。穏やかな気候の瀬戸内海ですが冬場は風が強く、季節風が吹くと、島の南な位置する宝峰から吹き下ろす西風（オトシ）が、海水を巻き上げ民家に吹き付けます。その風から民家を守る働きをしています。

独特の島景観で観光地としても知られています。自然に対峙する先人の知恵と技術も大切な文化と資源の1つであることが特徴です。

〈3種類の石について〉

	石の種類	特　徴	産出地
①サヌカイト	安山岩	別名：讃岐岩・カンカン石 叩くとカーン カーンと澄む音。	坂出市
②庵治石	花崗岩	きめ細かさ、粘子の大きさで評価されている。緻密とない。	庵治町・牟礼町
③オーテ（石垣）	玄武岩	石垣の塀。冬の季節風や海水から民家を守る。	男木島・女木島

★女木島についての資料

＜鬼ヶ島伝説の残るロマン＋Art の島＞

★癒しの音が響く構造

（中国 / 天壇公園　建築学の構造からヒントを得た！）

天壇公園は北京城の南東に位置する、1420 年に建造された円形の美しい建物「祈念殿」。1998 年に世界遺産登録された、中国最大最古の建築様式物です。皇帝学は円形の壁に取り囲まれています。中に入ると、祈念殿の小型版のような建物で、壁内で音を出すと壁際の人に伝わるようになっています。この構造を活用し、女木島のオーテの形状を円形にすることで、どこにいても音が響くのではないかと考えました。

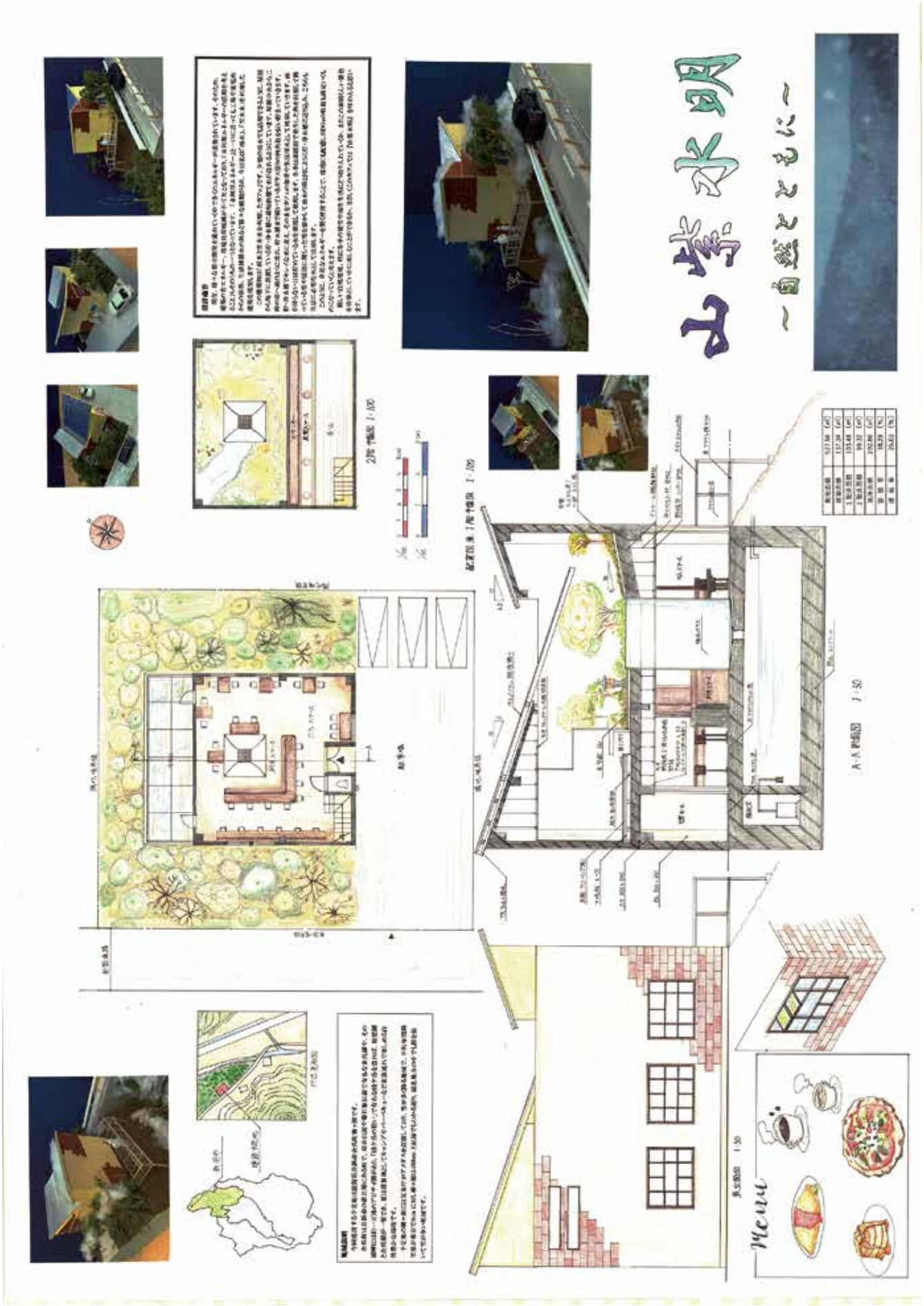
自然が織りなす潮水の音や鳥の声、サヌカイト の音の、それが混ざり合う音であったとしても、音の反射を利用した構造により、どこにいても癒しの音を聴いたりすることができる。

円形のオーテ断面

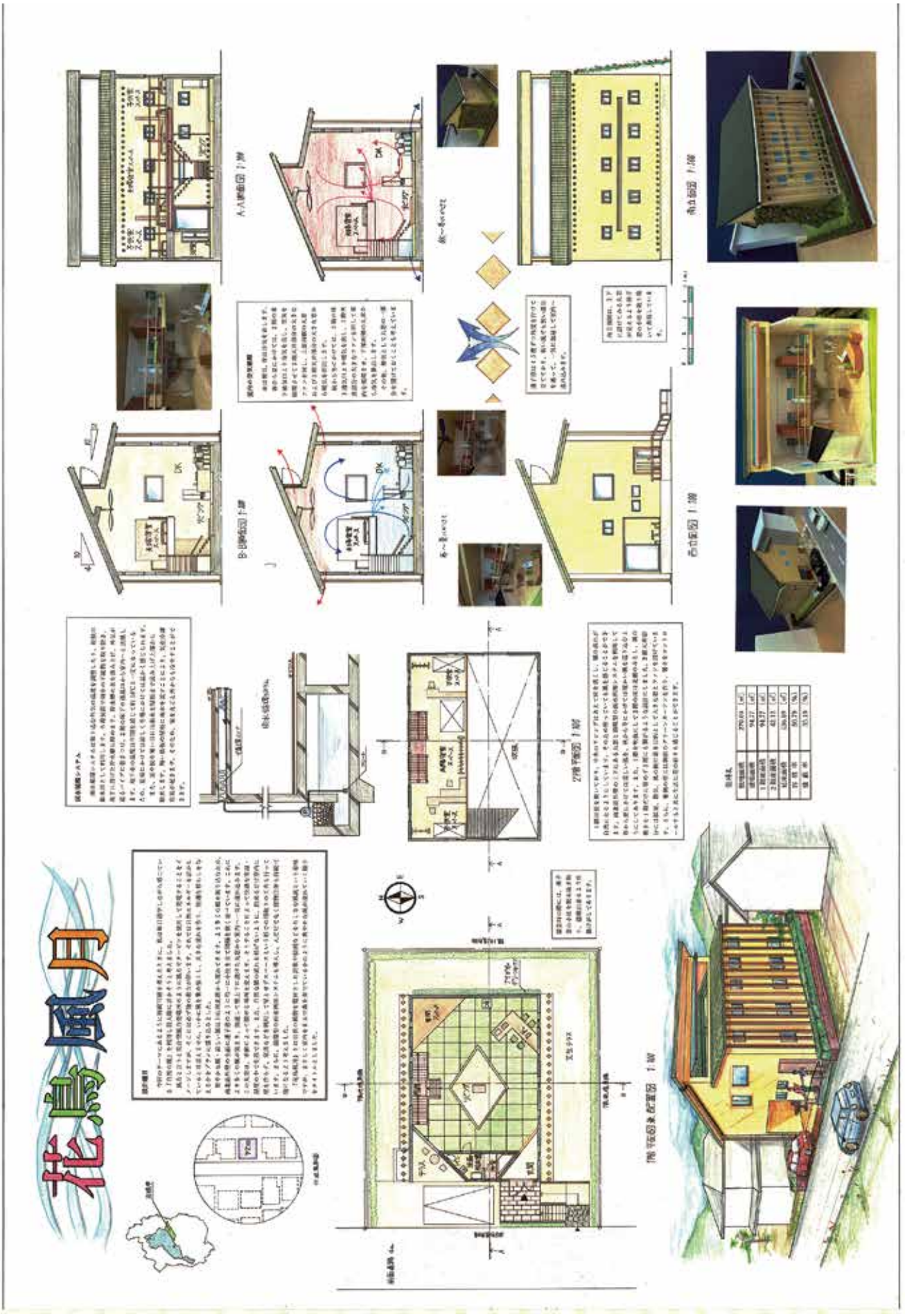
消滅寸前であるオーテは通常、四角形であるが、音を響かせる構造にするために、円形に石を積み上げる。石は高さ約4m程度とすることで塀内で演奏することができるだろう。

建築物や敷地に風鈴や鳥笛を設置したり、地面に水琴窟を埋め込んだりすることで癒やしの音をとどけられる。自然の素色を眺めると同時に、癒しの音色を聞くことができるようになります。この都会では得られない環境を提供できる建築物となっていることが魅力的だと思います。

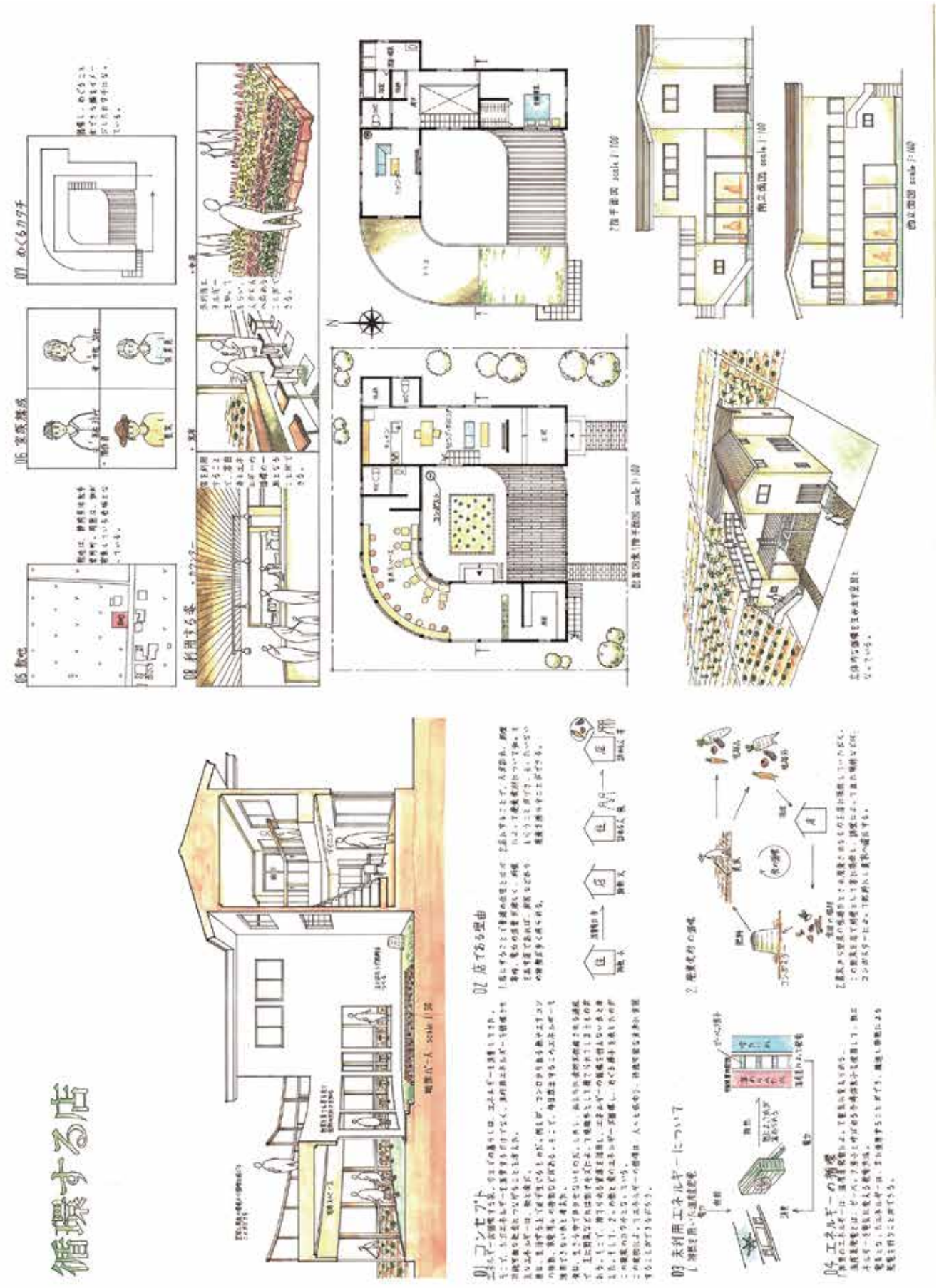
銅賞　|　「　山紫水明　」服部 志雄



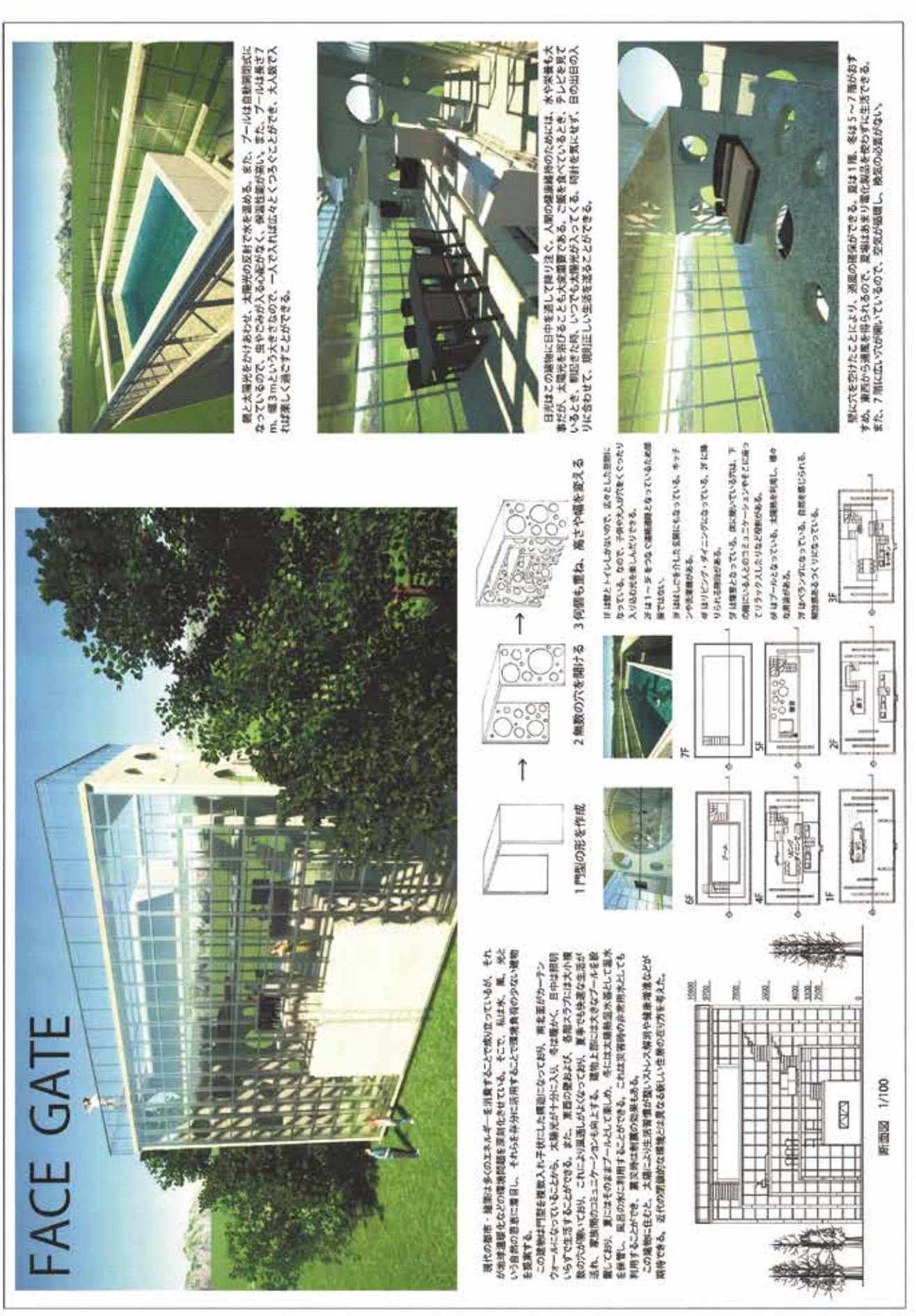
銅賞　｜「　花鳥風月　」藤田 ひかり



奨励賞　|　「　循環する店　」村上 惇



奨励賞　|　「　FACE GATE　」豊沢 真鈴



教員・学生受賞一覧

■建築都市工学部長賞

学生の自主的な諸活動を表彰することで、学生の学習意欲や学力、就職力、技術者としての資質の向上に寄与し、九州産業大学や建築都市工学部（以降、本学部と称する）の発展に寄与することを目的として、建築都市学部に所属する学生のうち、以下の項目において顕著な成果を上げた個人または団体を表彰するものです。

＜優れた卒業研究への表彰＞

No.	氏 名	学科名	受賞業績名
1	中村　　結	建築学科	運営形態や活動拠点からみた子ども食堂の環境整備課題 －福岡県内の子ども食堂を対象として－
2	西田　竣介	都市デザイン工学科	スパコンを利用した上路式鋼製アーチ橋の地震時終局挙動の解析

＜本学部が掲げるカリキュラム・ポリシーに関連した自主的、積極的な活動への表彰＞
＜本学部が掲げるディプロマ・ポリシーに関連した能力の獲得に向けた自主的、積極的な活動への表彰＞
＜他学部や学外と連携した活動を通じて、本学部へのプレゼンス向上や発展に寄与した活動への表彰＞

No.	氏 名	学科名	受賞業績名
2	佐々木空良 岩瀬　龍昇	住居・インテリア学科	産学連携による障がい者向けグループホームの設計
3	巴　　開陸	都市デザイン工学科	インフラと生物多様性を考える環境教育プロジェクトでの活動

■その他 学内外での受賞一覧

No.	受賞日	主催団体など	受賞名	受賞者名	学生教員の別	所属学科	対象テーマ	備考
1	令和６年３月15日	日本コンクリート工学会九州支部	日本コンクリート工学会九州支部支部長賞	濱脇　　蓮	学生	建　　築	シェル要素とソリッド要素を併用したピロティ建築物の３次元FEM解析	
2	令和６年２月10日	日本インテリア学会九州支部	日本インテリア学会九州支部支部長賞	地域貢献実践スタジオ	学生	住居・インテリア	駅舎と地域の計画と設計の研究～九産大前駅の改築を課題として～	主担当学生 小田くらら・永井　和奏 （JR九州との共同研究）
3	令和５年４月25日	地盤工学会九州支部	地盤工学会九州支部優良学生賞	砂田幸太郎	学生	都市デザイン	フライアッシュからの六価クロム溶出抑制における不溶化剤やセメント混合の影響	
4	令和６年３月15日	福岡県建築士会	福岡県建築士会賞	野口　靖仁	学生	建　　築	温泉津温泉 ―海の歴史を思い起こす―	
5	令和６年３月９日	土木学会西部支部	土木学会西部支部研究発表会優秀講演者	岩本　竜弥	学生	都市デザイン	突き固めによる軽石の物理特性とCBRの変化	
6	令和６年３月10日	土木学会西部支部	土木学会西部支部研究発表会優秀講演者	森　　優貴	学生	都市デザイン	搬出期間の短縮を目指した浄水汚泥改質の検討	
7	令和６年２月23日	日本インテリアデザイナー協会南日本エリア	2024学生インテリアデザインコンテスト奨励賞	竹内　　颯	学生	住居・インテリア	connect the 4（間伐材を使ったスツール）	
8	令和６年３月８日	福岡市、福岡市教育委員会、福岡市美術展運営委員会	第55回（令和５年度）福岡市美術展「福岡市議会議長賞」	吉村　祐樹	教員	住居・インテリア	桧の間伐材を使った手すき和紙の灯り	
9	令和６年３月７日	一般社団法人空間芸術TORAM	福岡アジア美術館 国際公募展「第13回躍動する現代作家展」入選（出展作品採択）	諫見　泰彦	教員	住居・インテリア	インテリアアート「あかりのありか」 積み木であかりのインスタレーション	
10	令和５年11月16日	公益財団法人空気調和・衛生工学会九州支部	2023年度空気調和・衛生工学会九州支部長賞　奨励賞（ポスター部門）	佐々木空良	学生	住居・インテリア	急性期病室及び一般病室の室内環境調査	香川研究室
11	令和６年３月15日	九州産業大学建築都市工学部	令和５年度　建築都市工学部長賞	佐々木空良 岩瀬　龍昇	学生	住居・インテリア	産学連携による障がい者向けグループホームの設計	香川研究室
12	令和６年３月15日	九州産業大学建築都市工学部住居・インテリア学科	令和５年度　建築都市工学部住居・インテリア学科卒業研究　ゼミ優秀賞	日下部朋陽	学生	住居・インテリア	学生食堂空間の音響性能評価	香川研究室

オープンキャンパス紹介 ｜ 建築学科

本年度のオープンキャンパスは、２週にわたり開催し、７月16日と７月23日の２日で、計297名の高校生や保護者の方にご来場いただきました。本稿では、開催時の様子をご紹介させていただきます。

１．学科紹介

学科紹介コーナーでは、分野別の研究室の紹介や（材料・構造、意匠・計画、設備環境系）、受講コースの紹介、卒業生の活躍等についての説明パネルの展示を行いました。来場者へは、教員が適宜補足説明をさせていただきました。

２．製図授業作品展示

在学生の製図等の授業での作品展示を行いました。１年次の授業では手を動かし創造する体験から始めることを紹介しました。訪れた高校生は、授業で実際に制作した空間模型や、名作建築のトレース図面及び軸組み模型等の展示物を興味深く鑑賞する姿が印象的で、時には熱心に教員に質問をする高校生もいました。また、３年次では集合住宅等の大規模建築の設計課題に取り組むことを、優秀作品の展示を通して紹介させていただきました。

３．卒業設計作品の展示

４年次の卒業設計の優秀作品の展示を行いました。迫力のある模型や平面図に、来場者の方々は真剣に見入っている様子でした。実際に指導した教員から、当時の様子や、どのようにしてスキルを身につけていくかという指導の過程についても説明をさせていただきました。

４．ABC建築道場作品展示

課外活動として実施している「ABC建築道場」の作品を移設し、来場者の方々にも見ていただく機会を設けました。道場で毎日設計に向き合っている学生たちの努力の結晶である模型作品を展示しました。また、ABC建築道場が主催の「建築レクチャーシリーズ」でご講演いただいた建築家・構造家の方々のパネル展示も行いました。

１年次前期授業で製作した空間模型

３、４年設計優秀作品の展示

ABC 建築道場の作品展示会場

本年度のオープンキャンパスは、７月16日と23日の二日間にわたり、来場型で開催されました。住居・インテリア学科では、作品展示、カリキュラム説明、模擬講義などを開催しました。

【カリキュラム説明】

教務委員の信濃准教授より、2022年度からスタートした「空間設計のスペシャリスト」を育成する独自のカリキュラムについて説明がありました。説明会終了後には、来場者から多数の質問がなされ、学科の学びについての関心の高さが窺えました。

写真１　カリキュラム説明の様子

【在学生との交流①】：実習科目の優秀作品紹介

設計実習の優秀作品展示と作品の制作者である学生本人からの説明を行いました。

写真２　設計作品について語り合う来場者と学生

設計実習科目での思い入れのある作品について、熱の入った説明や来場者とのやり取りがなされ、会場は活気に満ちていました。

写真３　設計作品展示会場の様子

【在学生との交流②】：プロジェクト型教育の紹介

プロジェクト型教育を紹介するコーナーでは、スタジオの配属学生から来場者に、居住環境、地域貢献、リノベーションなど多彩なプロジェクト内容を具体的に説明しました。

写真４　プロジェクト型教育のパネル展示の様子

【模擬講義：北欧名作照明・家具の魅力】

北欧の建築・デザインに関する著書を多数出版している小泉教授による、北欧名作照明や家具の魅力を解説する模擬講義がありました。来場者のみなさんは名作照明やその断面模型を観察したり、名作椅子の座り心地を確かめたり、熱心に参加している姿が印象的でした。

オープンキャンパス紹介 ｜ 都市デザイン工学科

令和５年度オープンキャンパスが、７月16 日（日）と７月 23 日（日）の２日間にわたり開催されました。昨年度と同様、事前予約による人数制限を設けたうえで、対面で実施いたしました。本学科には、総計105名（高校生66名、保護者39名）の方々にご参加いただき、大いに賑わいを見せました。ご来場くださった高校生・保護者の皆様、ありがとうございました。また、オープンキャンパスの開催にあたり、ご協力いただいた学生・教職員の皆様、ありがとうございました。

本学科では、「学科の特色紹介（内田教授・横田准教授）」、「学科に関する相談会（山下教授・松尾教授）」、「パネルによる研究室紹介（全教員）」、「施設見学・体験実習（林教授・奥村准教授・山田准教授・佐藤准教授）」を開催いたしました。この体験実習では、土質実験の紹介、振動台実験の紹介、距離測量およびドローンによる３次元地形データの紹介が行われました。

土質実験の紹介では、卒業研究で取り組んでいる「シリカ系改良材を用いて建設発生土の土質安定処理」、「AIを用いた斜面災害発生予測モデルの構築」、「フライアッシュからの六価クロム溶出特性」について、実際に使用している材料や実験装置などを用いて紹介しました。

土質実験の紹介

パネルによる研究室紹介

振動台実験の紹介では、実験の動画と耐震実験に用いた模型の紹介、現在取り組んでいる卒業研究についてpptを用いて説明を行いました。また、人力で動く振動台を用いて地震動による構造物の揺れ方の違いについて体験していただきました。

距離測量では、来校者にトータルステーションの使い方を学んでもらい、距離を測定しました。初めてトータルステーションを触る方が多く、簡単、かつ正確に距離を測れることに驚かれていました。また、学生による測量学実習の成果（校舎周辺を測量し、作成した地図）を紹介する場面では、学生と来校者との学習内容やキャンパスライフについての活発な情報交換が行われていました。

ドローンによる３次元地形データの紹介では、近年、土木分野で活用が進んでいるドローンと、その空撮画像から作成した３次元地形データの紹介を行いました。見学に来てくださった高校生や保護者の方々は、九産大キャンパスの詳細な３次元データに驚いてらっしゃいました。

来年度もこのようなオープンキャンパスを開催でき、九産大、そして都市デザイン工学科の魅力を高校生・保護者の方々に発信できたらと思っています。

（入試広報委員　内田）

■こどもけんちく道場

こどもけんちく道場は小学生を対象に「ものづくり」の楽しさを体験してもらうことにより、将来、建築・建設を学びたい！「ものづくり」に関わる仕事がしたい！というキッカケを作りたいという思いと、学生の成長を促すために2022年度より活動を始めました。学科開講科目で学ぶ専門講義を基に、子どもたちの自由な発想や表現の個性を伸ばすこと意識しながら、「ものづくり」を楽しんでもらうことを学生自らに考えてもらいます。子どもたちに教えるという行為により、学んできたことを改めて学修し、お互いに切磋琢磨することで、学生のスキルアップにも繋がっています。大人になると忘れてしまいがちな、自由な発想力・表現力を、子どもたちからも学びながら、学生自身が大きく成長できるよう、様々な団体と学外連携を行いながら活動をしています。

主な学外連携団体

●伊東子ども建築塾福岡（伊東建築塾）

建築家・伊東豊雄さんの主催する伊東建築塾と連携し、福岡を中心に活動する建築家・大学教員の方々、そして建築系学生たちとともに、子どもたちと5ヶ月かけてテーマに沿った作品を作り上げていきます。子どもたちのサポート・交流はもちろん、建築家の方々や他大学の学生との交流は、キャリア支援や学修意欲の向上にも繋がるいい機会になっています。

●黒崎こども商店街

子どもたちの職業体験・人材育成・商店街活性を3本柱にした教育的イベントで、北九州市内および近隣の地域から毎年1000人以上の小学生が参加しています。学科で学修してきたことを基に「ものづくり」体験を、ゼロから企画し、準備から実践まで全て、学生のみで行っており、毎年、子どもたちや保護者の方々から好評をいただいています。

＜伊東子ども建築塾福岡＞

＜黒崎こども商店街＞

ABC建築道場

ABC建築道場は、私が着任した2011年からはじまり2023年度で13年目を迎えました。きっかけは2011年に３年生であった数名の学生が、私が現役の建築家だということを知って、建築サークルを立上げたいとの相談からでした。その内２名は、昨年からスタートした新カリキュラムの設計製図科目に非常勤講師として大学に戻ってきてくれました。十年一昔と言いますが、時の流れを感じます。

話は少し逸れますが、建築学科は日本では工学分野であり、エンジニア（技術者）を育成することを目的としています。そのため、日本の建築教育は一級建築士資格取得を前提としたカリキュラムとして技術的知識を優先して組まざるをえません。一方、欧米では「建築」は建築学や芸術学の分野に属し、技術のみならず美学的な能力も兼ね備えているアーキテクト（建築家）を育成します。ものづくりでは技術や知識に加え、クリエイティビティ（創造力)、コミュニケーション能力、統合する力が必要です。そこを鍛えようと思うと、４年間のカリキュラムでは収まらなくなります。そのため、ABC建築道場では正課の授業を補完する教育として以下のような活動を行っています。

１）しゅうまい

学生自身がテーマを決めて、模型で空間デザインを行い、みんなで議論を行います。毎週やるから「しゅうまい」なのですが、造形力と表現力がかなり鍛えられる「建築筋トレ」です。他大学から参加している学生もいます。

２）建築レクチャーシリーズ

第一線で活躍している建築家・構造家などを招聘して講演会を開催しています。単に講演を聴講するだけでなく、講演者の講演テーマで「しゅうまい」をつくり、懇親会でゲリラ的にプレゼンテーションを行って批評を行ってもらっています。これほど積極的な学生達を見たことがないと講演者から高い評価を頂き、就職やインターンシップの受入れに結びついています。

３）ABC建築道場の展

毎年、学内でABC建築道場の活動展示会を行っています。単なる展示ではなく、会場構成もデザインして原寸で空間をつくります。また、同時に講演会を開催し、講演者には「公開しゅうまい」の講評も行って頂いています。

４）国内外ワークショップ

毎年、学外のワークショップに参加して、他大学や外国の学生と共に切磋琢磨して学んでいます。今年は「JIA日韓合学生ワークショップ2023」と釜山市が主催する「釜山国際建築デザインワークショップ」に参加しました。

５） 学外建築イベント

建築の甲子園と言われる「SDL卒業設計日本一決定戦」や３年生以下の学生も参加できる「Fukuoka Design Review」「関門海峡建築展（旧tonica北九州)」など学外の大会に出場して、毎年コンスタントに優秀な成績を収めています。

矢作昌生

■九産大野生動植物研究会

九産大野生動植物研究会は、地域の子供たちや大人の方々に「自然の大切さ」、「自然の不思議さ」、「自然とふれあう楽しさ」を学び感じてもらい、同時に私達自身も自然環境の保護・保全のあり方を見出すために活動を行っています。活動では、自然が好きな学生が主体となり、福岡市だけでなく新宮町、熊本県熊本地方ならびに阿蘇地方など様々な地域で行っています。本報では、昨年実施してきた活動の一部を紹介します。

建築都市工学部　古野正章

活動紹介

■自然学習会

香椎下原小学校にて、香椎下原小校区の自然、特に立花山・三日月山の自然を伝える学習会を実施しました。学習会では、立花山・三日月山にいる生き物や歴史に関する特別授業を行い、その後、実際に登山をしながら様々な生き物の観察を行いました。

■唐原川清掃

地域の方々と協力して、毎年、唐原川の清掃活動を行っています。唐原川は自然豊かな河川ですが、ゴミが多い！！！ペットボトルなどの小さなゴミから、傘、テレビに冷蔵庫など、様々なゴミが投棄されています。今年度は、48袋のゴミを回収しました。これからも、地域全体が協力して、身近な自然を守っていきましょう。

■地域振興に向けた写真展

熊本地震などの災害からの復興に貢献するため、阿蘇市波野地区の方々と地域の魅力を内外に発信する活動を行っています。昨年は、阿蘇市波野地区にて、地域の方々や私達が撮影した、「阿蘇」に関する写真の展示会を開催しました。

「建築都市工学部 Year Book 2023-2024」の発刊にあたって

2017 年 4 月に発足した建築都市工学部は、建築学科、住居・インテリア学科、都市デザイン工学科の 3 学科で構成されており、住居からまちや都市、国土まで幅広い空間のデザインやインテリア、建築物、社会基盤施設などのものづくりを総合的に学び研究することができるのが特徴です。2022 年 4 月から新カリキュラムをスタートし、実践的な教育をさらに推進しています。また、Advanced Program として、建築学科の「実践的建築力養成プログラム（ABC 建築道場）」、住居・インテリア学科の「専門領域別少人数教育プログラム（スタジオ制）」、都市デザイン工学科の「都市デザインキャリア形成支援プログラム」も展開しています。

建設業界はまだまだ人手不足の状況が続いており、卒業後の活躍の場は大きく広がっています。大学では専門的な基礎知識や理論を身につけるだけではなく、その知識を具体的な状況に適用し、実際に行動に移すといった実践力を養うことで大いなる活躍が期待されます。With コロナが定着してきた中、建築都市工学部の教員や学生の活動も再び盛んになってきました。課外活動では 20 件近くのプロジェクトも活動中です。授業だけでなくさまざまな活動を通じて実践力を養うチャンスはたくさんあります。この「Year Book」を手に取ったみなさんにもぜひいろいろなことにチャレンジしてほしいと思います。

「Year Book」は建築都市工学部のウェブサイトでも公開しています。また、建築都市工学部の活動をよりリアルタイムに知っていただけるように、昨年 6 月より学部の公式 SNS（Instagram、X（旧 Twitter）、Facebook）も始めました。これらを在学生、教職員、高校生のみなさんだけでなく、卒業生や企業、地域の方々にも是非ご覧いただくことで、私たちと新しいつながりが生まれるきっかけとなり、さらには本学部の発展に寄与するものになってくれることを期待しています。もっと知りたい情報やよい企画がございましたらぜひご連絡ください。

建築都市工学部長（2023 年度）　林　泰弘

2023年度建築都市工学部機関誌編集委員会

■委員：吉村　祐樹（住居・インテリア学科）
■委員：隈　　裕子（建築学科）
■委員：佐藤　辰郎（都市デザイン工学科）
■ワーキングメンバー：
中川万理子（住居・インテリア学科）
江上　史恭（建築学科）
古野　正章（都市デザイン工学科）
■建築都市工学部長：林　泰弘
■建築都市工学部事務室長：靏田　亜矢

YearBook 2023-2024

2024年 5 月20日　印刷
2024年 5 月31日　発行
発行者　　九州産業大学建築都市工学部
林　泰弘
福岡市東区松香台2-3-1
印刷所　　ヨシミ工産株式会社
北九州市戸畑区天神1-13-5

Instagram　Facebook　学部 HP　X（Twitter）

九州産業大学建築都市工学部機関誌　Year Book　Vol. 7 / 2023-2024